329
192

始

329-1921

立志小說

復活の人

堀内新泉

大正
10.10.25
内交

「復活の人」序

努力は必ず報いられる。名も知れぬ野末の草も春來れば美しい花を持つ、一度は悲境に沈淪しても、不斷の努力健闘の齎す効果は、必ず美しい果となつて魅る日のある事は、動かす事の出來ない事實である。

本書題して復活の人と云ふ、この心持を骨子として書き上げたものである、輓近思想界が非常に惡化し來り、人は輕薄にのみこれ走つて居るとき、私は本書をして只一篇の娯樂的讀物に終らしめず、讀者がこれに依つて何物なか獲得し得れば非常に幸である。

此意味に於て本書は當時私の最も力を入れたものゝ一つであるが、運惡くも久しく絶版となつて居たものを今回新に裝を改めて市に出づるに至つた事は喜ばしい次第である。

埋れた居た私の此の努力も今日は斯うした美しい芽を出して復活の曙光に接したのだ、一言以て再刊の序とす

本書はもと斷腸記と命名してあつた。

大正辛酉初秋吉日

新泉生識

立志小說

復活の人

目次

一　志士の末路……一
二　新天地……四
三　木賃宿……六
四　盡きぬ緣……一〇
五　事既に成る……一三
六　貧なるかな……一六
七　天使來る……一九
八　慘又慘……二一
九　各人の任務……二五
十　死の歡樂……二八

十一　大往生……三三
十二　少勇士……三六
十三　大阪行……三九
十四　職工生活……四三
十五　營養不良……四六
十六　新運命……四九
十七　安治川丸……五二
十八　初航海……五五
十九　播磨灘……五八
二十　朝の海……六二
二十一　精神の復活……六七
二十二　職務の人……七〇
二十三　親子の恩愛……七三
二十四　感謝の紀念……七七

二十五　一喜一憂……八一
二十六　少女……八五
二十七　愛の音樂……八九
二十八　氣のいさみ……九四
二十九　幸福……九七
三十　小田卷……一〇〇
三十一　行く人……一〇三
三十二　船中の獨學……一〇九
三十三　仁と勇……一一三
三十四　花屋……一一六
三十五　瀬戸の月……一一九
三十六　菊の頃……一二三
三十七　好知己……一二六
三十八　目的の變更……一二九

三十九　主計學校……一三二
四　十　學生生活……一三六
四十一　入學試驗……一三九
四十二　歸省……一四三
四十三　月桂冠……一四七
四十四　別離……一五〇
四十五　新居……一五五
四十六　友愛……一五八
四十七　立派な婦人……一六四
四十八　嫁入……一六六
四十九　人生觀……一七〇
五　十　春の光……一七四
五十一　發心……一七七
五十二　懷舊……一八〇

五十三　母の臨終……一八五
五十四　良妻……一八八
五十五　愛と愛……一九一
五十六　肺結核……一九五
五十七　空蟬……一九九
五十八　春の悲哀……二〇三
五十九　寢委……二〇七
六　十　我が亡妻……二一三
六十一　墓參……二一六
六十二　惡寒……二二〇
六十三　療養……二二二
六十四　恩愛刃……二二九
六十五　おぼろ夜……二三六
六十六　復活の人……二四二

立志小說 復活の人目次終

六十七　海上生活……二四八
六十八　生の勝利……二五三
以上

立志小說

復活の人

（一）志士の末路

堀内新泉著

土肥三郎が初めて此の世の光を見たのは明治三年十二月三日で、場所は當時父が僑居して居つた泉州堺の、或る淋しい裏町の見るも哀な茅屋だつた。

父は和州郡山の藩士で、名を彦七郎と呼んだ。彦七郎は熱烈なる勤王家で、皇室の式微を慨き奉ると共に幕府の專横を憤り、祖先傳來の家祿を棄てゝ長州に脫走し、文久、慶應の間に亙つて王事に盡した志士の一人であつた。

彼にして能く其の志を達したならば、明治の新天地に相當の地位を得たに相違ないが、彼は維新大業の地盤の下に隱れたる石の一ッとして、功はありながら名は見はれずに世を果てた。

然らば彦七郎は何うして死んだ？

明治元年正月三日、彼は伏見鳥羽の戰役に參加し、最も勇敢に奮戰したが、戰將に酣ならんとするに當つて、側面から飛んで來た彈丸にスッと眞一文字に兩眼を掠られて我が事既に玆に畢つた。千歲一遇の此秋此際、當年三十七歲の彦七郎は地だんだん踏んで口惜がつた。餘儀なく後に送られて不完全な治療を受けて見たが、哀れむべし彼の兩眼は最う其切永く失明して了つた。

悲憤の極、彼は屑く割腹して忠義の鬼となり、永く錦の御旗を守護し奉らうかと思つた。併し又おもひ返して世の行末を見る氣に成つた。その中に同志は殘らず東に向ひ、俄盲の我れ一人大阪に止つて居た。

幸ひ此處から鄕里大和は遠くないので、人を遣つて窃に家の樣子を探らせて見ると、自分の脫藩後妻の葭江は兄弟の小供を連れて行方不明に成つて居つた。

彦七郎は宿にも大分借が出來て居辛く成つた。乞食は出來ず、糊口の道は無し、志士の末路は實に無慘な事に成つた。

背に腹はかへられぬ。時世時節と涙を呑んで、彦七郎は兼て知合の一商家を訪うて救助を乞うた。

世は其の場合々々で何うにか成るもの、主人は事情を聞いて尠なからず同情し、我が豫期して來たよ

りも嬉しい返事を聞かせてくれた。

『世の中の治まりますまで、それぢや何うか私供へ……』

彦七郎は有がたいと思つた。宿を引上げて來て見ると、中々親切にしてくれた。併し兩眼共に見えぬので、當座は兎に角前途が誠に案じられた。毎日じつとして居つては、第一氣の紛らしやうが無いので、主人に相談して按摩の稽古を始めた。

彼は由來文武兩道の達人ではあり、接骨術には一通り通じて居つたので、僅か二三ヶ月通つて居る間に、最う大丈夫按摩として世に立つ事が出來るやう成つた。

世の中に無藝な者程心細い事は無いが、何か一藝有つて居れば實に心强いものである。彦七郎は急に心丈夫に成つた。彼は或日主人に向つて、

『永々厚いお世話に相成つたが、お蔭さまで吾は最う人の揉療治が出來るやうに成つた。これから何處へなりと宿を取り、人の揉療治をして糊口を致したいと思ふ。何處へか早速宿を搜す事に致しませう』

主人は郡山の城下から出たもの、彦七郎が御物頭を勤めて居た以前の權勢を好く知つて居た。いかに時世時節とは言ひながら、その人が今人の足腰を揉まうと言はれる。主人藤兵衞は涙が胸に込みあ

げて、何と返事のしやうも無かつた。

(二) 新天地

時節を待てと藤兵衛に止められて、明治元年一杯は客分として其の家で過した。明けて明治も二年と成れば硝烟晴れて劍影納まり、王政維新の新天地に春の光が映し始めた。これまで生きた心地もせず逃げ隠れして危く生命を繋いで來た天下の志士は一躍して世の光明的方面に見はれ、各自得意の地位に有付き、洋服を着、帽子を被り、珍らしさうに靴を穿いて、盛に官員樣風を吹かせるやうに成つて來た。

世の中に友達程好い者はなく、また友達程頼みに成らぬ者はない。互に相窮して居る間こそ君僕と打解けて相談にも乘合ふが、その中に向ふは運を捕へて高く上り、此方は逸して落魄し、その境遇が變つて來ると、昔の厚い友情は眞個の一時の通り雨を見たやうに成つて、孤窠寄方なき我が舊友に對して戀々故人の情ある者は、何れの時代に於いても極めて稀なものである。

俄盲の彦七郎は多年死生を共にした以前の同志、今日は官員樣の二三を大阪で訪ねて見たが、境

遇が變つては人は誠に同情の少ないものであると云ふ事を身に泌みて實驗した。

彼は誰を訪ねて見ても、皆一樣に人變して了つて、戀々故人の情を以て溫かに我れを迎へてくれる者などは一人も見出す事が出來なんだ。彼は餘りに人の情の薄いのに驚いた。併し胸の廣い男であつたので、竟には思ひ返して悟つた。

『イヤ〳〵此方が淺間しい此方が拙い！患難は共にすべく、安樂は共にすべからず。ハヽ古人も既に言うて居る！』

これより彦七郎は、斷然故人の許は訪ねぬやうに成つた。

『マア〳〵暫く私供へお居で成さいまして、時節をお待ち成さいまし』

主人藤兵衛が斯う言つて、これまで慰めてくれた事も、今では全く頼みに成らぬ事に成つた。

明治二年の春も暮れて、世は早青葉の世界に成つた。

何時まで斯うして厄介に成つて居つた所で、彦七郎には前途に何等の望みも無かつた。

『明治元年正月三日、彼の時いつそ戰死を遂げたならば、斯うした生恥は晒さなかつたであらうものを！』

彦七郎は生の悔に捕はれて、悲憤の涙に袖を絞つた。

『この儘この土地に居て人の情を受けろも辛い！また我が身の果を昔の同志に見せるも本意ない！それよりは一層の事土地を變へて運を天に任せやう！』

彦七郎は既に固く決心して、何時暇を告げやうかと思つて居た。

その中に愈よ大阪を立退くべき機會が來た。主人藤兵衛が生きて居れば、眼の不自由な人を何の用意も無しに立たせるやうな事はしなかつたであらうが、藤兵衛は其の年の四月に病死して、後は伜の代に成つた。

五月の末に彦七郎は、これから郡山に歸ると言つて暇を告げ、少しばかりの旅費を貰つて、杖を力に北堀江の大和屋を立ち、最早暑い頃であつたので、途中で深編笠を買つて被り、尺八を腰に差して、天下茶屋を經て住吉街道の方に向つた。

(三) 木賃宿

彦七郎は虛無僧姿に身を裝し、泉州堺に遣つて來たが、俄盲のことであるので、非常に不自由な思ひをした。

人の門に立つて、かねて覺えた尺八を吹き、一文二文の惠みを受け、これから紀州の田邊まで行かうと思つた。

田邊は彼の忠僕三平の郷里であつた。

『わが妻子は三平に連れられて、恐らく向ふへ行つて暮して居るだらう』

彦七郎は兼て斯う思つて居たので、大阪を立つた後大和へは歸らずに、足は自然と此の方角に向つたのであつた。

この夜は堺に宿つた。翌日も人の門に立つて尺八を吹き、情ある人々の志を受けた。

二日かゝつて堺の町は大略廻り盡したので、その日の夕方堺を去つて、道を聞き〳〵目的地の方向に進みかけて見たが、俄に境遇の變つた爲か大きに疲れて、何うしても足が向ふへ進まなかつた。

虛無僧は杖を止めて、首を傾げて凝然と考へた。

『斯んな場合に無理をしちやアいかん、若し身體でも惡くしちやア此上の憂目を見なければ成らん。今夜は一夜堺に宿つて疲勞を休め、明日立つことにしたが好からう』

後に返して、前の夜に宿つた木賃宿に來た。

『ア、虛無僧さんお歸りか』

俄盲と見えて感が惡いので、宿の內儀が飛んで出て、

『サア何うか此方へ！』

手を引いて案內してくれた。

『有がたうござる、今夜も亦お世話さまに成ります』

『好くお出で下さつた！サア此處からお上り成さいまし』

『渡る世間に鬼はない！それでこそ自分のやうな不遇な者もお天道さまの下に生きて居られる！』

虛無僧は心の中で喜んで、座に上ると親切に、內儀は茶など酌んでくれた。

『有がたうございます！』

好い宿に當つたと、彦七郎は嬉しく思つた。その中に客が四五人前後して遣つて來た。宿は俄に賑に成つた。その話す所を聞けば、何れも下等社會の者ばかり、人間らしい話をする者は一人も居らぬ。元は一藩の御物頭をも勤めた程の彦七郎、今は見る影も無く落魄はして居るが、自然と具はる品位骨柄、彼等の中に混つて一語を發せず、たゞ默々として腕を組み、變り果てたる我が今日の境遇は夢かと疑ふ彼の心事は誠に無慘なものであつた。

日が暮れる、夜食が濟む、彼は直に枕に就いた。

枕頭では博奕が始つた。彦七郎は早く眠に就かうとしたが、最う徐々梅雨前であるので、蒲團の臭氣が鼻を衝いて、枕紙がべたついた。

彼は輾轉反側して、切ては博奕の止むのを待つた。その中に時刻が經つて、夜はそろ〳〵深け初めて來たが、博奕は容易に止みさうにも無かつた。

眠られぬ儘に彼の胸には色々の感想が沸いて來た。その中に不圖氣が付いた。

『五月——農家は今が根付の最中、沿道の村々を廻るとしても大方留守勝、こりや惡い時節に來たな！』

窃に彼は落膽した。博奕は漸く止んだと思ふと、次には睡鼾が四方に起つた。彦七郎はこれに又暫く睡眠を妨げられたが、疲勞は終に彼れを夢に引き入れた。

『オ、其許は！』

『お懷かしう存じます！』

四年振で我が戀しい妻の顏を見て、言を交すも徒瞬間、覺むれば殘月杜鵑一聲！彦七郎は血を吐く思ひの胸を抱いて、おもはず夜半の寢床に坐つた。

(四) 盡きぬ緣

昨夜の夢は覺めての後も戀しかつた。彼は渾身熱情の人に成つて、今は何を顧みる暇もなく、一刻も早く田邊を差して行きたく成つた。即ち妻子の顏を見たく成つた。

宿を立つて杖を力に堺の町を後にした。

世には實に人間の智慧分別を以て解釋の出來ぬ事がある。我等の上には屢〻ある。彦七郎は杖でカチ〳〵と道を探りながら堺の町を離れて一丁許も來たかと思ふ所で、何うしたのか深編笠の緒が自然に解けた。

この時間近く向ふから二十七八の憂ひに憔悴れた一人の婦人が、五ッか六ッ許にも見える愛らしい男の子の手を引いて此方へと來かゝつた。

此方は盲目そんな事は元より知らう筈は無い。深編笠の緒が解けたので、足を止めて杖を胸の邊へ持たせ、一度笠を脱いで鬢の毛を撫であげ、また笠を被つて面を隱した時、

『アヽ旦那さまではございませんか』

忽ち叫んで呼ぶ聲諸共、柔かな溫い手が此方の手首をひしと握つた。顏こそ見えね、何で我が最愛

の妻の聲を忘れやう。今も今とて戀ひ憔れつゝ歩いて居つた彦七郎、驚愕、狂喜、たゞ夢心地して大地に立ち、

『オヽ馥江！』

その手をひしと握り返して、

『小供は無事か、何うして此處に？』

『はい』

馥江は悶えて、

『コレ坊や、これがお前のお父さまだよ』

馥江は袖に顏を掩うた。彦七郎は探つて小供の頭を撫で、

『これは太郎か』

『いゝえ、その子は次郎でございますの』

樣子を知らねば喜んで、

『大きう成つたの、兄さんは？』

馥江は俯して凝然と泣き、

『今一月早くお目にかゝる事が出來ますれば、太郎も此の世に居りましたに…』

「えゝ！」

「不憫な事を致しました！」

「それぢや太郎は？」

『この四月の月初に、當地で麻疹に罹りまして、彼の子は亡りましてございます！』

彦七郎は默々として、見る〳〵ハラ〳〵と涙を流し、

『この世に居れば最早十歳、嘸や大きく成つたであらうと、明暮便に思うて居つたが、ア、世は何事も何事も！』

葭江も暫く共に泣き、

『最う此の世ではお目にかゝられぬ事だと諦めて居りました。それに斯うして思ひがけ無く此の世で又お目にかゝりましたのは、何うやらまだ私は夢のやうな氣が致します！』

彦七郎は感謝して、

『盡きぬ夫婦の緣だと見える！オ、兩眼共に全く見えぬ。イヤ眼疾に罹つた譯ではない。これは去年の正月三日の日、伏見の戰爭に眞先かけ、敵と銃火を交へた際、側面から飛んで來た彈丸にスッと兩

眼を掠られて其儘盲目、其許達も嘸や苦勞を致した事であらう！三平は如何致したな？』

『ア、申し後れて居りましたが、彼は良人がお立ちの後、嚴しい御詮議を受けまして、國で牢死を致しましてございます』

『ナニ牢死致した？三平が…』

聞く事も聞く事も、彦七郎には實に意外な事ばかり、まるで我が家の燒跡を眺めるやうな心地がした。

(五) 事既に成る

こゝは大道、長く立つて話すには人目がある。葭江は一先話を止め、盲の夫の手を引いて我が僑居へと導いた。

場所は堺の裏町で、鹹に哀な住居であつた。併し四年振で闖らず妻子と再會を遂げた彦七郎に取つては、世界中の何處よりも此處が一番懷かしく思はれた。

一別以來の夫婦の話は積り積つて長かつた。話は何方も悲劇ずくめで、互に笑顔を合はせるやうな

慶事は一ツも無かつた。中にも一番夫婦の心を傷ましめ、噂をしては互に袖を絞つたのは、長子太郎の死であつた。

『彼の子が居りましたら、今日はまあ何んなにか喜ぶ事でござんせうに…』

『吾も誠に力が落ちた！次郎は何處へ居る、此處へ來い！』

膝を叩いて父は呼んだ。四歳の年に別れたので、次郎は少しも記憶が無かつた。會つた當座は母の傍ばかりに附いて居つたが、血は爭はれぬもの、段々馴れて父の膝に腰かけた。彦七郎は我が子の顏を一目見たいが眼が見えぬ。

『ア、折角斯うして廻り合つても、盲に成つては力が及ばぬ！』

『何の良人、斯うしてお目にかゝりまして、親子夫婦が一緒に住み、朝夕顏を合せる事が出來ませうなら、世に此の上の喜びがありませう！』

『イヤそれは左樣だ！親子夫婦が離れ〳〵に成つて居つては、何んな結構な生活をしやうと、霞江淋しいものぢやのう！まして不自由な其の中に、妻子の顏も見られぬとあつては、人間としてこれより切ない事はあるまい。ア、おもひがけ無い所で廻り合つて、吾は夢のやうな氣がして成らぬ！』

『私とても同じ事、事實とは思はれませぬ。若し彼の時良人がお笠をお脱り成さらずば、四年振で父

子夫婦が行き合ひながら…』

彦七郎は感謝して、

『さればだ！吾は田邊に訪ねて行き、何んなに落膽したであらう！尙不思議な事があるわ、昨日の夕方吾は既に堺の土地を立たうとしたが、何としても氣が進まず、後へ返して一泊し、その爲今日は廻り合つたが、神佛の御加護で無くて、人爲では出來る事でない！』

『私も今日は午後から知邊の人を訪ねやうと思ひましたが、今朝不圖訪ねる氣に成つて、家を出たのが思へば不思議！それに昨夜は寢付かれず、圖らず良人にお目にかゝつた彼の夢は、今日斯うした喜びのある前兆でありましたやら、不思議ずくめの事ばかり！世には斯うした事もあるものでござんせうか』

彦七郎は顏を上げ、

『イヤ人の世は皆不思議縮めぢや！それも不思議、これも不思議、明日の事はおいて今夜にも亦如何なる奇蹟に會はうも知れぬ？世は泣くべからず樂しむべし！この世は一概に斷じて失望すべきもので無い！吾も伏見の戰爭に斯う兩眼は失つたが、今日おもひ返して見れば、この兩眼を失つたが爲に、斯うして圖らず親子夫婦の再會を遂げられたのかも知れぬ？世は何が幸福に成らぬとも限らぬ！今日

の我が此の喜びは、兩眼を失つた位は安い税である。斯う落魄して廻り合つたは面目無いが、喜んでくれ祝うてくれ、この身は假令盲に成らうと、彦七郎の本懷は達したぞ！』

流石は志士の、葭江は笑顔、

『承はれば幕府は倒れ……』

『いよ〳〵御門の御代と相成つた！ア、思ひ奉れば本懷至極！この願ひが叶はうなら、家も要らぬ生命も要らぬと覺悟をして、子にも語らず妻にも告げず、國を脱して長州へ走つたが、既に願ひは叶うた身體、最う何う成らうと遺憾は無い！』

『嘸御本懷でございませう！何は無くともお祝に、私は一寸その邊まで行つて參ります』

欣々として葭江は路地を出て行つた。

『お母さま！』

少し後れて、次郎も後を追うて行つた。

(六) 貧なるかな

彦七郎は今日圖らず我が妻子に再會して、世には斯うした喜びもあるものかと疑つた。また今日の此の喜びは四年以來の辛酸困苦を十分に償ひ得て尙餘りありとも思つた。

假令僑居の家にもせよ、妻子と一緒に住んで見れば、眞の我が家も同樣に懷しかつた。多年住み馴れた我が家に戻つて來たやうな氣持がして、五體の節々が一齊に寛いでズン〳〵緩むやうに覺えた。

葭江や次郎が出て行つた後で、彦七郎は六疊の眞中に仰向に成つて、四年以來始めて心から大の字形にグッと手足を伸して寢て見た。

併し嬉しくて眠られなかつた。彼の胸には又色々な感想が浮んで來た。

『聞けば我が妻子は其後四年も此の土地に住んで居たとの事である。自分は去年以來僅三里隔てゝ大阪に居り、それが今日まで何うして會はれなかつたのであらう？』

彼の疑ひは忽ち解けた。

『イヤ〳〵今日まで待たねば矢張會ふ緣が熟さなかつたのだ！』

彼が思ひの緒は前に續いた。

『今日緣が熟して會つた。この先の運命は何う成るだらう？』

彼は心に又言つた。

『自分は脱走する。扶持に離れる。親戚供は迷惑がる。忠僕三平は牢死する。殘餘の奴等は逃げて去る。其處に折好く此の堺から妻の乳母が訪ねて來た。窃に物を賣つて多少の金を才覺し、この土地に來て早四年、貯金は盡きる、我が子には死に別れる、その上便に思ふ老婆まで死んだとやら……。國に歸るも面目なく、止まるも心細い！今日では僅に人の賃仕事などをして、その日を過しては居るものゝ、家内は今母子二人が身の振方に夜の目も安からぬ此際、圖らず自分が此の土地に遣つて來た。廻り合つたは互の喜び、併し此の身は既に廢人、これから先は何と成り行く事だらう？』

何を言つても便ない身の上、彦七郎は未來に亙つて恐れたが、彼は又飄然として心廣く思ひ返した。

『イヤ／＼恐れる事は無い。疑ふにも及ばぬ事、世は善いやうに出來て居る！未來は兎に角過ぎ來つた過去四年の成行は如何にも巧い筋書で、人間業のやうに見えて其の實は左樣でない！世には確に神がある佛がある！ヨシこの先は唯おのれの守るべき所を守り、その他は一切自然に任せて恐れまい！太郎を奪られたのは情ないが、まだ一人與へられて居る。我々夫婦は假令草の間に世を果敢なく果つるとしても、子は何う云ふ幸福に會はぬとも限らない！世は何事も其の時次第、これより心を廣く有つて今日を歎かず明日を樂しまう！人間は足る事を知らざれば心常に安からず、足るを知れば茅屋の裡に住んでも世は樂しい！功名何物ぞ、富貴亦何物ぞ？ア、貧なるかな、貧なるかな、それが却つて

世は氣安い！左樣ぢやこれから此の土地に留まつて、盲は盲相當な事をして、關はん人の足腰でも親切に揉みながら世を樂しむ事にしやう！』

夫彦七郎の思案が既に定まつた時、妻の葭江は酒を買ひ、下物を調へて歸つて來た。

(七) 天使來る

これより夫婦は同棲して堺で暮す事に成つた。夫彦七郎は人の揉療治をし、妻の葭江は人の賃仕事をして、一子次郎を育てながら暮す中に、世の中は有がたいもので、土地の人にも段々と馴染が出來て、さのみ不自由も感せずに暮して行けるやうに成つた。

三郎は此の翌年の十二月三日を以て父母が堺の僑居の家に生れた。

家に人が一人減ると殖えるでは大した相違である。彦七郎夫婦は長男太郎を亡つて大いに心細く思つて居た所に、今又一人の男の子を授かつたので、太郎が生れ變つて來たと言つて、夫婦共に喜び勇んで、何方も急に元氣が出て來た。

夫婦は小供の生先を樂しんで、その後四年許堺で暮して居る中に、多少の貯蓄も出來、加ふるに

三郎と四ッ違ひで、今度は美しい娘の子が授かつた。

丁度九月九日の日に生れたので、父は名を菊代と命けて、

『今に又土肥の家は榮えるぞ！』

一杯酌んで喜んだ。葭江の肥立も誠に良かつた。その後足掛三年間、夫婦の僑居は誠に平和に月日が經つて、次郎は十三、三郎は七ッ、菊代は三ッに成つて、家は毎日賑かなことで、夫婦は旅で暮して居るやうな氣持もしなかつた。

今年は明治も既に八年と成つて、來年あたりは士族に金祿公債が下ると云ふやうな噂もあつた。

夫婦は喜んで居つた。

明治八年も既に暮れて、今年は早九年と成つた。熊本の神風黨が起つたのは此の年、西南の役は此の翌年、旁〻以て九州の方からは穏かならぬ噂が風に乘つて來たが、彦七郎夫婦の身邊は極めて平和で、夫婦は此の先又と再び泣くやうな事變があらうとも思はなかつた。

明治九年正月三ケ日も既に濟んだ。今年は氣分が好いと言つて、彦七郎は例年よりも一層元氣に見えて屠蘇も祝へば雜煮も祝つた。松の内も濟んだ、十五日も過ぎた。次郎は既に十四歳に成つて、今年は小學全科を卒業すると云ふ事に成つたので、兩親は此の上も無く喜んで居つた。

今日は丁度二十日正月、彦七郎は家で二三人療治すると正午に成つた。午後は二三の申込があつたので、それを廻つて夕方一先歸つて來た。

歸つて見ると、次郎が風を引いたと言つて寢て居つた。併し親も子も眞の假初の事と思つた。

既に振出を呑せたと聞いたので、彦七郎は安心して、また夜の療治に出かけて行つた。この節は誠に能く繁昌して、彦七郎は晝夜共に、殆ど寸暇なき有樣だつた。

この夜おそく療治を終つて歸つて見ると、次郎の身體はまるで火の玉にでも觸るやうに熱かつた。まだ此の時代に於ける一般の衞生思想は誠に幼稚なものだつた。彦七郎は次郎の身體に觸つて見て、

『オ、これは大分熱がある。明日療治に出た歸りに、何か良い藥を買つて來て遣らう』

氷嚢などは勿論無かつた。手拭を絞つて頭を冷して遣ると云ふやうな事さへも世間一般に知らなかつた。

(八) 慘又慘

夜が明けた。次郎はウト〳〵して居つた。體溫は昨夜の儘に續いて居つた。

彦七郎は翌日療治に出た歸りに、他の風藥を買つて來て呑せて見た。何の効能も見えなんだ。

翌日は又他の藥を買つて來た。おなじく何の効能も無かつた。

『何うも餘程質の惡い風だと見える。併し最う此處一日二日が峠だらう』

矢張普通の賣藥を飲ませて居つた。三日經つても五日過ぎても體溫は依然として續き、次郎は段々衰へて來た。

日毎に容體が面白く無かつた。始めて醫者を呼んで見て貰つた。醫者は脈を取つて見て、

『矢張風の重いのでござる』

多分肺炎かなんぞであつたらうが、當時のお醫者さまは先づ斯んなものであつたらう。矢張煎藥をくれたばかりで、胸を冷せとか背の此邊を冷せとか、手當の方法に就いては何等の注意も受けなかつた。

八日目あたりに體溫が下つた。

『何うも彼のお醫者さまのお藥は能く効く！』

彦七郎は喜んだ。霞江も始めて愁眉を開いた。けれども何か併發症が手傳つたと見えて、次郎は漸漸弱つて發病後十三日目の夜中に息を引き取つた。

兩親の歎き方は目も當てられぬやうだつた。

彦七郎は杖を捩ぎ取られたよりも途方に暮れた。次郎の死骸を泣々野邊に送つた後は、彦七郎は一時氣脫して了つたやうに成つて、家業の療治も出來なかつた。他に小供が無かつたならば、彼は次郎と同じ烟に成りかねぬのであつた。

情ある人々に慰められ勵まされて、彼は辛く氣を取直して、また平生に立返つた。併し其後は雨も風も我が子を想ふ媒介に成つて、兎角健康が勝れなかつた。

近所の人達は杖を突いて療治に出て行く彼の哀れな後姿を見送つて、

『マア急にお弱り成さつたこと、お氣の毒な事ぢや！身體に申分の無い人でさへ人は我が子を奪れる程身體に徹へる事は無いのに、眼の御不自由な上に彼まで大きくした而も男のお子さんをお奪られ成さつては、實にお察し申す。嘸、がッかり成さつた事であらう！』

皆深く同情して噂をして居つた。

分らぬものは人の身の上、彦七郎夫婦は又ひよいと惡い風先に面つて立たねば成らぬ事に成つた。

人の身は一旦逆風に面つて立つと、人間の力ではこれを何う避ける事も出來なくなる。

彼は或夜療治に招がれ、家を出かけて行く時に、何と無く氣が進まなかつた。途中で屢〻杖を止め、

『今夜は一層斷らうか』

斯う思はぬでも無かつたが、家業とあれば左樣も行かぬ。終に先方へ行つて療治をし早々暇を告げて歸途に就いた。

頃は二月下旬のことで、夜風は未だ中々身に泌みた。この夜は丁度次郎が三七日の逮夜に先立つこと一日前の夜だつた。

彦七郎は暇を告げて外に出ると、冷たい夜風が總身に泌み渡つた。それと共に彼は忽地亡兒が事を思ひ出した。彼は寒夜の大道に悄然として杖を止め、

『ア、早いもんだな、明日の夜は最う彼の兒が三七日の逮夜に當るか』

ハラ〳〵と涙を流した。暫く其處へ立つて居つたが、袖に兩眼の涙を押へて、

『まだ二十日前までは病ひながらも此の世に居つたが……』

盲人は一心に我が子の事を思ひ〳〵心も空に歩き始めた。同時に虛然方角を取違へて進み始め、生憎二三日前取拂つた空地に入つた。

何うも勝手が違ふので、杖を止めて考へて居ると、突然犬が吠えかゝつた。杖で逐ひ拂つて、急いで道に出やうとすると、慌てたので又方角を間違へて、高さ二間許の石垣から下駄を穿いた儘下に落

ちた。下には又生憎と土臺石が積んであつた。その石に當つていやと云ふ程胸を擊つたので堪らない。ウンと言つた彦七郎は人事不省、後は何にも知らなかつた。犬が烈しく吠えたので、近所の人が外に出て、始めてこれを發見した。

(九) 各人の任務

彦七郎はこれが原で床に就いたが漸々弱つて、最早到底起てさうにも見えなかつた。

勿論本人も氣の毒であつたが、妻の葭江は更に一層氣の毒であつた。初めは太郎を奪られ、次には次郎を奪られて未だ物の滿一月と經たぬ中に、今度は我が夫にも別れねば成らぬ事に成つたのであつた。

併し未だ死なうなどゝは思はなかつた。

『何うかして一日も早く治したいものだ、是非治さなければ成らぬ！』

葭江は氣を張つて家事を打棄て、專ら看護に手を盡して見た。今日は少しは快いか、明日は幾らか見直すかと、憂の中にもそれを一ッの頼みにして、日夜衣帶も解かずに介抱したが、事實は其の反對

に片走して、夫の病氣は益〻頼み少なく見えた。

葭江の歎きに引換へて、夫彦七郎は事既に爰に及ぶと、急に心强い人に成つて、死に就いては少しも怖れる樣子が無かつた。

勿論床に就いた當座は、自分でも非常に努力して、

『こゝで自分が眼を閉ぢては成らぬ。今一度是非とも本復しなければ成らぬ！』

斯う思ひ詰めて居つたが、既に死期の近付くを知るや、彼は飄然大悟して、却つて心に言ひ知らぬ愉快を覺えた。死に先立つこと三日以前に彼は一日氣分が勝れた。

この日は多少物も食べ口も利いた。葭江は喜んで、

『マア良人好い鹽梅でございますね！假令何んなにお長くお悪り成さらうとも、追々にお治り成さいませうならば、斯んな嬉しい事がございませうか』

以前獨身で暮して居た時の事を思ひ出せば、葭江は眞實斯う思はれたのであつた。

人間は何にも知らぬ。これまで死の覺悟をして居つた彦七郎も、今日は幾分生の希望が心に動いた。併し何しろ重患であつた。また何う云ふ事があらうも知れぬと思つたものか、彼は死に際して我が言はんと欲する所を妻に明して置かうと思つた。

『葭江、吾はお前に氣の毒に思ふ！苦勞させた上に又今度は苦勞をさせた！』

『ナニ良人、苦勞も何もありはしません！たゞ御本復下されば、私は元より小供の爲にも何んなに仕合でござんせう！』

夫は病氣以外に胸が痛んだ。

『吾も本復したいとは思ふが、天壽が盡きれば人はそれまで……。假令今吾の身に萬一の事があらうと、決して力を落しては成らんぞ！』

葭江は急に又胸が迫つて來た。夫は言つた。

『吾は圖らず今度斯う云ふ病症に罹つて思ひ當つた。人間は個々各自に自己の爲すべき任務を受けて此の世に出て居る。これを爲し果さぬ中は假令何んな危險な場合に遭遇はうと、また何んな大患に罹らうと、斷じて死すべきものでは無い！吾が今日言つて聞かす事を好く聞いて置いてくれ！』

『はい！』

彦七郎は背後に積んだ蒲團にじつと靠れかゝり、暫く身體を休めて居つたが、

『吾が伏見の戰線に立つて戰つた時、若し敵の彈丸が纔に深く來たとすれば、兩眼を奪られたばかりぢや事が濟まぬ、その場を去らずに事は既に畢つたのであつた。彼の時不思議に危險を遁れて、今日

まで此の世に生存へて居たのは、これ決して無意義でない、まだ何か爲すべき任務が吾に殘つて居たからである。この上にも未だ何か爲すべき任務が殘つて居れば、吾の此の身體は屹度治るが、若し任務が既に盡きたとすれば、吾の生命は最うこれまで、如何なる名醫の手に懸からうとも、所詮助かるべき道はない！』

彦七郎は更に又、

『斯う云へば誠に悲しい話のやうであるが、他の一方には死んで行く吾にも、また後に遺るお前達にも共に大きな喜びがあるぞ馥江！』

話して居る間に、三郎と菊代は何時か傍に來て、一人は母の肩に倚り、一人は膝に腰かけて、憂愁も無ければ恐怖も無く、何方も手に何か弄りながら遊んで居た。

（十）死の歡樂

彦七郎は如何にも無邪氣に遊んで居る二人の小供の顏を見て、

『ア、、罪の無いものだな！』

心に言つてじつと伏したが、また徐に顏を上げて馥江に前の話を續けた。

『死の一面に喜びが隱れて居ると言へば妙に思はれるかも知らぬが、事實全く其の通りである。死ぬると思へば情ないが、これで最う吾の任務を終らせて頂いたものだと思へば、感謝はしなければ成らぬが悲しむべき謂は少しも無い！吾の任務の終つたと云ふ事は、吾は最う此の世に永く居なく成つても、お前は夫なしに又小供は父親無しに立つて行けると云ふ證據である。吾が此處で眼を閉れば、お前達は身が立ち行かぬと云ふ事であれば、吾は何んなに死後に思ひが殘るであらう！併し吾は最うこれまでゝ任務を終らせて頂いた、取りも直さず我が遺族はこれから何うにか遣つて行けると思へば、吾は死ぬにも心安い！お前達も亦安心して居つて宜しい。即ち死の一面には此の上も無い安心と喜びがあるでは無いか、吾が此の世に居なく成つても少しも恐れる事は無い。何うにか屹度遣つて行けるに相違ない！世の中は何處々々までも不可思議巧妙に出來て居る。また左も無い事には我々人類は地上の世界から滅亡する譯である！』

彦七郎は此處に一先話を切つたが、また徐ろに附加へた。

『馥江怖れるな疑ふな、今に見よ此の二人の小供は屹度成人する、而してお前に孝養を盡すに相違ない！今後はそれを樂みに世と戰ひ人と戰ひ仕事と戰へ、少しも怖れ疑ふ事は無い！』

彼は斯う結論して更に又、

『若し疑ひがあるならば、吾の生涯に就いて篤と考へて見よ。吾が若し伏見の戰爭で死んだとすれば死後は何う成つた？お前は今日一人の子さへも無い身體に成つて居たでは無いか』

『いかにも！』

馥江は心窃に叫んだ。

『なア！』

『それは全く左樣でございました！』

『分りましたかい？』

『はい！』

『それではお前が困る譯ぢや！即ち吾は未だお前の夫として我が任務が盡きなかつたに依つて、不具癈人と成りながらも今日まで生命を與へられて居つたのだ！お禮を申せお禮を申せ、神や佛に厚くお禮を申さにやいかぬぞ！また人間は何が幸福に成らぬとも限らぬもので、吾は兩眼共に明らかに見えた間は、何を隱さう神佛の存在を疑つて居つた。イヤそんなことには實は氣も留めずに居つた位ぢや！所が斯うして兩眼共に見えなく成つた後は、人の力の弱きを知り、知ると同時に神佛の力の益す

偉大なることを何時しか知つて、今日では實に心が安らかに成つた！若し今日吾が以前の彦七郎であつたならば、嘸や心が慌てることであらう、嘸や心が不安であらう。次第に近附く死を怖れて、嘸や今頃は言ふに言はれぬ苦しい思ひをして居ることであらうが、アヽ有がたい、肉體は既に斯う成つても精神は誠に安らかである！若し吾の身に今度萬一のことがあるとしても、決して力を落さずにな、神佛を厚く信心して、能くお前はお前の受けた任務を果すことぢや！即ち二人の小供を育てるが宜しい！』

『はい！』

『吾はこれで既に任務を果させて頂けば、安心して神佛のお膝下に歸る。吾に就いては少しも心を痛めてくれぬが宜いぞ！』

『はい！』

『コレ〳〵泣くな、何にも泣くべき事は無い！若し吾の事を思ひ出したならば、亡夫彦七郎は結構な所に生れ變つて、地上の世界では思ひも寄らぬ安樂な境涯で過して居ると思うてくれ喜んで居てくれ馥江！』

彦七郎は何時眼を閉ぢても心殘の無いやうに、更に又言はんと欲する所を繰返して、妻の馥江に慰

安を與へ勇氣を與へ、同時に人生の希望を與へる事にした。

『吾には吾の受けて來た任務があり、お前にはお前の受けて來た任務がある。人間は個々銘々己れの任務を完全に果す程人は貴い！假令小供であらうとも、人體を受けて此の世に出る時には、必ず若干かの任務を受けて來るものである！既に此の世に暇を告げた兄弟二人の我が子に就いて考へて見よ。吾が脫走した後で、お前は二人の子があつたので、嘸や苦勞もしたであらうが、また慰められた事も少なくあるまい！』

『仰せの通りでございました！』

『太郎が死んだ、お前は太く力を落した！其處に圖らず物の一月と經たぬ中に吾が歸つて來た。お前はこれに新しい力を得た！然らば太郎は僅か八歳で世を去つても、お前に對して十分に子の任務を盡して居たでは無いか。次に又次郎が死んだ、後に此の二人の小供が無かつたならば、吾やお前は其の夜の中に或は發狂したかも知れぬ？併し此の二人があつたので、共に今日まで生命を繋いで來た。不惑ながらも次郎は次郎で十四年の短かい生涯の間にも子としての任務が果てたので逝つたのぢや！世は大方斯うしたもの、若し今日までの生涯で、吾は吾の受けて來た任務を既に果させて頂いたものだとすれば、吾の壽命は最うこれまで…。併し未だ我が任務が果てぬとあれば、これ位な病氣は何で

も無い、この上假令何んな大患に罹らうとも、必ず本復するに違ひ無い！吾は少しも疑はぬ！若や萬一の事があつたとすれば、吾の任務は既に果てゝ彼の世に歸らせて頂いたものと思うて、決して泣いてくれるなよ。お前はお前の任務を果して安らかに眠つて此の世を去れ！アゝ有がたい事ぢや、斯う安心の極つた上は、人は何んな憂目に遭はうと、何んな危險な思ひをしやうと、また何時何んな大患に罹らうと、少しも怖れる事は無い！』

言ひ終つて暫く休み、背後の蒲團を取らせたが、馘江に扶けられて横に成り、切ない中にも喜び喜び、夫斉七郎はそつと靜に横に成つた。

（十一）大往生

この夜は平時と別に變化も無かつた。

翌日も別に病氣の募るやうな容體も見えなかつた。時々は口も利き物も食べ、連りに感謝して有がたい有がたいと言つて居た。併し次の朝の夜明前あたりから急に容體が變つて來た。馘江は急いで醫者を迎へた。醫者は直に來て脈を取つたが、

『ア、最う御臨終でございます！』

葭江はワッと聲を立て、おもはず夫の手を取つた。臨終の彦七郎は其の手を放させ、春の日の霞ながら暮れて行くやうに極めて長閑に、至つて靜に、知識も及ばぬ大往生を遂げた。彦七郎は誠に不遇な人のやうに見えたが、いよ〳〵最後の幕に成つて見ると、實は此の上も無く幸福な人であつた。

『マア何と云ふお立派な御臨終でございませう！』

醫者も感心して歸つて行つた。直に近所の人が集まつた。かねて近所の人達にも好く交際つてあつたので、皆深く同情して、我れも〳〵と野邊の營み其他の事に手傳つた。

一夜止めて賑に夜伽をし、翌日の午後無名の志士の遺骸は荼毗に附せられた。

葭江は夫が此の世を去ると共に、その信仰が自然と胸に高まつて來た。能く亡夫の遺言を守つて、胸に涙の突ッかける度毎に、

『ア、、最う此の世の任務をお濟しに成つて、今頃は嘸結構な所にお歸り成さつてお居でなさる事であらう』

斯う思ひ直して御念佛を唱へ、美しく諦めて、笑顔を見せて人々に厚く禮を言つた。僅か一月經つ經たぬ間に、子に別れ又夫に別れた人であるので、近所の人々は葭江が態度の餘り立派なのに驚いて、

褒めるよりは怪しむ方が多かつた。

『若や氣分が怪しく成つたのではあるまいか』

併しそれは杞憂に過ぎなかつた。未亡人の心は何處までも確かであつた。葭江は何事にも固く亡夫の敎を信じて、我が身に就いても、夫の死後は少しも怖れ疑はぬやうに成つた。

『正直に人の道を守つて、私の身に授かつた任務を何處までも果しましやう！左樣すれば跡は屹度何うにか道が附いて行くに違ひ無い！』

既に亡夫の初七日が濟むと、葭江は再び人の賃仕事を始めた。亡夫の兼々言はれた通り、世の中は有がたいもので、色々不幸が續いたからと言ふので、それからそれと仕事の世話をくれる人が少く無かつたので、葭江は毎日手の空くやうな事は無かつた。

併し貯蓄は既に大方盡きて居た。

針一本で二人の小供を育てるのは容易で無かつた。けれども馴れた土地であるので、葭江は此の地を去る事を好まなかつた。何んな辛い事も克く辛抱して、おのれの任務を盡して居た。何よりの幸ひには二人の小供が無事に育つて、自分も別段藥を呑むやうな事も無かつた。

二年經ち三年經ちする中に、三郎は早十歲に成り、妹は六ッに成つた。斯う成ると葭江も大きに樂

であつた。

三郎は小供の時から誠に學業の成績が好かつた。十三で小學全科を卒業した。

寡婦には寡婦の德がある。仕合と三郎は小供の時から親思ひの子であつた。母の渡世は針一本で生活に骨の折れる事を知つてたので、三郎は小學校を卒業すると共に、堺の尾張屋と云ふ呉服屋に奉公した。

これは敢て本人が望んで行つた譯では無かつた。三郎自身は何うかして學問をしたいと思つた。葭江も密に然う思はんでも無かつたが、針一本の渡世では、何事も我が心に任せなかつた。

三郎は何うした譯で呉服屋へ行つた？

葭江が或る人の世話で、尾張屋の仕事をして居つたので、三郎は度々使に行つた。これが緣に成つて行末望みのある子と思はれ、是非にとあつて、言はゞ主人の方から無理に望まれたのであつた。

（十二）少勇士

人一生の運命程分らぬものは無い。同じ志士の仲間であつた亡父彦七郎の知合の多數は今日官邊に

皆相當の地位を得て、官員さま風を吹かせて居る中に、彼れの遺族は落魄仕切つて、忠君愛國の血を稟けた一子三郎は今や呉服屋の小僧と成つて、我が運命を求めねば成らぬ事に成つた。

三郎は一面には父の氣を稟けて、少年ながらも剛膽であり聰明であり、また一面には母の溫柔と忍耐の氣を稟けて、腹からの商人や百姓の子とはまるで容貌品位を始め異つて居つた。

三郎は何を爲せても能く間に合ひ、且つ頗る素直な性質で、命じられた事は凡帳面に勤め、少しも陰日向などはしないので、尾張屋の主人孫左衛門の氣に適つた。

葭江が時々尾張屋に仕立物を持つて來ると、孫左衛門は必ず會つて、

『內儀さん、まあ確り稼ぎなさい、三郎は今に屹度物に成るよ、今少しの間の辛抱だ！』

何時も斯う言つて力を附けた。葭江は喜んで家に歸り、我が子二人の將來を樂しんで、兎も角も其の日の煙を立てゝ居た。

三郎は十三の春尾張屋に來たが、その年の內に早幾度も大人に舌を卷かせるやうな功績を見はした。頃は十月半であつたが、或る夜尾張屋の店に一人の强盜が入つた。店には番頭始め丁稚小僧を取混ぜて十人ばかり人が寢て居つたが、覆面頭巾を被つた大きな奴が片手に大刀の鞘を拂ひ、片手に强盜提灯を持つて居るので、皆ガタ〳〵と顫へて居つた。

精神教育の力は實に偉大なものである。

『人間は何んな危い目に遭うても、おのれが此の世に受けて來た任務を果し終るまでは斷じて死ぬるものでない！』

兼て母の敎訓に屢〻斯う聞いて居つた三郎は、我れ一人この時少しも怖れなかつた。蒲團の中から頭を出して、そつと樣子を覗つて居つた。

番頭は强盜に迫られて、顫へながら帳場に行き、大きな錢箱の錠を外し始めた。

『サア生命が欲しくば殘らず此處に持つて來い！』

强盜は店の眞中に胡座を掻き、大刀を疊に突立て、剛膽な奴と見えて、强盜提灯の光で煙草を喫み始めた。

三郎は强盜の油斷を見濟し、背後の方から窺ひ寄つて大刀を取るが早いか光を打消して何處へか逃げた。その早業に敵は愕き、今戸を切り破つて入つて來た裏口の方に逃出すと、丁つた戸の間際まで來た所で、顏にパッと灰が散つた。三郎は最う何時の昔か十能に灰を抄つて來て戸の蔭に隱れ、今か遲しと待受けて居たのであつた。

早速の目潰が充分利いた。賊は其の爲逃げ後れて、終に大勢に捕まつて警察の手に引渡された。直

に土地の評判に成つた。馥江は驚いて飛んで來て、

『マア お前亂暴な事をして、後で御主人に御迷惑をお懸け申しちや濟みませんよ』

前夜の少勇士は溫順しく頭を低げて謹愼の意を表して居た。主人孫左衞門は連りに嗟嘆し、

『百姓や町人の子に出來る業ではありません！全く此の子の働きで家は災難を助かりました、有がたうござる！』

厚く禮を言つて、金を五圓包んでくれた。

(十三) 大　阪　行

三郎の顏は母親に酷く肖て娘にして欲しいやうな美少年だつた。强盜を捕へた話が傳はると、

『彼の溫順さうな子に、何うしてそんな手荒い事が出來たであらうか』

世間の人は皆疑つた位であつた。彼はこれより益〻主人の信用を得て愛せられた。三郎も亦能く主家の爲に働いた。

孫左衞門は名古屋の出で、堺で或る好運を捕へて、終に今日の身代を造つた人だつた。名古屋には

實兄に當る人が居つて、これも何か大分手廣く遣つて居つた。所が今度孫左衛門兄弟は、何か有利な新事業を發見し、何方も横濱に轉住して、新しく事業を始める事に成つた。これは丁度三郎が尾張屋に奉公した二年目の秋で、彼が十四歳の時であつた。

孫左衛門は尾張屋の暖簾を人に讓つて、その翌年の春泉州を去るに臨み、三郎を横濱に連れ行く積りで、母の葭江を呼んで相談して見た。

けれども葭江は我が一人子息を遠く手放して遣るには忍びなかつた。三郎も亦實に親思ひの子で、自分ばかりを便りにして居る母親を振棄てゝ遠く行くには忍びなかつた。

『それではまあ當分此方に居て、來たいと思つたら何時でも來るが宜しい。向ふへ行つて愈〻事業を始めれば知らせて寄來す。その時はおッ母さんや妹と一緒に來ても差支へはない』

斯う言ひ置いて堺を立つた。三郎親子は大阪まで送つて行つた。

三郎も今年は早十五歳に成つた。

『これから何うして身を立てたが好からうか』

母子は色々相談して見た。三郎は商人に成るよりも矢張學問に依つて身を立てたいと思つた。併しそれには學資が無かつた。

『ヨシそれぢや働きながら學問しやう！』

三郎は斯う決心して、母に相談をかけて見た。葭江は我が子の志を妨げなかつた。

『先づおッ母さんの許諾は得たが、これから何うして我が目的に向つて進まう？』

何うしても又何處へか奉公するより外に道は無かつた。奉公して其の餘暇々々に勉強し、是非目的を貫かうと思つた。

『それには堺に居るよりは大阪へ出た方が便利である。同じく其の方法を取るとすれば、堺に居るよりは大阪に出たい！』

三郎は母に此の事を打明けて相談して見た。

『大阪まで位ならばな・・・』

進みもせぬが强つて拒みもしなかつた。

三郎は或る日大阪へ出かけて行つた。難波邊に母が知合の人を訪ねて見た。今日は主人は商用で神戸まで行つたが、おそくも夕方までには歸るだらうと云ふことだつた。仕方が無いので暇を告げた。

『折角出かけて來たものだから、何處へか奉公先を賴んで置いて歸りたい』

斯う思つて、三郎は何處へ行くとも無しに歩き出した。諸方を見物しながら其の日の正午頃天滿に

來ると、

『三郎さん』

人込の中で突然自分の名を呼ぶ者があつた。ひよいと見ると、それは自分の學校友達で、今大阪へ奉公に來て居る庄吉と云ふ堺の豆腐屋の倅だつた。

『オ、庄ちやん！』

二人は天神さんの境内に入つて暫く話した。庄吉は今つひ此の近所の乾物屋に奉公してると云ふ事だつた。

『何處へか奉公口はあるまいか』

『吾の居る隣に刷毛屋さんがある。其處で一人欲しいと言つて居つた。行く氣があるなら話して見て上げても宜い。近いから來ないか、吾も友達が出來て好い』

『それぢや行くから話しておくれ』

歸る庄吉、從ふ三郎、二人は程なく刷毛屋に來た。

(十四) 職工生活

直に相談が出來たので、この日は一旦堺に歸り、見て來た儘を母に語つた。

『それぢや兎に角、私が一緒に行つて、向ふの樣子を見た上の話にしませう』

葭江は仕掛けた仕事を片付けて置いて、三日目の正午前に三郎を連れて刷毛屋へ來て見た。主人は生憎不在であつたが、內儀は年の比三十五六で、大層愛想の好い婦人であつた。店も可なり大きくて、三郎と同年位の小僧が三人居つた。

矢張此處に緣があつたものと見えて、葭江はこれならばと安心して、我が子の上を內儀に懇々頼んで歸つた。

主人は清吉と云つて、生れは河內邊の者で、年の頃四十五六のデプ〳〵肥つた男であつた。素面の時は誠に能く稼ぎ、奉公人にも同情があつた。商賣も可なり繁昌して居つたが、主人公一杯飲むと最ういかん。一寸した事にも直に慍つて內儀であらうが奉公人であらうが叱り飛して容赦なく擲りつける癖があつた。

その癖醉が覺めると云ふと、まるで別人のやうに溫順しく成つて、一日も口を利かずに働いて居る

事が珍らしく無かつた。斯んな時には奉公人は安心して働いて居るが、また幾日か經つて內儀を呼び、

『お新今夜は一本潰けろ！』

この一聲は何人の耳にも雷のやうに響いた。內儀始め一同は猛虎の一聲に群獸の顫へ上つたやうに怖れて、

『ソレ又始まるぞ！』

皆彼の充分徹へる鐵拳を怖れて、その手は齊しく仕事に急いだ。

連合の方は愛想は人を引受けるが、氣は誠に烈しい女で、奉公人には酷かつた。主人さんには酒癖がある。內儀は氣が強いと來て居るので、奉公人は屢〻變つて、三月と辛抱の出來る者は無かつた。

三郎一人は此處に足掛二年辛抱した。その中に職も手に入れた。大いに店の爲にも成るので、主人の鐵拳も獨り三郎の五體は避けて他の者に飛び、內儀もちやんと人間の慾は人並以上に心得て居つて、時々奥に呼んで、窃に物を食べさせるやうな事などもあつた。

それは好いが晝は終日、夜は夜業に忙しくて、到底讀書の餘暇などは無かつた。三郎は或る時熟々考へた。

『これぢや到底も目的は達せられん！歸つておッ母さんに相談して見やう』

叺江は聞いて暇を取らせる事にした。その日は返して人を遣り、母親が病氣で到底も他に出しては置かれんと云ふ事にして、やつとの事で暇を取つた。

三郎は懲りたので、次の奉公先は我が目的を達するに便利な所を見立てた積りで、今橋邊の印刷所に入つて見た。所がそれが又思つたとは大違ひで、到底も讀書の暇などは無かつた。折角來たものだから暫く辛抱しやうと思つても、前の刷毛屋よりは一層骨が折れ、食物も粗末、第一家が非常に不潔で、僅か二三ケ月居た間に丈夫な身體を惡くした。

三郎は考へた。

『何處へ行つても此の通りぢや、到底も目的を達する事は出來ん！いつそ斷念して堺に歸り、何か目的を變へて身を立てる事にしやうか』

斯う思つたが、それも誠に殘念だつた。兎に角健康が續かんので、印刷所の方は暇を取つて、或る日心齋橋筋を通つて居ると、立派な書籍店に「店員入用」と書いた古い札が掛つて居つた。

三郎はこれを見て、心窃に狂喜した。店に入つて主人に會ひ、來意を告げると向ふでは、精しく此方の身の上など糺いたが、それでは使つて見やうと云ふ事に成つた。

讀みたい本は店にどつさり積んである。三郎は心の中で、我れ始めて今日その所を得たと思つた。

(十五) 營養不良

併し三郎は一度家に歸つて、この事を母に告げねばならなかつた。

『ちやァ今日はこれから家に歸りまして、明日から上る事に致します』

宜しいと主人は言つた。

三郎は喜んで飛んで歸つた。馥江は聞いて大層喜び、

『そりやまあ好い所があつたね！ちやァ私も明日は何とか都合をして大阪へ行き、御主人樣にお目にかゝつて、好くお願ひして來ませう！』

母子は翌朝家を出て、三里の道を大阪へ急ぎ、道中で手土產の一ッも調へ、心齋橋の主家に行つて主人に會ひ、懇々我が子の上を賴んで歸つた。これは明治十八年の旣に十一月中旬で、三郎が十六歲の時であつた。

店の帳場には何時も冴えぬ顏をした、年の比五十前後の主人利右衞門が每日ちやんと坐つて居り、店員は若い者が二人、外に三郎と同年位のが二人居つた。

子の無い家で、奧には最う腰の二重に屈んだ、太い痰持の老婆さんと、四十前後の物凄い顏をした

痩せた內儀が、四國出のおりんと云ふ二十二三にも見える女中を一人使つて遣つて居つた。

三郎が此處はと望みを屬して來たのは又大きな思はく違ひで、誠に陰欝な、何となく居辛い家であつた。

仕事は前の二軒に比べると、別に辛いと云ふ程では無かつたが、さればと云つて本の一枚も覗かれると云ふやうな暇は斷じて得られなかつた。店頭に一寸客が絕えれば、直に何か用事を言ひつける、使に走らせる、少し遲くなれば何處で何をして居つたと叱られる、皆殆ど閉口して、一寸主人の姿が見えねば、斯んな酷い家は無いと云つて、奉公人は主人始め家の者の噂ばかりして居つた。

他の者は每日ひし〳〵主人にお眼玉を頂戴したが、此處でも三郎は助かつた。併し此處に來て間も無く、或る日つひ本に引入れられて、一寸開けて見て居ると、

『こらァ！』

大喝一聲主人は叫んで、

『商品に何で手を附ける？』

三郎は戰慄して、その後は心を壓へて居つた。半年許經つ中に店員は總交代に變つて、後に殘つたのは又三郎一人であつた。

その原因は何であつたかと云ふと、主人の喧しい喧しく無いは別問題として、誠に食物が粗末だつた。たゞ粗末な丈ならば好いが、朝は不味味噌汁切、晝と夜の二食は殆ど漬物に限られて、飯も二碗以上食べると、老婆さんが整然と前に坐つて居つて、呆れたやうな顔をして、ジロ〳〵此方の顔を見る。この爲に皆營養不良に成つて、誰も辛抱仕切れずに、半病人になつて暇を取るのが例であつた。

それでも三郎は翌年の秋あたりまで凝然と辛抱して居ると、主人は或る夜奥に呼んで、

『三郎お前は家の養子に成つてくれぬか』

實に意外な注文を持出した。それは主人ばかりで無かつた。主人が此の相談に就いて口を切ると、老婆さんも内儀も言を揃へて望んだ。三郎は全く有がた迷惑だつた。彼は終に決心して、

『お思召は有がたうございますが、私は三男に生れましても今は總領でありますので、家を相續しなければ成りませんからお斷り致します』

斷然と斷つた。主人始め一同は太く失望したやうだつた。

三郎は此處でも亦決して目的は達しられなかつた。

『何うしたならば好からうか』

彼は全く途方に暮れた。

『斷然横濱の主人の所に行かうか』

色々迷つて居る中に、彼も亦到頭營養不良に陷つて、日々の勤務が非常に苦しく成つた。

(十六) 新運命

三郎は十六歳の冬此處に來て、十七歳の暮まで辛抱したが、最う我慢にも健康が容さなく成つた。

葭江は或る時大阪に態〻我が子に會ひに行つて見ると、三郎は非常に憔悴して居つた。それは最う暮の二十日過ぎで、葭江も非常に忙しい時ではあつたが、或る人の話に大阪で近頃三郎に會つたら、何だか大きに衰へて居るやうだつたと聞いたので、葭江は或る日の朝早く堺を立つて大阪に來て見ると、正しく其の人の話した通りであつたので、無理に暇を取らせて其の日堺に連れて歸つた。

三郎は母に對して誠に申譯の無いやうな氣がして實に辛かつたが、何うも健康が容さぬので、正月は家で養生して居つた。

運命は色々に人を導くものである。三郎が青い顔をして、藥を呑みながら家でぶら〳〵して居ると、葭江が兼て懇意にして居る家の若主人で、大阪商船會社の安治川丸と云ふ汽船の事務長を勤めて居

る角井孝作と云ふ人が堺の自宅に歸つて來た。

直近所なので、この人には、三郎も小供の時から屢〻會つた事があつた。今度は久振で自宅に歸つて來たと云ふので、三郎は此の人を訪ねて見ると、向ふは打解けて、色々此方の近況を尋ねてくれた。

三郎は有隨に此方の徑路を話した。自分もこれまで苦勞をして來た角井君は大きに同情して、

『そりや何うも氣の毒な話だ！　兎に角身體が丈夫に成らん事には、人間は何をする事も出來ん！　何うちやそれちや暫く吾の乘つて居る船のボーイに成つて見る氣は無いか。左樣すれば身體も直に丈夫に成るし、辛抱すれば學資も出來るが・・・』

船員丈に實に言語が活潑で、而も其の中に充分温情が籠つて居た。

これを聞いた三郎は、忽地大いに心が動いた。

『ちやァ何分何うか願ひます！』

『ヨシちやァ明後日の夕方大阪を出帆するから、明日の晩方吾と一緒に此處を立たう』

『宜しうございます、ちやァ何うか是非願ひます！』

三郎は家に飛んで歸つて來て、その事を母に話して許諾を請うた。

葭江が三郎に就いて、目下最も案ずる所の問題は、實に我が子の健康であつた。

『身體が丈夫に成ると云ふなら、それはまあ何は置いても一時の所左樣して見るかね・・・』

三郎は母の許諾を受けて喜んだ。

『ちやァおッ母さん何うか左樣させて下さい！　屹度丈夫に成つて歸つて來ます！』

『その船は何處まで行くんだらうね？　お前角井さんに伺つて見ませんでしたかい？』

『九州通ひの汽船で、近年新らしく出來た立派な汽船ださうです』

『左樣かい、ちやァ行つてお出で・・・』

母子の相談は早纏つた。翌日の夕方三郎は角井君と一緒に機嫌よく堺を立つて、また大阪へと取つて返した。これは明治二十年正月十八日で、彼が十八歳の時であつた。

我が子の海に向ふに當り、葭江は道まで見送つて、角井君に懇々頼み、

『ちやァ左樣なら・・・』

『おッ母さん、身體にお氣をお附けなさいよ』

『お前もね！』

母子は何となく別れを惜む色が見えた。

『小母さん大丈夫です、私が萬事引受けます！』

角井君は莞爾笑つて力を附けた。

二人の車は向ふへ行つた。

三郎は時々後を振返つて居た。葭江は暫く涙含んで見送つて居る中に、二人の車は早遠く行つて了つて、北の方から吹いて來る冷い夕風が眼に泌みた。

（十七）安治川丸

この夜二人は大阪に宿り、角井君は用達に出かけて、十一時過ぎに歸つて來た。

翌日午前十時頃に宿を立つて、二人は安治川丸に乘組んだ。この船のボーイは三人だつたさうだが、今度一人陸に上つたので、三郎は其の後任に來たのであつた。

事務長の角井君は自分の部屋に連れて入つて、色々職務上の注意を與へた後で、船長その他に紹介し、二人のボーイを部屋に呼んで、

『これは吾の親戚の者だ。今日からボーイとして此の船に乘組むことに成つたが、船に馴れるまで何

分君達に吾から頼む』

親切な事務長は特に斯う言つて紹介してくれた。三郎は又溫順しく、

『何にも分りませんから、何うか宜しくお頼み申します』

二人の仲間は快く引受けて、船の中を彼此連れて廻つて、ボーイの任務を色々親切に敎へてくれた。

午後正一時船は川口を出帆した。この時始めて船に乘つた三郎は、實に一種の感じがした。さうして人の身は何時何んな事に成るか知れぬものだと思つた。それも其筈三郎は、まだ二三日前までは、我が前途に近く斯う云ふ運命が迫つて居やうとは、實に夢にも知らなかつたのであつた。

假令近海航路とは云へ、三郎に取つてはこれが最初の航海であつたので、汽笛の音や船の機關の響きなどを耳に近く聞いて、愈〻沖へと出る時は、これから遠く陸を離れて、知らぬ異國の旅にでも出かけるやうな心細い氣持がした。

三郎は母を慕ひ妹を懷うた。

『おッ母さんは何うして居るだらうな？妹は何うして居るだらう？歸つて來たかと思へば又間も無く出て了つたので、家では皆嘸淋しがつて居ることだらう！』

三郎は何と無く胸が痛かつた。

安治川丸は綺麗な船で、その頃船室は上等中等下等と三ッに分れて居つた。大阪を出帆した時、乗客は既に乏しく無かつた。上等室に六名、中等室に八名、下等室には三十名ばかり乘つて居つた。ボーイは上等室に一名、中等下等を通じて二名の定員であつた。

今度ボーイの缺員は上等室にあつた。順序から言へば、後の二人の中から何方か此方へ轉ずるのであつたが、其處は事務長の取計で、三郎が他から其の後任に來たのであつた。

上等室は比較的給料も好かつた。乘客の心附も中等以下の比では無かつた。他の二人が爭つて此方に廻りたがるのも無理では無かつた。

事務長は何處までも三郎に對して親切であつた。好く此等の內情に通じて居たので、船の出帆する少し前に成ると、三郎を事務室に呼んで、金を參圓宛二包包んで渡し、これを二人の仲間に一包宛遣れと言つた。

三郎は直ちに事務長の內意に從つた。二人は貰つて別れたが、後で二人別々に三郎の所に來て、

『君は未だ馴れぬから、若し船に暈つて心持でも惡いやうな時は、一寸僕に斷つて何時でも部屋に入つて寢て宜しい！』

何方も內々斯う言つてくれた。幾ら事務長の口入でも、これは吾の親戚の者だと言はず、また何の

心附もしなかつたならば、まだ船の事情に一切不案內なものが、突然上位に飛び込んで來たならば、言ふまでも無く彼等の反感を招く事に成つて、新參者の三郎は少なからず惱まされたに違ひ無いが、事務長の注意が能く行き屆いたので、その點に於いては三郎は誠に安心なものであつた。

(十八) 初航海

葭江の信仰は其後益〻固かつた。

『人は己れの任務の果つるまでは、如何なる不安な場合に遭遇しても、斷じて死ぬるものでは無い！』

斯う云ふ安心があるので、我が子の上に就いて多く怖れはしなかつたが、我が子を懷ふ情は壓へ切れなかつた。

葭江は此の日の午後六時に安治川丸が神戸を出帆して西へ向ふと聞いて居つた。親心程切ないものが世にあらうか。葭江は時刻を違へずに菊代を連れて堺の大濱に出た。言ふまでも無くこれは餘所ながら我が子を見送る爲めであつた。

大阪灣の波は怒つて岸を打ち、やがて雪でも誘うて來るのか、空は曇つて濱には寒い風が沖の方か

ら吹いて居た。葭江は竦然と顫へ上がつて、

『オ、寒い！今夜は何だか海が太く荒れさうだね？』

大きな波の紆つて居る海に面つて少女も立ち、

『おッ母さん、兄さんの乗つてらつしやる船は、最う今頃は神戸を出たでせうか』

『サア丁度今時分汽笛を鳴らしながら沖へ〳〵と出てるでせうよ』

母子一齊に顔を上げて、海上遙に神戸の方を望んだが、何處が須磨やら舞子やら、晴れた日ならば歴々と指呼の間に見える向ふの岸は、一面夜色の中に潜んで、正面の六甲山さへも全く見當が附かぬまでに海の向ふは暗かつた。

母子は暫く濱に立つて、暗い海の向ふを凝然と見て居つた。その間にも葭江は絶えずわが子の上を思ひ續けて居た。

『兄さんは此の風に沖に出ちやア嘸寒い事だらうね、何うか船に暈はねば好いが！』

話相手も無かつたならば、葭江は何んなに心細かつたことであらう。併し菊代も今年は十四、母の心を慰むるに餘りあつた。

『ナニ大丈夫でせう、今に又直歸つて入らッしやるでせう！』

『身體が丈夫に成れば何よりだがね……』

『屹度丈夫に成つてお歸りでせうよ』

母子が話して居る中に、海の面は荒れながら漸々暗く成つて來て、空には星の光も見えず、雪と碎けて岸を擊つ波の音のみ高かつた。

安治川丸は丁度この時神戸を出帆して、明石海峽の方を向つて其の航路を取つて居つた。三郎は甲板に立つて堺の方を眺めて居た。

『アヽこの海の向ふの岸には、母も居れば妹も居るが、今頃は何うして居るか』

人間は何にも知らぬ。知らぬ所が却つて好い。今この海の暗い寒い向ふの岸に母と妹とが此方へ面つて立つて居つて、泣々自分を見送つて居ることを知つたならば、三郎が思ひは何んなであつたであらう。

此方の母子も三郎が、今悄然と甲板に立つて、二人の上を思ひ〳〵西に向つて遠く去りつゝある事を知つたならば、よしや海に身を投げても、行かれるものなら後を慕ひたかつたであらう。

けれども海は相方の間を隔てゝ互に何にも知らずと別れた。その中に船は明石海峽を過ぎて播磨灘に懸り、母子は家に歸つて來て、夜おそくまで三郎の噂ばかりして居つた。

その中に菊代は眠つた。馥江は我が子を思ひ續けて眠られなかつた。幾時頃であつたやら、態〻起きて戸を開けて見ると、何時の間にか雪が降り出して、最う大分積つて居つた。雪を見ても亦直に馥江は我が子を想起した。

『最う何邊まで航つたやら、嘸寒いことだらう！』

夜は沈として誠に閑寂な事であつた。

（十九）播磨灘

今夜の航海は馴れた人にも樂では無かつた。

播磨灘に懸ると共に、山のやうな波に揉れて、船體が前後に激しく動搖した。波に乘つて船體がズッと高く上る時はまだ好いが、ズッと波から下りる時は、船は此儘沈沒するかと思はれて、三郎は其の度毎に危險を感じ恐怖を覺え、同時に胸がムカ〳〵して今にもドッと吐きさうに成つて來た。

『自分は乘客では無い船員である！』

初めの間は氣を張つて、その任務に就いて居つたが、到頭我慢仕切れずに纔に人の眼を避けてドッ

と吐いた。前後終に三度吐くと、手足が太く冷えて來て、次第に氣が遠くなるやうで、最う意地にも働けなく成つて來た。

二人の仲間は馴れたもので、船體の動搖が少し烈しく成つて來ると、直に乘客一同に一個づゝブリッキの小な器を配つて廻り、後は平氣で勝手な事をして居つたが、事務長から頼まれて居つた今日の新參者は何うしたらうかと氣が附いた。

二人一緒に急いで此方に來て見ると、三郎は果して暈つて、青い顏をして惱んで居つた。事務長の一言と一人に參圓宛の土産の功は此時忽ち火のやうに見はれた。

『君太く暈つたね、ナニ直に馴れて了ふから我慢し給へ！お客さまの吐く器は配つたかね？ウンそれなら最う當分用は無い！その中にやお客さまの方でも皆疲れて寢て了ふよ。若し君を呼ぶお客さまがあれば僕達が代つて行くから、君は安心して部屋に入つて寢て居給へ！』

『有がたう、ちやァ何うか暫く願ひます！』

『ア、好いとも好いとも遠慮は要らぬ朝まで寢給へ！』

其處に事務長も心配して樣子を見に來た。

『左樣か、ちやァ寢るが好い！何に直に馴れるよ、少しも氣遣ふ事は無い！』

三郎は部屋に入つて横に成つたが、船體の動搖は刻一刻に烈しく成るので、何とも言へぬいやな氣持に成つて、愈〻疲れ切るまでは何うしても眠られなかつた。

翌朝三郎は不圖眼が覺めると、我れ自らを船中の窮屈な寢床の中に見出した。

『ア、左樣だつた！』

自分は急に境遇の變つて居た事を自覺して枕を上げた。同時に早胸を突いて、母や妹の事が思はれた。

『何うして居るだらう？』

彼は情の人であつた。

海は穩に成つたと見えて、昨夜とはまるで比較の出來ぬ程船は靜に進んで居つた。船の窓から覗いて見ると、何だか最う陸に近附いて居るやうに思はれた。

二人の仲間は最う何時の間にか何方も寢床を離れて居つた。昨夜案じたよりは氣持も勝れて、これなら何うにか働けぬ事もあるまいと思はれた。寢床を離れて靴を穿き、今上着に手を通して居ると、一人の仲間が戸を開けて聲をかけた。

『何うだね、君心持は？頭でも痛いやうなら無理をして起きなくても宜いよ』

『いゝえ、今朝は大きに快いやうに思ひます。昨夜は何うも色々お世話さまに成りました！』

『起きられるかい、ぢやア此方へ來て顏を洗ひ給へ！最う徐々お客さまが起きなさるから、今朝一通り仕事の順序を敎へて上げやう』

新參者は低く出るに限る。三郎は怜悧であつた。

『何うか何分願ひます！』

顏を洗つたのは、最う甕て七時頃だつた。取敢ず事務長の部屋に行つた。

『お早うございます！』

事務長は今起きて、服を着て居る所だつた。莞爾笑つて、

『ア、お早う！何うだ君起きられたかね？』

『はい』

『ナニ直馴れるよ、少しも案ずる事はない！』

『君來給へ！』

前の仲間が呼びに來た。

『オイ生田』

事務長は呼び止めて、

『親切に萬事敎へて遣つてくれ』

『はい』

一緒に炊事場の方に來て見ると、左舷に當つて陸が見えた。雪の積つて居るのも明々見えた。海は藍壺のやうに青かつた。

『君此處は何處です？』

『最う直に多度津だ！』

『讃岐の多度津ですか』

『左樣さ！』

三郎は最うそんなに遠く來たかと思つた。

（二十）朝の海

食堂の掃除は既に出來て居つた。三郎は仲間の一人と一緒にバケツを提げて客の洗面所に水を運ん

だ。

客はポツ〳〵部屋から出て來て面を洗ひ、食堂の卓の周圍に集まつた。暖爐の火は早盛んに燃えて居た。新參の三郎は先輩に從つて、客に茶を出し、次には炊事場から食事を運んでお給仕をした。昨夜播磨灘で大分船が搖れたので、今朝は食堂に出る氣力の無い婦人客も二三人あつた。食事が濟むとお膳を引き、後で直に珈琲を出し、また後を片付けて食卓を拭いた。

船は此時多度津に着いた。客は我れ先にと甲板に出た。上等室にも二三人、此處で下りる客もあれば乘る客もあつた。三郎は暫く其の送迎に忙しかつた。一わたり極りが附くと、今度は自分達の朝飯に成つた。

『來給へ飯を食はう！』

朝風に吹かれて氣持は爽快に成り、大分運動したので腹も幾分空いては居つたが、三郎は昨夜の辛さを忘れずに、今朝は一食々事を控へた方が安全であると思つた。

仲間の食事をして居る間に、三郎は甲板に上つて清い空氣を吸ひながら四方の新しい風景や土地の樣子に眼を留めた。

船の左右には七八艘も土地の商船が集まつて、船の窓越しに客に物を賣つて居つた。三郎も蜜柑を

買つて食べて見ると、胸がスッと開くやうに覺えた。

甲板の雪は既に拂つた跡であつたが、まだ彼此に白く幾分殘つて居た。陸には雪が二三寸積つて居つたが、空は薄綠色に晴れて、朝日の光が美しかつた。

海は碧く波も靜で、所々に點々と白帆が朝日を受けて光つて居た。船の左右の舷門は開かれ、其處から荷物を積んだり下したりして居つた。三郎は左舷の手摺に胸を着けて、下の光景を覗いて居た。

『何うだね、面白いだらう！』

言つて背中を輕く叩いた人があつた。惚りして振返ると、それは事務長の角井君であつた。事務長は快活に、

『三郎君朝飯食つたかい？』

『今朝は控へた方が宜いと思ひまして……』

『ハ、ハ、弱いね、昨夜播磨灘で懲りたと見える！』

三郎は全く懲りた。昨夜播磨灘の入口で胸がムカ〳〵して來た時の不快さは、實に何とも言へぬ程辛かつた。三郎は此時事務長の顏を見て苦笑し、

『吐く時は隨分いやな氣持でした！』

『ぢやァ馴れるまで少し食物を控へるのも宜からう。腹が空いたら何時でも來給へ、僕の所に菓子がある』

言つて直と下に降りた。三郎も後から續いて我が受持の場所に來た。

『ボーイ』

忽ち客の一人が呼んだ。

『はい』

『この船は伊豫の三津ケ濱に寄るかい？』

『如何でございますか、一寸糺いて參りませう』

三郎は直に後に取つて返し、

『寄るさうでございます』

『ア、左樣か』

『ボーイさん！』

向ふの部屋の戸が開いて、色の青い婦人が呼んだ。

『はい』

『お茶の熱いのを持つて來て下さいな！』

『畏まりました！』

直に炊事場に行つて取つて來た。三郎は盆を片手に部屋に片足入つて見ると、婦人は鉢卷をして横に成つて居つたが、少し頭を上げて、

『何うも有がたう！ボーイさん此の船は、何時馬關に着きますでせうね？』

三郎は最う徐々黑人に成りかけた。先刻事務長に貰つて置いた時間表を衣嚢から出して見て、

『今夜の七時に着く豫定に成つて居ります』

『左樣ですか。ぢやア今日一日まだ斯うして、此の船に乘つて居なければ成りませんね！』

三郎は少なからず同情した。

『若し又御用がおありでしたら……』

『有がたう！』

婦人の傍には生後百日經つ經たぬ赤坊が寢て居つた。

（二十一）精神の復活

船は多度津を發して備後灘にかゝつた。また少し船體が動搖して來た。客は大方部屋に入つて寢て了つた。一寸用事も無さゝうなので、三郎は事務室に角井君を訪うて見た。

『入り給へ！』

『御免なさい！』

『腹が空いたら菓子でも遣らうか』

ゴト〳〵機關の音が聞えて、船はギイ〳〵鳴つて居た。

『事務長さん、また餘程搖れるでせうか』

『ハ、、、、、大將大分懲りたと見えるな！君はそんなに船が嫌ひかね』

『別に嫌ひと云ふ譯でもありませんが……』

『その樣子ぢや餘り好きでも無さゝうだ。强盜を捕まへた男にしちや餘り弱いぢや無いか』

三郎は苦笑せざるを得なかつた。

『マア菓子でも食ふさ！』

事務長は笑つて、

『三郎君、そんなに船が怖いなら、船に暈はぬ法を敎へて遣らうか』

三郎は莞爾笑つて顏を上げ、

『ハア何うか敎へて下さい！』

『マア茶でも取つて來給へ！』

『はい』

折から船は波に乘つてズッと上り、三郎が一歩事務室の外に出ると共に、またズッと下に下つた。新參者は再び胸が張つて來た。事務室の戸に暫く摑まつた切、彼は進む勇氣が無かつた。

『ハ、、、、』

事務長は內からこれを見て笑ひ、

『ぢやアまあ此方へ入り給へ！』

三郎は怖々入つた。事務長は又笑つて、

『その腰附ぢやア强盜は捕まりさうにも無いね！』

今度は笑ふ元氣も無かつた。事務長は卓子の上でカステイラを切つて、さも甘さうに頰張つた。三

郎は此の中に好く物が食べられると思つた。

『大丈夫轉げる氣遣は無いから、兩脚を男らしく踏張つて其の椅子に掛け給へ！』

『はい』

怖々掛けたが、三郎の顏色は靑かつた。事務長は又菓子を取つて頰張りながら、

『船に暈はぬ工夫と云つても外には無いが、人間の精神は肉體を支配するもんだよ。おれは暈はぬ、船などには斷じて暈はぬと云ふ元氣が充實して居れば、何んなに船が動搖しても斷じて暈ふ氣遣は無い！けれども此方に恐怖心があつて、初めから暈ふなどゝ怖れて居ると、到底立てる氣遣はない！要するに氣が確であれば暈はぬ、斷じて暈はぬ！弱い精神を有つて居れば直に暈ふ！暈ふ暈はぬは此方の心次第のものぢや！船位が何だ、暈つても死ぬる氣遣は無い、氣を確に有つて居り給へ！』

『成程！』

三郎は元來元氣にも饒み、且つ固い信仰をも有つて居る少年であつたので、事務長の話を聞くと共に我が本來の性格が生きて來て、忽地四肢に元氣と信仰とが一齊に溢れて來た。同時に彼の靑い顏は赤く成つた。三郎は直然と立つて、

『事務長さん有がたう！御安心下さい、僕は最う斷じて船には暈ひません！一ッお茶を取つて來ませ

う！』

莞爾笑つて出て行つたが、その活潑なる動作はまるで別人のやうだつた。事務長は彼の勇敢なる後姿を見送つて、天晴頼母しい少年だと思つた。

（二十二）職務の人

三郎がお茶を取りに行つて居る間に、船が益す動搖して來た。勵まして遣るは遣つたが、これでは何うかと事務長は心配して居つた。

三郎は程なくお茶を持つて來た。事務長は心に賞して顏には笑ひ、

『何うだ三郎君、大分好い工合に搖れて來たらう！』

彼はお茶を注いで面を上げ、

『左樣ですか。僕は大事なお茶を溢さぬ事に注意して、船の搖れる搖れぬには少しも頓着しませんでした！』

彼は早くも渾身職務の人と成り得たのであつた。事務長は心窃に喜んで、

『左樣かい！然う成れば直に腹が空くよ。何うだ菓子を食つて行かぬか』

彼は旨さうに食べて茶を飲み、

『事務長さん、このお菓子を少々頂いて行つても宜しうございますか』

『持つて行き給へ！』

三郎は二切づゝ紙に包んで兩手に持ち、

『ぢやァ又伺ひます！』

確りした足取で出て行つた。

『ヤァ君御馳走だね！』

二人の仲間は喜んで、

『君氣分が惡けりや今日も寢て好いよ』

分れて三郎は任務に就き、我が受持の場所に遣つて來た。船は前後に直立しながら進んで居た。三號室の前に來ると、赤坊の泣聲が聞えた。

『ア、此處だつた！』

三郎は室内を覗いて見ると、例の婦人が最う半死半生に成つて、赤坊に乳を哺せる事も出來なく成

つて居つた。三郎は直に入つて赤坊を抱かせて遣り、親切に婦人を介抱して遣つた。人間に感謝の念の無い者は無い。

『ボーイさん、何うも有がたうございます！』

『何う致しまして、お一人では嘸お困りでございませう！』

『小兒を連れて居りますのでね……』

三郎は母の事を思ひ〳〵暫く婦人の背を擦つて遣つた。その中に船體の動搖も幾分か輕く成つて、婦人は吐氣が治つて來た。三郎は其邊の汚物を清潔に片附けて遣り、水を持つて來て嗽をさせた。婦人は度々頭を低げて、

『ボーイさん、何うも濟みませんでした！私のやうな船に弱い者が乘つちやお氣の毒さまですね！』

『何う致しまして、また御用がおありでしたら、何時でも何うかお呼び下さい』

三郎は同情心の強い男で、昨夜播磨灘で、自分が始めて吐いた時の辛さを思ふと、他の苦しむのを傍觀して居る事は出來なかつた。

船は備後灘から來島海峽に懸り、周防灘を經て其の夜事なく馬關に着いた。

乘る客あり下りる客あり、此處では實に多忙を極めた。

安治川丸は夜の十時に馬關を出帆して、響灘、次は有名な玄海灘を經て博多に寄港し、翌日此處を出帆して長崎に向ひ、それから肥後の百貫と云ふ港まで行つた。

此處に一晝夜碇泊して、客を乘せ荷物を積み、また前の航路を取つて後に返した。三郎は此の時始めて熊本を見、長崎を見物し、博多にも二時間許上陸して見た。

いかに氣を張つて居つても、行きがけには初航海の事であるので、まだ仕事にも馴れず其の上氣持も勝れなかつたが、事務長の最初言つて聞かせた通り、歸りには最う全然船に馴れて、陸に居るよりも腹が空いた。事務長は安心して、

『一年も斯うして船に乘つて居ようものなら、今に屹度丈夫な身體に成る。早く健全な身體に成つて、おッ母さんや妹さんに安心させ給へ三郎君！』

『有がたうございます！』

感謝して三郎は、心窃に自分は此の人に救はれたと思つた。

(二十三) 親子の恩愛

親子の恩愛

子を忘れぬ親は多いが、親を忘れぬ子は少ない。葭江は一日も三郎の事を忘れる暇が無かつた。三郎も亦一日として、母や妹を忘れなかつた。

葭江は、毎日三郎の便を待つて居つた。三郎は必ず到る處から精しい便をした。何時頃に歸つて來ると云ふ事も葭江は略知つて居つた。

その中に正月は暮れて、最早餘す所は僅か一日か二日に成つた。今夜も葭江母子は夜業を仕ながら三郎の話をして居ると、唐突に戀しい聲が胸に徹へた。

『おッ母さん只今！』

呼ぶ聲諸共入口の戸が開いた。

『ア、お歸りか』

『兄さん！』

『今噂をして居た所・・・』

『お變りは無かつたですか。菊代お前は何うだつた！』

二人共無事であつたと聞いて三郎は安心し、形ばかりの佛壇に向つて、父の位牌に兩手を合せた。

葭江は火鉢に炭をつぐ、菊代は仕事を片付ける、誰の顏にも喜ぶ色が滿ちて動いた。三郎は何より先

に事務長の厚意を語つて母に喜ばせ、次には海上生活の狀態を語つて安心させ、次には諸方の珍らしい話などをして聞かせ、土産物を出して母や妹の前に列べた。

御飯は既に途中で事務長と食べて歸つて來たと云ふので、母はお茶を入れる、妹はお菓子など買つて來て、紅く火の起つた火鉢を賑に取卷いて夜の深けるまで愉快に話した。

三郎は此の時二夜家に宿つて、また事務長の角井君と、一緒に船に歸つて行つた。三郎は此の時參圓金を母の許に置いて行つた。妹にも壹圓遣つた。

『お前このお金は持つて行かなきや困るでせう？ 内は何うにか二人で遣つて行きますからね！』

葭江は金を受取りかねて斯う言つた。三郎は氣輕く、

『ナニおッ母さん大丈夫です！ 月給は六圓しか貰ひませんが、中々收入のあるものです。一通り入用な物を買つて了へば、それから月々幾らづゝかおッ母さんに進げられるだらうと思ひます！』

葭江は三郎を見送りながら、今日も一緒に事務長の家まで來て、尙我が子の事を懇々賴んだ。事務長は快く引受けて、

『小母さん、最う船に馴れたから大丈夫ですよ。私が何處までも引受けます、決してお案じ成さらんが宜しい！』

二人共頗る元氣で立つて行つた。馥江は安心して家に歸つた。

三郎は大阪で事務長と別れて入用な物を買ひ、最後に去年の暮まで奉公して居つた本屋に來た。主人は三郎の樣子の一變したのを見て驚いた。三郎は厚く過去の禮を述べ、主人始め一家の人々の安否を問ひ、我れは今何を爲しつゝあるかを語つて、兼て欲しいと思つて居つた本を買つた。それは側に片假名で訓讀の附いて居つた四書五經であつた。

三郎は少年の時に四書五經の素讀丈は一通敘はつたが、先生が餘り確かな人で無かつたので、訓讀の分らぬ所が大分あつた。彼は今度買つた本を手引にして、船の中で餘暇に獨修しやうと云ふ積りで、態〻この參考書を買つたのであつた。

三郎は兼て欲しいと思つて居つた本が買へたのでニコ〳〵し、主人に暇を告げて出ると、三人の店員は三郎の自由なる身の上を羨ましがつて見送つて居た。彼等は三人共三郎には新顏の者ばかりであつたが、可哀さうに三人共最う徐々營養不良の特徵がその顏色に歷々と現はれかゝつて居た。

三郎は店を出て川口の方に向ひながら、我が悲慘なる過去の事を想起して戰慄した。

『自分は能くまあ彼んな家で二年間も辛抱した事だ！彼の間に何か獲物があつたか知ら？』

その中にも矢張何か獲物はあつた。

『イヤ有る〳〵、人は恒に心を用ひて居れば、如何なる境遇の間にも、何か屹度獲物はあるものだ！彼の店に在つた本の名を記憶した丈でも少なくない。二年の間に何時と無く覺えた字の數丈でも二百字や三百字ではない？』

彼は滿足して船に歸つた。

(二十四) 感謝の紀念

この日の午後正一時に安治川丸は川口を出帆して、また定期航路に就いた。

大膽は經驗の別名である。早い話が素人には檣に登つて仕事は出來ぬ。

まだ一度も航海した經驗を有つて居なかつた三郎は、この前初めて安治川丸に乘つて航路に就いた時は、色々な恐怖心が伴つた。その爲に彼の元氣は一時女々しく萎縮して、船に乘つたと云ふ事が既に彼を何處までも心細く思はせた。

けれども既に一度實際に航海して來た三郎は、前と比べて見ると、まるで生れ變つた人間のやうに大膽に成つた。これは全く經驗の効で、譬へば一度實戰の經驗を積んで來た兵士が、二度目に戰爭に

行くのと同じやうな理窟であつた。

この夜神戸を出帆して、また例の播磨灘にかゝつた。二八月と云つて、海は今一年の中でも一番不穏な時期だつた。明石海峡を後にして、愈〻播磨灘にかゝると云ふと、船體が徐々動搖仕始めて、果は非常な暴れに出會した。三郎は今度が若し最初の航海であつたならば、彼は何んなに惱んだかも知れなかつたが、三郎は平氣で其の任務に堪へて居つた。

『土肥君、君は早く船に馴れたね！』

二人の古參は舌を捲いた。

『暈はぬ！假令この船は覆らうとも、我が命數の盡きぬ間は斷じて死なぬ！』

この信仰が有つたので、三郎は人よりも一層早く船に馴れたのであつたらう。

三郎は此の夜播磨灘で多數の乘客の惱むを見るや、奮然として我が特性の美性を發露し、少しも賤しいボーイ根性などを出さず、力の及ぶ限り乘客を保護して、各人に對し少しでも其の苦痛を免れさせるやうに働いたが、殊に老人や婦人小供に對しては、何人も感謝せずには居られぬ程叮嚀に撫恤つた。

三郎が今夜の忍耐、勇氣、注意、殊に乘客一同に對する愛情は、慾得づくの人間を遙に遠く通り過

ぎて神の範圍に立入つて見えた。

翌朝一同食卓に就いた。三郎はこれから給仕をしなければ成らなんだ。彼は朱塗の盆を持つて姿勢正しく直立し、彼此から茶碗の來るのを待つて居つた。一同急に箸を取らず、昨夜播磨灘に於ける一時の苦痛を互に訴へ合つて居つた。中に白髯の一老人あり、直然と立つて三郎に向ひ、

『ア、これは相濟まぬ事をした！ボーイさん、昨夜彼の暴れの最中に、色々御親切にお世話下さつたのは確かお前さんだつたね？』

三郎は微笑して腰を屈め、

『何う致しまして、嘸、皆樣御難儀で居らッしやいましたでせう！』

老人は肅然として敬意を表し、

『御免下さい！喉下過ぐれば熱さを忘れるとやらで、人間はこれだから困りますな！愚老は昨夜彼の時に、君に向つて實は衷心より感謝せざるを得なかつたです！ア、君の昨夜の行動は實に立派であつた！嘸かし今朝はお疲れであらうと思ひます！愚老は先づ君に向つて一言お禮を申し述べぬ中は、今朝の食事を君の手から頂く譯には行かぬ！皆さまには失禮ながら、何うか一寸そのお盆を此方に貸して下さい！』

老人は盆を借りて前に置き、幾枚かの紙幣を正しく紙に包んで盆の上に載せて差出し、

『これは眞個の些少ながら感謝のお印までに差上げたい、何うか納めて頂きたい！』

三郎は驚いて押戻し、

『御厚意は辱なう存じますが、彼んな場合に出來る丈のお世話を致しますのは、私共の任務でございます！』

『イヤ任務は任務、厚意は厚意、感謝の紀念にこれは是非何うか納めて頂きたい！』

一同も大きに感じて、我れも〳〵と老人の爲す所に倣ひ、三郎が昨夜の行動を賞讃して、その厚意を齊しく感謝し、

『何うも大層御厄介に成つた。我々供もお禮のお印までに些少宛ながら差出したい、何うか是非納めて頂きたい！』

三郎は困つて居ると、其處に事務長が遣つて來た。

『皆さまお早うございます！昨夜は少々暴れまして、嘸、御難儀でございましたらう！別にお變りも居らつしやいませんか』

挨拶の終るのを待つて、

『事務長さん』

三郎は委細を告げて其の指揮を待つた。事務長は滿足し、

『左樣か、それは結構だ！頂いて少しも差支は無い！獨り君の名譽ばかりでは無く、お前のやうな忠實なボーイが此の船に居ると云ふ事は、取りも直さず此の安治川丸の名譽である！厚くお禮を申しあげてお受け致すが宜しい！私からもお禮を申しあげる、何うも皆さま有がたうございます！』

この話を聞いて、食堂に出なかつた者も、後で三郎に皆各自昨夜の感謝の紀念を贈つた。

(二十五) 一喜一憂

今度も亦肥後の百貫まで行き、二月中旬に大阪へ歸つて來た三郎の財布には五拾圓以上の金が入つて居つた。

今回の航海は往復共に海が暴れた。乘客は皆惱んだ。三郎は何人に對しても肉身の情を以て世話をした。至誠の前に虚僞のあらう筈は無い。皆三郎の親切なる取扱に滿足し感謝して、別れに臨んで幾分宛の禮をした。それが積りて五十圓以上に上つた。實に清淨な金で、言はゞ此の五十圓の金は、

彼の乗客一同に對する愛情の副産物であつた。

一航海終つて船が大阪に着くと、何時でも二晝夜の休暇を得られる事に成つて居た。三郎は此の休暇を得て陸に上る、すぐ其の足で母を見舞つた。

既に我が家に近附いた三郎の四肢には生命が溢れて居た。胸は喜びに跳り立ち、その眼は愛の光を放つた。

『おッ母さん只今！』

『アヽ、兄さん！』

菊代は喜んで飛んで出たが、母は顔を見せなんだ。

『おッ母さんはお留守？』

靴を脱きながら三郎は問うた。

『少しお加減が惡うございまして……』

喜びあれば憂ひあり、三郎が顔の光は俄に薄れた。

『何んな御容體だかい？』

暗い吊ランプの下を過ぎ、古い枕屏風の傍に寄ると、母は疲れてスヤ〳〵と眠つて居つた。三郎は

振返り、重ねて妹に問うて見た。

『何んな御容體かい？』

『矢張お風邪なんでせう』

『何時頃から？』

『最う彼此十日許に成ります』

『左樣か、お醫者さまは？』

『毎日入らして下さいますの』

『それで少しはお宜しい方かい！』

『ハア昨日あたりから大分ね……』

『何か少しは召食るかい？』

『昨日始めてお粥を少許、今日は輕く二ッばかり召食りました』

『左樣か、それはまあ有がたい！』

『お體溫の高い間は、浮言に兄さんの事ばかりおッしやつて、私は眞個に何うしたら好いだらうと思ひました！』

『左樣か、そりやお前一人で嘸心細い事だつたらう！だがまあ善く介抱してお上げ申してくれた！お前が居てくれるので吾は旅に出て居つても何んなに心强いか知れぬ！』

妹は兄の優しい言葉が身體に泌み渡るやうに覺えた。

『だが最う兄さん大丈夫よ。一時は眞個に何う成る事かと思ひましたが、最うこれならば大丈夫治ると、今日お醫者さまもおッしやッてよ』

『左樣か、不斷は御丈夫な方だが、今年は此の通り寒さが强いのでね……。併しまあ幾分でもお宜しい方だとあれば安心だ！』

三郎は感謝して、

『お前は何うだい？』

『私は何うも無いわ！』

妹は色の白い、眼元の優しい、實に可憐な少女であつた。

『風を引かぬやうにしておくれよ。兄さんは又直に行かねば成らぬからね！』

少女は心細かつた。

『兄さん、今度も二夜丈は家にお宿り成さつて好いんでせう』

『アヽ二夜丈は差支へぬ』

『おッ母さんを起しませうか』

會ひたいは會ひたいが、

『マアそつとお寢かし申して置いた方が宜からう』

『でも兄さんのお歸り成さるのを、大層待つて居らしてよ』

『左樣かい！道理で今度は家の事が氣に成つて堪らなかつた！だがまあ菊代、おッ母さんがお治り成さつて結構だつたね！』

『はい！』

妹も今夜始めて安心した。三郎は再び感謝し、母の枕頭に腕組して眼を閉ぢた。夜は最う既に十時に近く、人生の哀史に富んだ我が家は森として寒かつた。

(二十六) 少女

三郎は我れに復つた。

『菊代、火鉢に炭をつがうぢや無いか』

『はい』

『炭は無かつたかい？無ければ吾が買つて來る』

『炭はあつてよ』

『ぢやアたんとおつぎ、おッ母さんの傍を暖かにして置かなくちやいかん！』

妹は白い手に火箸を取つて、炭を三ッ四ッ火鉢に入れた。

『もつとおつぎ、もつとおつぎ、ドレ兄さんに其の火箸をお貸し！』

可哀さうに貧苦の中に育つた菊代は、まだ十三か十四の少女でありながら、炭をつぐにも自から控へるまでに貧の苦痛を感じて居つた。

三郎は自ら奉ずる事は薄いが、親の爲には何物をも惜まなかつた。おもひ切つて炭をつぎ、

『菊代、生活向の事は餘り心配せんが好いよ。これからドシ〳〵兄さんが働くさ！』

少女は涙含んで點頭いた。

『お前にもこれから衣物を拵へてやるよ』

妹は何の爲か、急に小さい胸が塞がるやうに苦しく覺えた。

三郎は聲を潜め、

『家にお金はあつたかい？』

妹は幅の狹い帶の間に手を入れたが、母に預つた古い財布を開けて見せ、

『兄さん、まだ此丈あつてよ』

三郎は覗いて見ると、ア、危い事だつた。拾錢銀貨がたつた一個と、銅貨が二三個ある丈だつた。

三郎は慘として、

『お前嘸心細かつたらうね！ヨシ〳〵お金は今度兄さんがどつさり持つて歸つて來た、何にも心配する事は無い！』

妹は眼を拭いて、

『私も彼の時兄さんに頂きましたが、この前兄さんがお立ちに成つた翌日あたりから、おッ母さんが何處と無くお加減が惡く成つて、お仕事が出來なかつたもんですから……』

『左樣だつたか』

『でも彼の時兄さんが、三圓置いてつて下さつたのと、おッ母さんが未だ少許有つて居らしたんで……』

『ヨシ〳〵今度はどつさり置いて行く』

妹を慰めて居る間に、寒夜の火は忽ち起つて、粗末な鐵瓶の湯が沸り始めた。

『ア、湯も沸いて來た。少し鐵瓶の蓋を取つて置かうかね』

菊代は障子を開けて臺所に行き、茶道具を持つて來て、兄にお茶を入れて薦めた。

三郎は未だ洋服を着た儘火鉢に近く此處は我が家と打寛いで胡坐を掻き、吹き〳〵熱い茶を喫んで居た。火は起り、鐵瓶から湯氣が立つので、茅屋ながらも部屋は忽ち暖まつて溫度が十四五度も昇つて來た。

『菊代暖かに成つて來たね』

妹は病人の方を見て、

『これなら母さんもお寒くは無いでせうね！』

『何でも暖かにして、お上げ申さ無くちやいかん！菊代、若し召食られるやうだつたら、明日は何かおッ母さんのお好きな物を取つて上げたいものだね！』

これを一つの樂みにして、三郎は今夜戻つて來たのであつた。

『兄さん、おッ母さんは小田卷がお好きよ』

『小田卷！それは何よりお易い事だ！菊代、お前も好きかい？』

少女は始めて笑つて點頭いた。

『ぢやアお前にも御馳走しやうね！』

また點頭いて、

『兄さん、お茶は最う召上らなくて？』

『ア、最う澤山だ！菊代お前は食べんか、兄さんの此のお茶碗を上げやうか』

『私食べないわ！』

『ア、悉皆忘れてた！お前にはお土産に、ア、左樣だ、此處に虎屋の饅頭がある！』

三郎は急いで鞄を開けて居ると、咳嗽をして病人が眼を開いた。

(二十七) 愛の音樂

夜明に葭江は眼が覺めた。

『昨夜三郎の顏を見て喜んだのは、若しや夢では無かつたらうか』

イヤ夢でない。三郎は自分の後に、菊代は前に、母子三人、枕を列べて寢て居つた。

葭江は萬金を積んだよりも氣丈夫に覺えた。さうして安心して、また安らかに眠りに就いた。

三郎は早く起きて、妹に手傳つて、先づ火鉢に火を起し、お湯を沸して室内を溫めた。今朝も外は酷い霜で、何の家の屋根を見ても白かつた。兄は臺所を覗いて見ると、妹は上手に火を燃しながら早御飯を炊いて居た。兄は笑つて、

『最う御飯が炊けるやうに成つたね！』

『炊けるわ！』

振返つて嫣然笑つた妹の顏は、兄をして大いに心强く思はせた。

『最うお味噌は摺つたかい！』

『今直に！』

『兄さんが摺つて上げやうか』

『私が摺つてよ』

『でも冷たからう！』

未だ年の行かぬ妹に、味噌まで摺らせるのは酷いと思つた。

葭江は兄妹の話して居る聲を聞いて目が覺めた。

兄は味噌を摺つて居り、妹は葱を切つて居るのが見えた。

葭江は兄妹が仲好く働いて居るのを見て、今朝は病氣が急に治つたやうな氣がした。

『兄さん、今度何時歸つて入らッしやるの？』

『月末に成るだらうよ』

『兄さん今度は、彼んな飴のある所には行らッしやらないの？』

『ア、彼の朝鮮飴かい？彼は肥後の熊本の名物だ、お前好きかい？』

『私大好きよ』

『ぢやア今度は又買つて來やうね！』

葭江の耳には兄妹の聲が、微妙幽玄なる音樂のやうに響いた。

總ての病氣には、靈藥の百ポンドよりも一オンスの快樂の方が遙に能く利く。葭江は今朝人生無上の快樂に接して、急に身體が輕く成つて、この儘起きて臺所に行き、樂しい兄妹の仲間に自分も加はらうかと思つた。

『三郎さんも菊代も最う起きたの、この寒いのに！』

三郎は飛んで來た。

『ア、おッ母さんお目覺ですか、今朝はお氣分は如何です？』

『お前の顏を見て氣丈夫に成つた所爲か、三郎さん、今朝は大層氣持が快いよ』

『それはまあ結構です！』

『お前の留守に病ひついてね、一時は大分重かつた。最うお前にも會はれるか何うかと思つたが、まだ私の任務を終らせて頂かないと見えてね、今朝の此の容體ちや最う大丈夫、何うか安心して下さい！』

母の言葉を聞いて、三郎は安心し、元氣は忽ち昨日に復した。

『おッ母さん、今日は三人でお祝をしませうね、何うか一日もお早くお治り成さつて下さいよ』

藥を服せて背中を擦り、溫かい情と優しい言葉を以て母を撫恤つた。

『兄さん御飯を召食れ！』

菊代がお膳を抱へて來た。御飯からもお汁からも溫かさうに湯氣が白く立つて居た。

『オ、菊代さん、最う御飯が出來ましたかい？三郎さん早く溫かい中にお食べよ。菊代さん、お前も早く兄さんと一緒に其處でお食べなさい！今度はまあ此の娘が何んなに私の便に成つたでせう、兄さん何うか褒めて遣つて頂戴！』

『菊代御褒美に、何かお前の好きな物を買つて上げやうね！』

少女は可憐事を言つた。

『おッ母さんさへ快く成つて下されば、私は何にも要らないわ！』

葭江は涙が沸いて來た。

『子なればこそねえ・・・』

兄妹は若い夫婦のやうに、仲睦しく御飯を食べた。

『ア、今朝は暝で好い！』

何時も斯うして暮したならば、嘸樂しみな事だらうと葭江は思つた。

菊代は幾度も箸をおいて、兄に御飯を裝つて遣つた。最後に受けた兄の茶碗に、菊代はお茶を注がうとした。三郎は手を振つて、

『菊代御飯だよ』

妹は驚いて、

『兄さんは隨分召食るやうに成つたわねえ！』

葭江は今朝始めて笑つた。

『それ丈々夫にお成り成さつたんだよ。菊代さん兄さんは、この前歸つて來なさつた時から見ると、またズッとお肥り成さつたやうだね！』

（二十八）氣のいさみ

御飯の濟んだ後で、三郎は牛乳を沸して母に薦めた。

『有がたう！』

葭江は喜んで、一合の牛乳を樂に飲んだ。

この容體ならば、最う大丈夫とは思ふものゝ、自分はこれから又一航海して來なければ成らなかつた。三郎は一刻も速に母の容體を確めたいと思つて、禮がてら醫者の許に出かけて行つた。

醫者に會つて身分相當の謝禮をし、母の症狀を尋ねて見ると、病症は肺炎だつたが、一定の經過を取つて體溫がうまく分離して、外に異狀も認めんので、當分靜養したならば、別に心配するやうな事はあるまいと言つた。

三郎は安心して母の生命を拾つたやうな思ひがした。重ねて醫者に禮を述べ、尙懇々と今後の事を頼んで置いて、家に歸つて來て見ると、事務長が見舞に見えて、色々母に力を附けて居てくれる所であつた。

この時三郎は母に就いて、精神と肉體との關係は斯くまでも深いものかと云ふ事を感せずには居られなかつた。妹の話に據ると、昨日の夕方までは、まだ大分容體が惡かつたと云ふのに、今朝は口も利く、笑顏も見せる、第一顏に生氣が動いて來て、まだ〳〵これでは人間の任務の果てた人とは決して見えなかつた。

三郎は母の生命に就いては既に疑はなかつた。併し其の症狀や療養の方法等に就いて、一度醫者に糺した上で、自分がこれから留守に成つても安心を得られる丈の道を講じて置きたいものだと思ひ、醫者の許に出かけて聞きたいと思ふ丈の事を遺憾なく聞き、更に安心して歸つて見ると、母は事務長から親しく自分の事を聞いて、大いに安心したものと見えて、今朝自分が出かけて行つた時よりも更に一層元氣に成つて、その血色と云ひ、言語又は動作と云ひ、大患後さだ日數の經たぬ人とは見受けられぬ程、總てが生々して居つた。

親子の關係程密接なものは世にあるまい。この時若も三郎が元氣を亡つて歸つて來たら、或は母が

病後の身體に觸つたかも知れぬ。併し三郎は實に元氣に富んで歸つて來た。母は直に其の氣を受けて我が子同樣に元氣に成つた。

精神は全く肉體の保護者である。葭江は我が子に就いて全く安心し、大なる勇氣を得ると共に、その精神力が忽地盛に成つて來た。

人間は精神が確りして來れば、總ての病症に打勝てる。葭江は我が子三郎の新生活に就いて全く安心し、而も大なる勇氣、大なる希望を得ると共に大なる勇氣が發して來た。即ち精神力が俄に强く成つて來たので、病氣は忽地征服せられて、譯もなく其の健康を回復する事が出來たのであつた。

冬の日は短い。事務長が愉快に菓子を食べ茶を喫み、存分話して歸つた時は、最早彼是十一時頃であつた。葭江母子は事務長に晝飯を出したいと思つた。母子は事務長の都合を聞いて見ると、

『イヤそれは辱けないが、今日は晝飯に家に人を呼ぶ約束がしてある。遲くも十一時までには歸らねば成らんから、この次歸つて來た時にゆッくり御馳走に成る事に今日お約束をして置きませう』

葭江はまだ床に寢て居るので、今日は晝飯を出すにしても思ふやうに行かぬ。この次にとあれば此方に取つては至極都合が好かつた。

『それでは今度お歸りに成りました時には是非何うか！』

『屹度上ります。何うかまあお大切に！三郎君、明日の夕方此方を立たうな』

言つて事務長は歸つて行つた。

(二十九) 幸福

事務長の歸つた後でも葭江の元氣は少しも衰へて見えなかつた。

『マア私も眞個に安心しました。好い所にお世話をして下さつて、三郎さん有がたいね！』

三郎も全く滿足して、

『おッ母さん確り遣りませうね、今度の所は望みがあります！』

菊代も喜んで、今日は急に生々して兄の使に出て行つた。

『おッ母さん、今日は一日家に居りますから少し擦つてお上げ申しませう。太いお熱の出たお後ですから、お身體が嘸御大儀で居らッしやるでせう！』

三郎は蒲團の下に手を入れて、徐に腰から脚の方にかけて擦り始めた。快い氣持ではあつたが、激しい勤務をしてたまさか家に歸つて來た三郎に、葭江は我が脚腰を擦らさせるには忍びなかつた。

『ア、勿體ない廢しておくれ！私こそお前を擦つて遣りたいのに……』

成程親心として然うもあるだらう。併し三郎は又三郎で左樣は思はなかつた。病中側に附いて居れば何のやうにも御介抱申しあげたものを、妹一人の看護では嘸御不自由な事であつたらう。何んなにお心細い思ひを成された事であらう。出て行けば又暫くは歸られぬ。切ては今日明日家に居られる間丈でも十分看護して行きたいものだと心から思つた。

『マアお母さん然う仰有らずと、今日は一日何うか私に介抱おさせ成すつて下さい！』

『ナニ最う此の分ならば大丈夫です、決して心配して下さるな！　お前は嘸疲れて居ることであらう。疲れて居ては船に乘つて働けまい。今日明日はまあ寛り家に居て手足を伸して休むが宜い！サア私は最う此の脚火は要りませぬ。これを入れて溫にゆッくりお休み、船に乘つて居つてはねえ……』

『イエお母さん、船に乘つて居れば愉快です、決して疲れるやうな事はありません。私は寢たりなどするよりは、斯うしておッ母さんのお身體を擦らせて頂くのが嬉しうございます。ア、私は今日斯うしておッ母さんをお擦り申して居る間にも、神樣や佛樣に厚くお禮を申しあげて居ります。今度若し歸つて來ても、斯うして親しく我が手でお擦り申すおッ母さんが、若も此の世にお居で成さらなかつたらば、私は今日は何んな思ひをして居るでせう！その思ひに比ぶれば、私は物の十日か一月眠らぬ

位は辛いなどゝは思ひませぬ！何うかまあ左樣仰有らずと、切ては斯うしてお側に居らせて頂く間なりとも介抱させて頂きます！』

斯んな子が世間に大勢あるであらうか。人の子は皆斯うこそなければ成らぬ。何れも皆斯うこそありたいものであるが、世の人の子の多くは强ち左樣でない。

『ア、善い子を頂いた我が身は誠に仕合だ！』

葭江は窃に感謝した。同時に涙を見せぬ譯には行かなんだ。

『ア、勿體ない！私を見たやうな仕合な者が又と一人世の中に在りませうかね！決して案じて下さるなよ。私はお蔭さまで、最うこれで治りました！ア、有がたい有がたい。何とお禮の申しやうもありません！お父さまがお亡なり成さる時に、私に色々お諭し下さつた事を、私は今ひしゞと、一々胸に思ひ當ります！ア、世の中は酷くはない。實に有がたい所です！』

『おッ母さん、私は最う外には何にも願ひはありません。早く身を立てゝ何かこれと云ふ職業のある人に成り、おッ母さんのお側に永く居りたいです！』

何方も涙含んで伏した。路途に下駄の音がして、はや其の顏に處女美の映しかゝつて來た菊代が使から歸つて來た。寒中の日差は正午に近かつた。

『只今！』

煤けた障子を開けて、少女の可憐顔が此方に見えた時は、二人は既に涙を拭いて待つて居つた。

(三十) 小田巻

久振で今日は三人顔を合せて色々な話をして居つた。其處に饂飩の小田巻が來た。

『ア、兄さん來てよ』

菊代は立つて珍らしさうに運んで來た。今日の土肥家に店屋物が入るなどは近年實に珍らしい事であつた。

『サアおッ母さん如何です小田巻が參りました』

『オ、これはまあお珍らしいね！』

『サア菊代お前もお食べ！』

『有がたう！』

『ぢやア御馳走さまに成りませうかね』

葭江は床の上に起き、珍らしさうに器物を見て、

『サア兄さんも菊代さんもお食べでないか』

三郎は快活に、

『ハイ頂きます。サア菊代お前も早く！』

三人一緒に箸を取つた。南側の障子には冬の日が赫々と差して、柳の枝が墨畫のやうに映ッて居た。

三郎は忽地小田巻を二ッ食べて、

『ア、おいしかつた！おッ母さん如何です？』

『イエ大層おいしい！』

兄は笑つて、

『菊代何うだ、おいしいかい？』

食べながら笑つて、

『おいしいわ！』

二人は吹き〳〵ゆッくり食べた。

『サアおッ母さん最一ッ召食れ！』

『イエ最う一ッで澤山です。これは何うか三郎さん、お前食べておくれ』
『ぢやア私が半分頂きますから、おッ母さんが何うか半分召食つて下さい！』
『最う澤山ですがね、何うしませう？』
『マア召食れ！召食らなければ元氣が出ませんよ』
『私、最うこれは食べられないわ！』
菊代も後の一ッを持餘した。三郎は二人に向つて勇氣を附けた。
『ぢやア私がこれをまるで一ッ頂きますから、其方をおッ母さんと菊代で何うか……』
言つて妹の分を此方に取つた。
『ぢやア菊代さん、兄さんが折角御馳走して下さつたんだから、これを私とお前で無理にでも頂かうぢや無いか』
母に食慾が出て來たので、菊代も急に氣が勇んで來た。
『母さんが召食つて下されば私も頂くわ！』
三人は又睦じく箸を取つた。
前の家では今日も亦御飯時に親子喧嘩が始まつた。癇癪持の老爺さんが何か大きな聲で怒鳴つて、

(三十一) 行く人

伜に物を叩きつける音がした。同時に伜の聲が聞えて此方でも亦何か物を取つて投げたやうな音がした。中に入つて母親の泣く聲が手に取るやうに此方に聞えた。馥江は凝然とお箸を止めて、
『ア、今日も亦始まつたらしい！お父さんもお父さんだが、子息さんも子息さんだ、初中終の事だから中に立つおッ母さんは、彼ぢや眞個に堪るまい！幾らお金はあつてもね……、それを思ふと私達はまあ仕合だ！』
三郎も箸を止めて、
『おッ母さん、世は二ッとも思ふやうには行かないものですね！』
『左樣ですとも三郎さん！お金には不自由をしても、彼を思ふとまあ〳〵此方は仕合ですね！』
此方の親子は喜び〳〵又箸を取つて居ると、前の喧嘩は段々に大きく成つて、仕方無しに近所の人も集まつたが、子息は終に警察に引かれて行つた。後で聞けば父親の頭を割つたと云ふ事であつたので、三郎母子は驚いて舌を卷き、同時に此方は母子して我が家の平和を喜んだ。

葭江は小田巻から食慾が附いて、その夜は喜んで牛肉を食べて溫に眠つた。翌日になると前の日よりも、又ズッと元氣が出て、血色なども見違へるやうに好く成つた。

晝には三郎が鷄肉を買つて來て、自分で剝燒にして食べさせた。

今朝三郎が藥を取りに行つた時、醫者に賴んで置いたので、午後には早く來て診察し、これならば最う大丈夫、決して御心配はありませんと言つて歸つた。

三郎は安心した。併し今日の夕方は最早立たねば成らなかつた。切て最う一夜自分の手で看護したいと思つたが、悲しいかな今日の三郎には思ひ通りに行かなかつた。

これから又船に歸つて行く三郎は、母を色々慰めて居る中に、最早程なく三時に迫つた。おそくも四時には家を出なければ成らぬので、三郎には段々名殘が惜まれて來た。

『兄さん行つて參りました。今日は又少しお寒いのね！』

兄は笑つて、

『ナニ船に乘つて了へば暖いさ！菊代、何かおいしさうなお菓子があつたかい？』

『エ、有つてよ。兄さん、最う直にお茶を入れませうか』

三郎は時計を見て、

『未だ一時間許あるが、おッ母さんと御一緒にゆッくりお茶でも頂いて出かけやうかね！』

『生憎今日は又寒く成つて來てね・・・』

葭江も別れが辛かつた。

『ナニ私は大丈夫です。以前と違つて最う身體が此の通りですからね！』

成程丈夫さうに見えて來た身體を二三度、三郎は母の前に坐つた儘動かして見せた。

『マア何よりです。私はそれが一番嬉しい！』

菊代は生菓子を鉢に取つて盆に載せ、お箸を添へて兄の前に出し、次にはお茶を入れて來た。

『有がたう。サア菊代お前も其處にお坐り！』

三郎は盆を引寄せてお箸を取り、

『サアおッ母さん、お菓子を一ッ召食れ、何れが一番おいしいでせうね？』

箸を控へて見て居つたが、三郎はこれと思ふのを一ッ挾んで母の前に出した。

『マアお前がお食べー』

『私も御一緒に頂きます！』

母に渡して、次には一番綺麗なのを一ッ挾み、

『サア菊代、お前にはこれが好ささうだね』
『有がたう！』
次には自分で勝手に挾んで食べながら、
『おッ母さん、ちやア私は又行つて參りますから、何うか御無理にお起きなさらぬやうにお願ひ致しますよ。菊代精々お前おッ母さんに氣を附けてね……』
『エ、兄さん大丈夫よ』
葭江は實に嬉しかつた。併し名殘が惜まれた。涙を押へて、
『三郎さん、最う私の事は何うか心配せずにね、お前の身體を大切にして下さいよ。私はお蔭さまで最う此の分ならば大丈夫です！』
『未だお寒い時分の事ですから、何うかお身體を御大切に願ひます！』
言つて懐から紙入を出し、歸りに途中で取換へて來た新しい拾圓札を三枚、五圓札を一枚、都合三拾五圓母親の前に置いて、
『十分お身體のお治りに成るまでは、決して御無理に針などお持ち成さらずに、これで何うにかお暮し下さい。その中には又私が歸つて參ります』

『いゝえ、それにしても斯んなに澤山お金は要りません！』
『左樣仰有ずと何うか持つてお居で下さい。私は此處に未だ此の通り持つて居ります。何うかそれでお藥も滋養物も十分に召食つて下さい！今度私が歸つて來るまでに、おッ母さんが丈夫に成つてお居で下さつたならば、私は何んなに嬉しいでせう。それを樂みにして行つて參ります』
『左樣かい、ちやア貰つて置きます。だが三郎さん、お前旅に出て困りはせぬかえ？』
押返して、
『いゝえ、おッ母さん大丈夫、決して御心配は要りません！』
猶話して居る中に最早時刻が迫つて來た。
『ちやアおッ母さん行つて參りますよ』
『ちやア何うか氣を附けてね！私の事は最う決して心配しゝ下さるなよ』
『お蔭で安心して行けます。斯んな嬉しい事がありませうか。ちやア菊代、おッ母さんに氣を附けてね……』
『はい！』
『おッ母さん御機嫌好う！』

『左樣なら、御免なさい！』

『ぢやア兄さん行つて入らつしやい！』

母に代つて兄を送つて、菊代は路地の外まで附いて來た。

『ア、最う菊代お歸り、おツ母さんがお淋しい。一寸お待ち……』

また紙入を開けて五圓遣り、

『何んな事が無いとも知れんからね、これはお前が持つてお居で……』

『兄さん私入らないわ！』

『マア左樣言はずに持つてお居で、また何んな事が無いとも限らぬからね……』

無理に渡して妹に別れ、事務長の家を望んで三郎は大股に進んだが、曲角で一寸振向いて見ると、妹は路地の外に立つて、未だ自分を見送つて居つた。

三郎は早く歸れと手を振つて道を曲つた。角には大きな柳があつて、今日も未だ此の前と同じやうに夕風が寒かつた。三郎は事務長の家を差して急ぐ中にも、何と無く心を後に引かれるやうで、我が溫かい家の居心地が忘れられなかつた。

兄を見送つて、菊代は家に歸つて來ると、母親は未だ床の上に起きて居て、

『兄さんは最うお出でだつたかい、表は嘸寒いだらうね？』

言つて霞江は、我が子を思うた。

(三十二) 船中の獨學

三郎は此の翌日の午後一時に川口を出帆して、第三回目の航路に上つた。

三郎は意思の强い少年であつたので、彼は三回目の航海から既に全く海の人に成り切つた。船に馴れ客に馴れ仕事にも亦馴れて、大いに安心して愉快に働けるやうに成つた。

如何なる職業に從事しても、安心して愉快に働くと云ふ事は容易に出來る事でない。然るに三郎は既にこれを得た。即ち善良なるボーイとして、彼は既に飯の食へる人間に成れた。

世に此處まで漕ぎつける青年は少なくない。併し此處から又更に大いに進まうとする青年は多くない。世間多數の青年は此處まで來ると、地位の安全に馴れて怠けるやうになる。その結果色々な弊害を釀して、その地位を失はぬまでも現在以上の出世は出來ぬと云ふ事に成る。

然るに三郎は左樣で無かつた。自ら勵んで今日の地位を得ると共に、彼は更により好き地位に向つ

て自ら進む事を工夫した。イヤ工夫すると共に實行した。

それは何であつた。

三郎はボーイとして最も忠實に其の任務を果す傍ら日夜零碎の時間を活用して獨學した。

それには何んな方法を執つたか。

前に大阪で買つた四書五經の訓讀本に依つて、半年許九州通をして居る間に、四書五經を暗誦して了つた。これには面白い事があつた。三郎は先づ訓讀本に依つて讀み、更に讀み又讀み復讀んで見ても分らぬ所には記を附けて置いて、然るべきお客さまを見立てゝ糺した。これには又頗る都合の好い事があつた。三郎の受持は上等室であつたので、何の航海にも五人三人文字のある客の乘り合せて居ない事は無かつた。中には屢〻立派な學者に出會つた事も珍らしく無かつた。然う云ふ人の用事を親切に辨じて遣つて、後で本を持つて行き、誠に恐れ入りますがと頭を低げて糺くと、皆親切に敎へてくれ、中には大いに三郎の志を賞讃して、これで本を買へと云つて、金などくれる人も稀にはあつた。

志あれば道ありで、三郎は斯んな事から其後僅六ヶ月許の間に於いて、四書五經は全く立派に暗誦して了つた。

次には四書を講義した假名書の本を大阪の本屋で見附けて、これを又熱心に讀んで略この大意に通する事が出來た。これにも又半年許かゝつたが、讀書百遍義自通と云ふは眞理であると云ふ事を彼は當時染々感じた。

一方に於いては同じく前の方法を把つて、解らぬ所は客に糺いた。この際三郎が客から得た所の學問上の收穫は實に少なからぬもので、彼は僅に一年許の間に堅い學問の基礎を造る事が出來た。

三郎は何處までも此の獨學法を把つて、翌年から關某氏の編纂した「增補十八史略字引大全」と云ふ本を上下二冊買つて、それに依つて又熱心に十八史略を讀み始めた。

人の一念程强いものは無い。それも亦五六ヶ月の間に殆ど暗誦して、一通講義まで出來るやうに成つた。

次には日本外史を買ひ、矢張前の方法を把つて、初めは字引に依つて讀み、解らぬ所は客に糺し、段々讀んで行く中に、三郎の讀書力は大いに進んで、これも亦總五六ヶ月許の間に讀んで了つた。

この時面白い話があつた。三郎は日本外史の字引大全に依つて全篇を通讀し、本文丈は講義も一通り出來るやうに成つたが、獨り外史氏が曰くの論文には、何うも理解し難い所が少なく無かつた。

『此處丈は何うか人に就いて親しく講義を聽いて見たい！』

三郎は常に思つて居ると、或る時ひよいと機會が來た。

明治二十一年十一月二十日の夕方、神戸から安治川丸の上等室に乘込んだ婦人があつた。當時その婦人は二十五六位に見えて、非常に氣品の高い、而も美婦人であつた。つまりは三郎の客に對する深い同情が媒介に成つて、この婦人と懇意に成つたのであつた。

三郎は時々呼ばれて其の部屋に行つて見ると、何時も唐本の無點本を讀んで居つた。三郎にはこれが直に眼に着いた。

『女で勝い！』

窃に感心して居ると、或時ひよいと學問の話が出た。三郎は今獨學して居る事を話し、外史の論文の事に及ぶと、

『ぢやア私は此の船で熊本まで人に會ひに行くんだから、暇な時にお出でなさい、何時でも講義して上げませう』

機會を逸する三郎で無かつた。直に外史の一卷目を持つて來て、

『最う仕事は了りました。誠に恐れ入りますが・・・』

時は既に夜の十一時過ぎで、船は今播磨灘を進んで居つた。

婦人は先づ外史全體の話をして聞かせて、三郎に本を開かせ、姿正端然、朱唇忽ち動いて「上樂翁公書」の一篇を講義した。三郎は其の一言一句に耳を傾けて、空腹に存分飯を送るやうに滿足した。

これが抑もの始めで、熊本に行くまでの間に、兼て聽きたいと思つて居つた外史の論文の講義を殘らず十分に聽く事が出來た。婦人が肥後の百貫で上陸する時に、三郎は記念の爲に其の名を問うたけれども婦人は明さなかつた。別れに臨み嫣然笑つて、

『私はこれから又直に長崎に出て上海に行きます。向ふへ行けば再び日本へ生きては歸つて來られますまい。ボーイさん確り勉强して、何うか國家のお爲に盡して下さい！左樣なら・・・』

三郎は厚く禮を述べて別れたが、それは到底普通の婦人ではあるまいと思はれた。

(三十三) 仁と勇

三郎の海上生活は三年續いた。彼は此の間に於いて學問も出來れば金も出來た。

獨學の方法は前に述べた通りであつたが、貯金は節約と云ふ外に何等の力むる所も無く、云はゞ自然に出來たのであつた。

この頃は未だ世間の極めて豐かな時分で、客の金離れが今日よりもズッと好かつた。月給は少額でも客の心附などが豐であつた。殊に三郎は總ての客の氣に適つたので、收入も亦他のボーイなどよりは多かた。

三郎は始めの間は一航海して歸る度に、航海中の全收入を擧げて母に渡さうとしたが、母はそんなに金は入らぬと云つて受けなかつたので、三郎は一航海して歸る毎に、母に少許宛小遣を贈り、殘餘は殘らず大阪の銀行に預け入れる事にした。

三郎は他の船員達のやうに、陸に上つても無駄遣しなかつたので、三年目には積り積つて五百圓許貯金が出來た。

三郎が現在の目的は、金を貯めると云ふよりは、この上學問をして身を立てたいと云ふに在つた。

三年目の七月に事務長は船を下りて陸上勤務の人に成つた。三郎も一緒に船を下りやうかと思つて事務長に相談して見ると、

『マア今年一杯も辛抱して、それからの事にし給へ』

『ぢやア左樣しませう』

三郎は相變らず安治川丸のボーイを勤めて、前の方法で獨學して居つた。けれども此頃は連りに陸

が戀しかつた。これは海上生活に倦いたと云ふ譯では無かつたが、學問も進み學資も出來たので、陸に上つて二三年學問して見たいと云ふ念が益す熾んになり、母も同意してくれたからであつた。

併し事務長の忠言に從つて、今年一杯は獨學しながらボーイで立てやうと思つて居ると、三郎は思ひがけない事からして陸に上る事に成つた。

明治二十二年四月十四日の午後九時三十分に、安治川丸は肥後の百貫港を出帆して歸航の途に就いた。

この時馬關から最早五十近い立派な客が一人乘つた。乘ると間も無く客は夜中に突然烈しい吐瀉を始めた。當時九州地方には大分虎烈刺が流行して居つたので、正しく虎烈刺患者と見て、船の中は大騷ぎに成つた。

一同怖れて誰一人近附く者も無かつたが、三郎一人は怖れずに、父に對する情を以て此の客を看護した。たゞ汚物の世話をするばかりで無く、麥酒の空壜で湯婆を幾ツも造つて、冷えた足を溫めて遣る、頭は氷で冷して遣る、その夜殆ど一目も眠すに、三郎は病人の側に附き切つて、有らゆる手當を施して親切に看護した。

三郎が看護の效は確に見えて、夜明前から吐瀉も止り、體溫も降り、腹痛も治まつたが、病人は非

常に疲勞して、翌日一日たゞ昏々として眠つて居つた。

三郎は時々流動物ばかり薦めて、及ぶ丈大切に看護して居つた。夕方から病人は元氣が出て來た。

三郎は室内に盥を運び、手桶に湯を汲んで來て腰湯までさせて遣ると、客は非常に感謝して、

「ア、お蔭さまで生命を拾つた。全く君の盡力の下に助かつた！君は何處で陸に上つて休息する。神戸か大阪か」

「イエ大阪です」

「吾は神戸までの切符しか買つて居らんが、何うか此の船で大阪まで行かれるやうに取計つて貰ひたい」

「承知致しました！」

客は神戸で上らずに大阪まで船で來た。

（三十四）花　屋

三郎は又一航海して來たので、今日はこれから堺に歸つて、母と妹に會はれる事に成つた。

例に依つて先づ舊事務長の家を訪ね、次は銀行に行つて金を預け、それから土産物を買つて、直に堺に歸らうとしたが、船中で介抱した客の事を思ひ出した。

「船から下りる時に是非來てくれ、屹度待つて居ると言つた。宿は花屋で、名刺も此處に貰つてある。先刻船から下りられる時名刺を頂いたので始めて分つたが、彼のお仁は大藏省のお歴々……、默つて歸つちや惡いか知ら？家では今日は待つて居るに違ひない！」

三郎は暫く途中で迷つたが、新運命が其處に我れを待つとも知らず、一寸見舞つて直に歸らうと思案して花屋に行つた。既に言付かつて居たものだと見えて、女中は直に二階座敷に案内した。客は既に浴衣に着更へて打寛いで居り、

「ア、好く來た、待つて居つた！　サア此方に……」

客が俄に人變して見えたので、三郎は感して進み得なかつた。身分ある人は打解けて、

「サア直と先に寄り給へ、其處ちや話が出來んちや無いか。今度はまあ君に全く救はれた！お禮は後でゆツくり言はう」

「何う仕りまして！」

「吾は一時は虎烈刺かと思つたね！屬官を二人連れて居つたが、餘儀ない用事が出來たので二人共後

に置き、一人で先に來る途中で遣られたんで實際弱つたね！併しまあ君が親切にしてくれたんで助かたつよ』

目上の人に餘り禮を言はれるので、三郎は全く挨拶に困つた、先方は極めて快活な人で、三郎に色色話をしかけ、住所姓名年齢などを問ひ、終には其の目的まで聞いた。三郎は終に默止しかねて志を打明けた。

『ヨシそれぢや吾が今度のお禮に引受けて學問の出來るやうにして遣らう。學問をするには何うしても大阪よりは東京だ。東京に來れば吾の家に居て學校に通つても好し、それが窮屈なら學資位は取れる所に世話をして遣る。家に歸つておッ母さんの承知を得て來るが宜しい。吾は未だ大阪に二三日居る。家で宜いとなれば吾が今度一緒に東京に連れて行く。失敬ながら學問をしたいと云ふ者が、長く今日のやうな事をして居つては、おもふやうに本も讀めない』

おもひがけ無い所から幸福が遣つて來たと三郎は思つた。イヤおもひも寄らぬ事を聞いて、三郎はまるで夢のやうな氣持がした。

『いかに自分の目的を貫く爲と云つても、母に餘り心配を懸けましては濟みませんから、母に篤と相談して見ました上で、何れ又改めてお願ひに出る事に致しませう』

『ア、それが宜い、君は何うも感心な男だ！その情合を有つて居るので、自然人にも優しいんだな！ぢやアまあ飯を食つて行かうぢや無いか。吾も粥腹ぢや動けん、今日の晝には酒でも一杯飲んで見やう』

『有がたう存じますが、今日はこれでお暇致しまして……』

『マア待ち給へ！最う彼此晝ぢや無いか。君の來るのを待つて居つたんだ』

三郎は一刻も早く家に歸りたいが、斯う言はれては强ひて歸る譯にも行かなかつた。客は女中を呼んで、

『早く何か腹に入れる物を欲しいな。この通り腹の減る盛りのお客を待たせてあるぢやないか』

『只今直に持つて參ります！』

三郎は愈よ逃場を失つた。

（三十五）瀬戸の月

非常な御馳走に成つた。禮を言つて暇を告げると、

『待ち給へ』

呼び止めて、

『これは些少ながらおッ母さんや妹さんに、何か土産でも買つて行つて貰ひたい』

整然と紙に包んで出した。人の好意を辭するのは道でない。三郎は受けて厚く禮を述べ、歸りに舊事務長を今度は會社に訪ねて行つて、事の成行を話し、その意見を訊いて見た。事務長は太く要領を得た人で、

『フンそれは好い都合だ、それぢや早速お世話に成るが宜い。併し船の都合は一度聞いて見て貰ひたいね』

『勿論でございます。斷じて船に御迷惑をかけるやうな事は致しません！』

堺に歸つて母に相談して見ると、馥江も決して我が子の出世の障害に成るやうな事は言はなかつた。

『左樣かい、そりやまあ好い鹽梅だつたね！ぢやア其のお仁さまにお願ひ申して暫く東京へ行つてお出で、家は何うにでも未だ二年や三年は暮して居ります！』

事の調子好く運ぶ時は、即ち時節の來た時は、何處も彼處も皆工合好く行くものである。

翌日早く三郎は船に歸つて見ると、丁度今度の事務長が來て居つたが、三郎の話を聞いてこれは大いに失望し、

『君この船を下りるかい？其奴は何うも名殘惜しいな！何うだらう、今度直にと言つては人を捜すに困るが、最う一船丈行つて貰ふ譯には行くまいか』

三年も世話に成つて來た船だ。三郎には義理の惡い事は言へなかつた。

『宜しうございます。ぢやア最う一度行つて來ませう！』

『ぢやア何うか然うして貰ひたいね！』

『畏まりました！』

快く承諾して、直に花屋に遣つて來た。三郎が訪ねた人は折好く宿に居合せて、直に快く面會を許した。先づ昨日の禮を述べて、事の成行を打明けて、

『自分の勝手ばかりを言つて、これまで世話に成つた船に義理を缺くのは心苦しく思ひます。最一度行つて參りまして、それから伺ふ事に致しますから、何分宜しくお頼み申します！』

『宜しい。男は左樣無くては成らぬ！ぢやア船に迷惑を懸けぬやうにして置いて、後でゆッくり出て來なさい！來さへすれば世話は何時でもして上げる』

『何分お頼み申します』

既に名刺は貰つて置いた。この日は其儘別れて又堺に歸り、一夜泊つて母や妹を慰めながら休養し、翌日の夕方時刻をあやまらず船に歸つて、今度が最後の航程に上つた。

最う此の船に乘るのもこれが丁ひだと思ふと、多年住み馴れた船も戀しく、またこれまで幾回となく往復して、見馴れた海や島や沿岸の風景なども何と無く懷かしいやうに思はれた。

歸りは丁度月夜であつた。見馴れた目にも瀬戸内の景色は全く畫のやうであつた。三郎は一夜舷頭に立つて月を眺め、我が今後の運命を思うて見た。また逆に過去の運命の變遷をも考へて見た。さうして彼は彼自身に言つた。

『過去三年の海上生活、おもへば全く夢のやうである！斯んな生活をしやうとは、實に思ひも寄らなかつたが、ア、、人の身は何時何んな事に成らぬとも分らぬものだ！併し自分は過去三年間の海上生活に依つて、健康を得、學問を得、學資を得、他にも未だ得た所が少なく無かつた！猶思ふ我が過去三年間の此の海上生活が、我れ三郎に與へた所は、たゞ以上の獲物丈に止まるのであらうか。但しは又我れ三郎が前途に横はる運命の前提として、神や佛は我れ三郎に過去三年間の生活を與へられたのであらうか』

三郎は甲板の手摺に兩肱を突いて圓く肥つた色艶の美い頰を抱へ、凝然と考へ沈んで居た。その中に少し冷氣を感じて來た。三郎は我れに復つた。

『ア、！』

手摺を離れて甲板に立つた。四邊に誰も居なかつた。海は靜で水天一碧、月光溶々、金波穏々、機關の音がゴト〳〵聞えて、船は忽ち何方を見ても庭の築山程にしか見えぬ石身松衣の島と島との間にかゝり、一寸手を延せば松にも岩にも屆きさうで、此處は瀬戸内海と思へば自然と合點も行くが、不斷見馴れた三郎にも、今夜は何だか汽船に乘つて今海を行くとは思はれず、泉水に小舟を浮べて、何處かの庭の築山でも見て居るやうな氣持がした。

(三十六) 菊の頃

神田小川町の五十稻荷の緣日に鉢植の菊の花が綺麗に列んだ。カンテラの油烟は臭いが、誰も一寸足を止めて見ぬ者は無かつた。

『ア、綺麗だ！』

おもはず言つて立止り、凝然と花に見惚れた書生體の男は、今度堺から出て來た土肥三郎であつた。

三郎は昨日東京に出て來たばかりで、未だまるで土地の樣子が分らなかつた。けれども全くの山出しとは違ひ、長く大阪で暮して都會の事情に暗く無かつたので、小川町通を見物して、來た通りの道を歸り、駿河臺の北甲賀町に來て坂本氏の邸に入つた。

三郎は時の主税局長坂本氏を便つて出て來たが、氏は友人の病氣を見舞ふ爲に相州地方まで行かれたと云ふ事で、昨日以來不在であつたので、三郎は今度は未だ主人坂本氏には面會しなかつた。

主人公は不在であつたが、三郎の事は豫て話されてあつたと見えて、昨日初めて訪ねた時、名刺を出すと直に夫人が出て見えて、早速奥に通して厚く當時の禮を述べ、好く撫恤つて三郎に思ひの外の滿足を與へた。當時夫人は四十前後の人で、中々行き屆いた人であつた。今夜も三郎の無聊を察して、

『嘸御退屈でせう、まだ馴れない家と云ふものはねえ！誰かに案内させませうから、その邊の緣日にでも御散歩がてらお出かけなさい』

『ハア〈〈！』

三郎は思はず堅く成るばかりであつた。夫人は氣の毒がつて、

『コレ〈〈松島か本田か居ませんかい？』

『はい』

直ちに答へて、三郎位の年格好の書生が二人遣つて來た。

『お前達は何方でも都合の好い人の方が、このお仁を五十の緣日にでも御案内して上げて下さい』

無骨者の松島速男は直に立ち、

『君來給へ行かう』

『コレ〈〈お客さまに、お前は眞個に亂暴だね！』

『それぢや本田貴公が行け！』

松島は引込んだ。三郎は人に態〻案内させるのは氣の毒に思つた。

『イエ皆さんの御勉强のお妨害を致しては相濟みません！私が道を聞き〈〈行つて參ります』

『左樣ですか。ぢやア左樣成さいまし。ナニ直お近い所ですからね。それぢや本田、お前一寸其邊まで道をお敎へ申してお上げなさい』

『ハア』

三郎は禮を失せず、

『ぢやア奥さん一寸行つて參ります』

『御ゆッくり！』

斯んな譯で三郎は五十稻荷の緣日に出かけ、彼此見物して歩いて、夜の八時頃に歸つて見ると、折好く主人が歸つて見えて、既に夜食も濟んで、奥で寛いで居られる所であつた。

（三十七）好知己

直に奥に通された。主人は笑顔を見せて三郎を迎へ、

『ア、好く來た好く來た、この夏は何うも大變世話に成つたなア！全く彼の時は君に生命を救はれたよ』

『何う仕りまして！仰せに從ひまして上京致しました。何分何うか宜しくお願ひ申します！』

『ヨシ〳〵好く來た好く來た。何にも心配する事は無い！併し極める事丈は極めて置かんと落着くまい。それで何うする。事は何でも早いが好いが、强つて自分で働きながら學問をしたいと云ふ了簡な

らば、吾の役所の雇に採用して遣らう。然うすれば晝は役所に出て夜は學問をする。然も無ければ吾の家に居て學校に通ふ。勿論一切の費用は吾が出してあげる。以上二ッの方法がある』

『はい』

『それで吾の考へを露骨に言へば、萬已むを得ぬ場合ならば兎も角、然もない限りは學問をするに最も便利な方法を取つたが宜いと思ふ。君に好意を有つて學資を出してくれる者があるならば、その人に依つて少しも差支は無いと思ふ。言ひ換へて見れば、吾の家から學校に通つて、そりや時々は家の用事をして貰ふ事もあらうが、外で稼ぎながら勉强するより專心に勉强した方が宜いと思ふ。勿論已むを得ない場合には仕方が無いが、然うで無い限りは、事は何でも專心に遣らんければ進歩が遲い。右の手では○を書き、左の手では△を書くやうな事をしては、何方も巧く行かぬと云ふ事になる。何うだ解つたかね？』

『はい、解りましてございます！』

『ぢやア家から學校に行くか』

『何うか然う云ふ事にお願ひ致したうございます！』

『宜しい承知した！次に問ふべき事は、君はこれから幾年間位學校に行く事が出來る？おッ母さんと

何んな相談にして出て來たな？』

『左樣でございます、まあ二年か、長くて三年位で學校は廢めて、何か職に就いて母に安心させたいと思ひます』

『フン、それは立派な考へだよ。學者で世に立ちたいと云ふ人は、こりや格別の話だが、然うで無い人は、たゞ學問ばかりしたからと言つて、決して立身出世の出來るべき者では無い！立身出世の道は文字以外に在ると云ふ事に、人は早く氣が着かなければ行かん！』

『はい』

『次に問ふべき事は、君は今後何う云ふ方針を採らうと思ふかね？つまり身を立てる上に於いてぢやな……。それが先づ根本問題だ、迂濶に學問をしても役に立たんよ』

『全體私は本を讀む事が好きでございます。それで小供の時から何か學問に依つて身を立てたいと思つて居りましたが、今度上京致します時、母と悲しい別れを遂げるに當りまして、申しあげるも實にお羞かしい次第でございますが、實は年來の志を飜へしましてございます！』

言つて三郎は兩手を膝に突いた儘、おもはず凝然と頭を低げた。

(三十八) 目的の變更

思ひは色に見はれる。主人は直に見て取つて、急に言葉を和げた。

『何うした？』

『はい』

三郎は一寸頭を低げて後に向き、おもはず溢した涙を拭き、涕をかんで居ると、夫人自ら茶器を運び、次には菓子を持つて來られた。

『何うも失禮致しました！』

一禮して三郎が此方に向いて坐るのを待ち、主人は極めて溫和に、

『ナニ目的も場合に依つては變更せねばならん事があるさ！漫りに目的を變へるのは宜しく無いが、或る場合には又然うばかりも行かん。それで今度は何う云ふ事に志した？』

『お話の筋は少し違ふかも知りませんが、那日大阪の花屋で色々お尋ねのありました時、大略お聞きに入れましたやうな次第で、私の母は早く寡婦に成りまして、尋常ならぬ苦勞を致して參りました所爲か、年は本年まだ五十にしか成りませんが、何うやら大分身體が弱つて參つたやうに思はれます。

それに今日の生活の狀態は何うかと申しますと、妹と二人で他の賃仕事をして、細々その日の烟を立てゝ居るやうな次第でございます』

『成程！』

『小供の時から何うかして、自分は學問に依つて身を立てたいと思つて居りましたが、今度上京致します時に、母が大阪まで送つて參りまして、それでは無事で行つて來い、家の事は氣遣ふなとは申しましたが、便ない身の母は私を遠方に手放して遣るのは如何にも辛いと見えまして、いざ別れると云ふ時に成りますと、母は最う口を利く事も出來ぬ樣子でありましたが、終に悄へ切れずにハラ〳〵と涙を流し、汽車の窓から覗いて居る私の顏の見える限り見送つて居りました其の時の母の心を察しますと、自分の氣儘ばかりは言つて居られません！』

『マアねえおッ母さんは嘸・・・』

夫人は側で貰泣をした。主人も深く同情せられる色が見えた。三郎は凝然と考へて、

『我が初一念を貫きまして、學問に依つて身を立てたいのは山々でございますが、我が志を達するまで母が此の世に居れば頂上！但し中途にして母の身に萬一の事のありました其の場合には、私は人の子として誠に相濟まぬ事に成ります！それで實は今度此方へ參る途中で斷然目的を變へたやうな次

第でございます』

『解つた！目的を變へたからと云つて決して女々しく無い。それが人間の眞の學問ぢや！前に吾が立身出世の道は文字以外に在ると言つたのは即ち其處だ！それで今度は何う云ふ事に志した？』

『何か早く實業に從事する事の出來る學問を致したいと考へます！』

今日の青年には實業熱が高いが、まだ明治二十年前後では、學生は一般に官吏を望み、實業に向つて志を立てる者などは極めて稀であつた。時の主稅局長坂本氏は大いに賞した。

『イヤそれは中々卓見だ！最うこれから先の仕事は實業だよ。今日世間一般の學生は皆未だ官海を望んで居るが、最う官吏も我々時代が多分末だらう。そりや大きに贊成だ！』

『一通りの新知識を得て歸りましたら、大阪で何處か母を養ふ位な地位は得られやうかと考へます。またそれが一番早からうかとも思ひます。私の最初の希望は、母に安心を與へる事さへ出來ますればそれで十分でございます』

『君の言ふ所には無駄が無い。善い心がけぢや！人間は初めから望みばかり大きくしても決して大成するものでは無い。その心がけで徐々に進んで行けば、今に屹度大成する。その考へならば好い學校がある。高等商業學校の附屬に主計學校と云ふのがある。たしか彼處は二ケ年間位で卒業が出來たや

うに記憶して居る。明日行つて規則書を貰つて來給へ。彼の學校の卒業生は中々間に合つたやうに吾は思ふ』

これで一通り肝心な話は形が付いた。三郎は大きに安心した。夫人は菓子を紙に取つて、

『サア一ッお食んなさい。おッ母さんはねえ、まあ何んなにかお淋しく居らッしやるでせう。お妹さんはお幾歳ですか』

(三十九) 主計學校

翌朝三郎は坂本邸の門を出た。この日は實に美しい天氣で、秋の空は青々と晴れ渡つて、風は既に寒い程冷かであつた。

道は昨夜二人の書生に聞いて置いた。坂本邸を出て左の方に向つて進むと、右手の高い所に目下新築中の山のやうな建物が、巍然として大氣の透明な空に聳え、その四方には恐ろしい道掛をして、蕭が一面に張つてあつた。

三郎は斯んな宏大なる建物は始めて見た。全く膽を潰して、おもはず立止つて凝然と仰ぎ、

『この建物は何だらう?』

其處に一人の老婆さんが、小兒を負つて、向ふから遣つて來た。三郎は莞爾笑つて帽子を脱り、

『老婆さん一寸お尋ね致しますが、この建物は何でございます?』

『これは露西亞のニコライの聖堂ださうですよ』

『ニコライ?』

『耶蘇教の、舊教の……』

『ア、左樣でございますか』

『最う斯うして長い間かゝつて居りますが、來年出來上るさうでございますよ』

『何うも有がたうございました』

時は丁度明治二十二年十月二十六日であつた。

三郎は紅梅町を通つて水道橋の方に面つた。この頃の駿河臺は未だ實に淋しいことで、今日のお茶の水橋などは架つて居らず、今橋の在る所には低い土手があつて、上に枳殼の生垣があり、道の曲角に成つて居つて、晝間でも誠に閑靜な所であつた。

三郎は此邊を通つて行くと、百舌や鶯の聲などが聞えて、秋の景色が四邊に滿ち、長く海で暮して

居た所爲か、今の我が身は夢のやうで、幾度か足を止めて、我れ我れを疑ふやうな事が屢〻あつた。

坂を下りて水道橋に出た。此處で道を聞いて、猿樂町から神保町にかゝり、終に一ッ橋通に來た。

右の方に學校らしい建物があつたので、此處かと思つて表門の方に廻つて見ると、西洋風の門の柱に東京高等女學校と書いた札が掛つて、ピヤノの音が聞えて居つた。

『違つた！』

後に返して一ッ橋の方に進むと、大きな學校が二ッ道の左右に在つた。左の方の門の柱には第一高等中學校と云ふ札が掛り、右の方の門には高等商業學校と云ふ札が掛つて居つた。

『ハア此處だな！』

受付に行つて聞いて見ると、古い小倉地の洋服を着た門番の老爺さんが、主計學校は此の先の左側だと敎へてくれた。

終に尋ね當つて規則書を貰ひ、後に歸りながら讀んで見た。成程修學年限は二ヶ年であつた。科目も一々三郎の意に滿ちた。

『ア、これだ〳〵、この學校に入學する事にしやう！』

三郎は決心した。併し此の學校は私立と違つて、何時でも隨意に入學する譯には行かなかつた。また入學試驗があつた。入學試驗は來年の七月で無ければ受ける事が出來なかつた。また試驗を受けるには英語、數學は申すに及ばず、他にも中々骨の折れる科目があつた。その中で今直に試驗を受けても何うか通るであらうと思はれたのは漢學、習字、珠算位のもので、英語や算術や代數その他の科目には、三郎は殆ど全く無學と云つても可い位であつた。但し英語の一科目丈には既に幾分基礎が出來て居つた。

三郎が船に居た頃、漢文を獨修した事は前に述べた通りであつたが、彼は同時に英語も勉强して居つた。仕合とこれには良い先生があつたので、三郎には大きに便利であつた。事務長の角井君は、嘗て三四年間上海に行つて居つて、その間或る英人の家に雇はれて居た。これが又誠に心がけの善い人であつたので、機會を逸せず英語を學んで居つたので、三郎は角井君に就いて船の中で英語を學び、當時既に專ら世に行はれて居つたナショナルの讀本の三までをあげ、角井君に分れた後も常に熟讀して居つたが、それが今日に成ると、大いに三郎を助ける事に成つた。

三郎は主計學校の規則書を貰つて歸りながら、道に立止つて獨語を言つた。

『ア、何でも機會のある時に勉强して置くもんだな！彼の時好く角井さんに英語を敎はつて置いたことだ！』

三郎は此時神保町まで來て居つた。

(四十) 學生生活

三郎は其の翌月卽ち十一月の一日午前八時に、東京英語學校の初等科五級生として、極めて粗末な同校の敎場に我れ自らを見出した。

同校は今日の日本中學の前身で、神田錦町一丁目に在つた。當時總ての官立學校に入らんとする學生は、同校若くは今日の開成中學の前身たる共立學校に入學して、一般受驗準備をする事に成つて居た。當時英語學校は初等高等の二科に分れ、初等の生徒は午前八時より十二時まで、高等科は午後一時より五時まで授業があり、別に夜學科と云ふのも設けられて居た。言ふまでも無く三郎は此の學校に入つて翌年の七月主計學校に入學する準備を始めたのであつた。

翌年試驗を受けるとすれば、最早後八九ヶ月間の餘裕しか無かつた。それには非常に努力せん事には試驗の受かる見込が無かつた。三郎は何事を始めるにも順序を無視して出鱈目に着手するやうな迂闊な男で無かつた。彼は學生々活に其の境遇を轉ずると共に、今後如何なる方法を把つて勉學したが、

最も有効であるかと云ふ事を先づ篤と考へて見た。

この時三郎の最も恐れた所は、來年の受驗科目を短期間に習得する事の困難では無くて、我が健康上の問題であつた。三郎はこれを眞先に考へた。

『自分はこれまで最も衞生の約束に適つた海上生活をして絶えず勞働して居つた者である。然るに今度は俄に境遇が變つて、身體は使はず頭腦ばかり使ふ事に成つた。こゝで身體の運動を全廢して、餘り學事に熱中した日には屹度身體を惡くするに違ひない。勿論大いに勉學はしなければならぬが、身體の運動を忽せにして學問ばかりに熱狂し、身體を毀すやうな事があつては、何方に面いても申譯の無いばかりでなく自己としても大なる不幸を招く事になる。ヨシ大いに運動しながら大いに勉學する事にしやう!』

次には勉學の方法に就いて考へた。

『英語の研究としては、多くの書を亂讀するよりも良書の二三冊を選んで暗誦する位に精讀しやう。數學は學校丈では間に合はぬ、午後の時間を利用して、毎日二時間許宛別な所に稽古に行かう。毎日豫修科目と其の時間を定めて置いて、それ丈遣つたら決して無理な勉强はすまい。但し定めた丈は必ず遣らう!』

これで先づ其の方針が定まつた。次には母に宛て、長い手紙を書いた。手紙には自分の現在の情況を精しく報じて安心を與へ、次には反覆して母や妹の健康を祈り、最後に貯金の事に就いて書いた。

三郎は今度安治川丸を下りた時に、貯金が五百五拾圓あつた。自分は其の内から百五拾圓丈持つて上京し、殘餘四百圓は其儘堺銀行に預けて、何時でも隨意に引出せるやうにして、母の手許に置いて來た。それで三郎は斯う書いた。

『決して無理な仕事を成さらず、御病氣その他必要の場合には、何うか彼の金を遠慮なくお使ひ下さい。私の爲を思うて取つて置いて下さるよりも、おッ母さんの必要な場合にお使ひ下さるのが私の本望でございます！何うか必ずともに御遠慮なく彼の金をお使ひ下さつて、返々も何うかお身體を御大切に願ひます！』

母から直に返事が來た。委細の情況を聞いて安心したと喜んで、向ふの情況をも精しく報じ、無事に勉強するやうに祈つて、金の事に就いての返事も、好く三郎の心を酌んで、必ずお前の心に從ひますと云つて來た。

これで三郎は頭の荷物が一切下りた。この上はたゞ無事で勉強すれば宜い。果斷に富んだ三郎は忽ち此に氣を一新して、渾身學生々活に入つた。

(四十一) 入學試驗

三郎は學生々活に入ると共に、前に定めた二ツの方針を嚴重に守つて、一方に於いては體育に力め一方に於いては學業に努力した。

體育には何んな方法を取つた？

坂本邸には車夫も居り、女中も都合三人居つた。けれども三郎は毎朝眞先に起きて庭は勿論門の前まで綺麗に掃き、その頃は未だ水道などは無かつたので、深い井から女中に水を汲んで遣り雑巾がけにも手傳つて遣つた。それに毎朝一時間位宛費すと、朝飯の甘さは船に乘つて居た時分と少しも變らなかつた。

朝飯が濟むと、八時十分前位から家を出て學校に行き、十二時まで學校の科目を修めて一旦歸り、また一時十分位前から出かけて近所の數學塾に通ひ、二時間ばかりづゝ數學の稽古をして歸つて來ると、大抵三時十分か十五分位のものであつた。今度は又一時間許翌日の科目の豫習を遣つて、それから女中の掃除に手傳ひ、次には下に降りて朝と同じやうに箒を取り、女中に水を汲んで遣ると、これ

にも亦一時間許かゝつた。朝夕二回骨を惜まず働くので、車夫や女中は大いに喜んで、無性者の松島さんや本田さんと違つて、土肥さんは好く働く書生さんだと云つて褒めた。奥でも主人夫婦が感心して、

『何うしても苦勞をして來た者は違ふ！』

窃に賞讃して居つた。これが爲に三郎は、所謂一舉兩得の結果を得て、人にも褒められ、從來の美なる健康を持續する事も出來た。日々の運動に依つて胃にも申分なく腦にも故障なく、常に愉快に勉學する事が出來た。

次に勉學の方法としては、前に定めた所を守つて、英語の研究法としては學校の豫習以外には、決して他の書物を亂讀せずに、今學校で習ひつゝあるユニオンの第四讀本と、グードリッチの英國史とスキントンの小文典を、兼て船の中で漢文を獨習したのと同じ方法を取つて、殆ど暗誦の出來る程精讀した。さうして毎日學校の往復に、知らぬ字を二十字づゝ暗記する事を怠らなかつた。また數學の研究法としては、能く理論を呑込んで、次には色々な應用問題に打附つて、成るべく自分の工夫で遣るやうにして、これは何うしても自分で解けぬと云ふ問題で無ければ、漫りに先生の力を藉らなかつた。また然う云ふ問題を教はつた時は、何時までも頭に殘るやうに、幾度も幾度も試みて、腹に十分

呑込んで了ふまでは他の問題に移らなかつた。

三郎は總て斯う云ふ方針の下に、日々絶えず勉強したが、決して地の學生のやうに睡眠時間まで省いて無理な勉強をするやうな事は無かつた。總て學科の研究をする時は己れの全心全力を注いで驅り友達と無駄話をするやうな事も無ければ、また他に心を散すやうな事も無かつたが、遣る丈遣ると夜は一定の時刻に寢て、少くも必ず七時間以上快く眠つた。

三郎は同室の二人の友の外には、斷じて他の者と往復をしなかつた。毎日必ず朝夕二回に二時間宛家事を手傳ひながら運動する外には、常に熱心に學業に從事して居つた。三郎の時間使用法には無駄が無かつた。それが爲に其の學業は大いに進歩し、三郎が一日の勉強は或は他の者の二日に相當したかも知れなかつた。

その後八ヶ月の月日は忽ち經つて、來月は最う主計學校の入學試驗が眼の前に遣つて來た。入學試驗は相當に困難で、志願者も亦少なく無かつた。順序を踏んで正則に勉強して來た者でさへ、皆窃にこの難關を首尾好く通過するか何うかと恐れて居つた。その中に三郎は如何に努力したからと云つて我が準備の期間は僅に八ヶ月に過ぎなかつた。

『今年は多分入れまい！』

三郎は元より必勝は期して居なかつた。

『併し來年は屹度遊さぬ！』

この自信は確に有つて居つた。兎も角と云ふので志願書を出した。

試驗は二科目づゝ三日に亙つた。三郎は受けた。衆は皆ワク〳〵として答案を作る中に、三郎は落着き拂つて、微笑を含んで、然も全力を擧げて、一字を忽せにせず判然と答案を認めて出した。

今年の問題は各科目共に中々六ケしかつた。殊に英語と數學の二科目には、受驗生一同皆頭を抱へて惱まぬ者は一人も無かつた。受驗者も多かつたので、三郎は試驗の結果を餘り當にはして居なかつた。

『出來る丈遣つて見て、行かねば何うも仕方が無い！』

既に遣り得る丈は遣つたので、三郎は少しも執着しなかつた。試驗後は一週間許休養する事にした。彼は常に體育に重きを置いて居たからであつた。

三日目に試驗の結果が學校に掲示される事に成つて居た。兎も角も三郎は見に行つた。合格者の名前が整然と張出されてあつた。三郎は上の方から段々見て行つたが、五拾餘名の合格者中既に半分過ぎに成つても、土肥三郎の名は見えなかつた。

『ハア今年は行かなかつたな！』

猶段々見て行くと、有つた〳〵終から三番目に土肥三郎の名を認めた。

三郎は苦笑して、我れ自らを嘲つた。

『何だ、ケツから三番目は滑稽だな！』

併し入るには入れた譯だ。三郎は又思ひ返して喜んだ。

『ナニ入りさへすれば占めたもんだ！衆は幾年もかゝるのに自分はたつた八ケ月の準備で合格したとすれば、假令ケツから三番目でも自分としては大勝利だ！これを土產に早速國に歸つて母を安心させて來やう！』

(四十二) 歸省

僅か十ケ月足らずの馴染であつたが、三郎が國に歸つて了ふと、坂本家は上下共に何だか急に淋しく成つて了つた。上でも淋しがる、下でも淋しがつて、皆三郎の噂をし、早く九月に成つて再び三郎の溫厚にして而も常に快活なる顏を見る日を皆待受けて居つた。

主人坂本氏には友一と云ふ十八に成る子息があつた。容貌は兩親に肖て實に立派な子息であつたが、小兒の時に腦膜炎を病つて、まるで物の辨別が無くなり、可哀さうではあるが、兩親も持餘す事が少くなかつた。その妹は濱子と云つて十四になり、これは中々怜悧な娘であつた。坂本氏には以上二人の外には子が無かつた。總領の友一は到底家を相續するに堪へぬので、妹の濱子に行々は養子でもせねば成るまいと云ふ事に成つて居つた。

三郎は坂本家に來て以來友一に深く同情して、何事にも親切を旨として、能く其の意に添ふやうにして遣つた。他は陰では友一に調戯ふが、三郎は他が見て居らうが居るまいが、そんな事には頓着せぬ。何事にも能く撫恤つて滿足を與へるので、友一は自然三郎を慕ふやうに成つて、三郎の言ふ事ならば能く聞き分けて、何でも承知するやうに成つた。

友一は何か心に滿たぬ事があると、直に癇癪を起して人に跳りかゝり、或は器物を手當り次第投飛すやうな事が稀で無かつた。そんな時でも三郎が顏を見せて宥めると、不思議におとなしく成つて了ふので、この點に於いても三郎は、坂本家に無くては成らぬ人に成つた。

その三郎が急に居なく成つたので、坂本家では困りもすれば淋しくも成つた。友一が癇癪を起して暴れる時は、夫人は直に三郎の事を想ひ起し、早く歸つて來て欲しいものだと思つて待つた。

三郎は國に歸つて母親を安心させ、十日許家に居て母や妹を慰めて居つた。一日大阪に遊びに行つて見ると、丁度安治川丸が歸つて居つた。角井氏を其の家に訪ねた歸りに安治川丸に寄つて見ると、船長も事務長も以前の儘で、皆三郎を歡迎した。

『ア、最一度この船に乘つて九州まで行つて見たいですな！』

三郎がひよいと斯う云ふと、事務長の田中利三郎氏は手を打つて、

『丁度好い機會だ。今君の前職に缺員があるが、久振で一度一緒に行つて來うでは無いか』

三郎は大いに心が動いた。第一身體の爲にも成る。何をするにも健康があつての上だ。次には多少金も取れる、宜し行かうと決心し、

『ぢやア何うか願ひます！出帆は何時ですか』

『明日の午後だ！』

『ぢやア屹度來ます！』

判然答へて三郎は歸つた。船では三郎の不斷を信じて、ボーイの缺員を其儘にして待つて居ると、果して翌日時刻を過たずに遣つて來て船に乘つた。

その後既に二週間經つた。堺の家では馥江母子が待つて居ると、八月の十七日の夕方に三郎は非常

な元氣で歸つて來た。汐風に吹かれ、日に照されて歸つて來たので、また以前のやうに色が黑く成つて丈夫さうに肉附いて、生命が其の四肢に溢れて居た。

『おッ母さん御安心下さい！これから東京に行つて一年間、また何んなにも勉强が出來ます！』

『私はそれが何より安心です！』

三郎は金も二三十圓持つて歸つて母に見せ、

『おッ母さん東京に行く旅費も稼いで來ました。この半分もあれば大丈夫です。半分は阿母と菊代の小遣に差上げます』

『それはまあ有難うござんす。お前は眞個に重寶な人だね、直に斯うしてお金を儲けて來る。今に乾度お金持に成るでせう』

三郎は笑つて、

『おッ母さん成りますとも！今におッ母さんに乾度御安心おさせ申しますから、何うか一日も長く生きて頂きます！菊代、今にお前にも兄さんが乾度今日のお禮をするよ』

菊代も今年は既に十七。姿色も美し、溫順しくもあり、この妹があればこそ三郎は安心して、母に別れて居られるのであつた。

三郎は八月一杯家に居て愉快に暮した。學校は九月の十日に始まるので、未だ三日と五日は家に居られる事と樂しんで居ると、東京の坂本家の奧さんから手紙が來た。友一が此節は別して機嫌が惡くて困ります。若し御都合がお出來でしたら、何うか一日も早く歸つて來て下さいませんかと言つて寄來された。三郎は此の事を母に話すと、馥江は太く氣の毒がつて、

『それぢや早く行つてお上げ申すが宜しい』

土產物など調へて、三郎は翌日匆々堺を立つた。

(四十三) 月桂冠

三郎は途中事なく東京に着いて、一同に歡迎せられて再び坂本家の家庭の一員に加はつた。友一は久振で戀しい三郎の顏を見て、小供のやうに其の袖に取着いて喜んだ。その夜は三郎と同じ蚊屋の內に寢た。さうして翌日から溫順しく成つた。

程なく九月十日に成つた。三郎は始めて學校の制服を着、制帽を被つて登校した。この日實に滑稽な事があつた。英語の敎師の佐藤と云ふ先生が三郎の顏を見て首を拈り、

『君は何處かで見たやうな人だね？』

言はれて三郎は莞爾笑ひ、

『ア、先生で居らッしやいましたか、この夏多度津から安治川丸にお乘しに成りましたのは……、私は彼の船のボーイでした』

『ア、左樣か、彼の時は何うも大變君の御厄介に成つたね！これは奇遇だ、ハ、、、、』

名刺を出して、

『是非遊びに遣つて來給へ！』

『有がたうございます！』

笑ひながら佐藤先生は敎員室の方に行かれた。三郎も伏して笑ひながら別れた。先生は船には强くない方だと見えて、例の播磨灘で大分三郎の厄介に成られたのであつた。

三郎は充分に運動し充分に勉强した。その効果は健康の上にも學績の上にも明らかに見はれて、翌年の學年試驗には五十五名の級の中で、第八位を占めて進級した。實に大なる奮闘であり又勝利であつた。

暑中休暇には又堺に歸つた。三郎の生命は母と妹で、母と妹の生命は又三郎であつた、一人で歸つ

て來たのであれば、今年も亦船に乘つたに違ひ無いが、友一が東京から附いて來たので、今年は自由に成らなかつた。

休暇中家に居て、毎日大濱で海水浴を遣り、その一方には英語の獨習に努めて過した。友一も機嫌よく堺で暮し、朝夕二回宛の海水浴が効いたと見えて、大變身體が丈夫に成つた。

九月上旬に友一を伴れて上京した。お蔭さまで此方は誠に助かつたが、嘸骨が折れたであらうと言つて、主人夫婦は厚く三郎を慰勞つた。友一も太く滿足した樣子で、土肥さん面白かつたねえ、また來年も一緒に行かうと言つた。三郎が友一に優しいので、夫人は又太く三郎を愛し、

『ねえ良人、彼の子を家の養子にすれば、誠に安心でございますがね……』

『吾も左樣思はんでは無いが、何分向ふも總領の事だから、話が纏り難いであらう』

坂本氏夫婦の間に斯う云ふ話も起つて來たが、三郎が親を思ふ心の勝れて厚い事を知つて居るので、夫婦は其の心を糺いて見る勇氣が無かつた。

三郎は從前通り坂本家から學校に通つて、前學年と同じ方法の下に勉學した。衆より勝れて勉强する代りには、また衆より勝れて運動したので、勉學の爲に健康を毀すやうな事も無く、また學業以外には斷じて其の精力を濫用せぬ事に努めたので、その學績は著しく擧つて、何んな學科にかけても、

五十名餘の同級生中で三郎の右に出づる者は一人も無いやうに成つた。

一年の歳月は又忽ちにして盡き、愈〻卒業試驗が始まつた。これも濟んで成績が發表せられて見ると、今度首席を占めたのは土肥三郎君で、月桂冠は遂に君の手に歸した。

『アヽまあ好かつた。これで恩人に顔も立ち、身も立ち、母に安心させる事も出來る！』

三郎は天に向つて感謝した。これは彼が二十三歳の七月であつた。

(四十四) 別　離

學校の成績は優し、紹介者は時の主稅局長坂本氏であつたので、三郎は一躍して日本郵船會社の運輸課に入り、月給は三十五圓に過ぎなかつたが、前途有望な地位を得た。今日の三十五圓は實に乏しいものであるが、當時一ヶ月三十五圓の收入は、優に小家族の活計を立てるに足りた。

三郎は此の年の八月に就職して、始めは坂本家から出勤して居つたが、十月の中旬に坂本家に近い場所を見立てゝ神田淡路町一丁目に小かな一家を構へ、堺から母と妹を呼び寄せる事にした。

葭江は此の時三郎の手紙に接して誠歡誠喜、羽でも生えて此儘空に舞ひ昇るやうな思ひがした。け

れども一方には二十年來住み馴れた堺の土地を永久に去る事も亦名殘惜しく無いでも無かつた。葭江は多年住み馴れた堺の土地も去りたくは無かつたが、早く我が子息の側にも行つて一緒に暮して見たかつた。

人間は妙なもので、その土地に住む緣が盡きれば、我が生れ故郷でも去らなければ成らぬ。葭江は實に不思議な緣で多年堺の土地に住んだが、今は愈〻この土地を去るべき時が來たと見えて、最早この月一杯には是非東京に行かねば成らぬ事に成つた。

三郎は義にも情にも厚い男で、態〻その邊を注意して來たので、葭江も思ひ切つて相當の進物を買ひ調へ、多年親しく交はつた先々へ告暇に廻ると、何處でも名殘惜がつて、十日許の間は每夜のやうに方々へ招かれて行つた。

亡夫彦七郎や兄弟の小供の菩提寺へも參つて相當の附屆をし、盆暮の墓の掃除の事や月々命日々々の回向の事なども住職に賴んで置いた。この時葭江は娘を連れて墓參に行つたが、去るに臨んで彦七郎の石碑に向ひ、

『御臨終の際の良人の仰せ通りに參りました。有がたう存じます』

菊代は言つた。

『おッ母さん、皆東京へ行つて了つたら、お父さまや兄さん達がお淋しいでせうね！』

『一先東京へ行つて、兄さんと御相談した上で、お墓を彼方へ移すやうな事にでも致しませうよ』

『左樣すれば又何時でもお參りが出來ますのねえ』

母子は願み勝に墓前を去つた。十月の夕暮の墓地には既に冷かな風が吹いて居つた。

最う愈〻兩三日中に立つと云ふ事に成ると、葭江は近所の人達や、多年別懇にして居つた二三人の婦人を招いて、形ばかりの留別の宴を開いて、この地に於ける二十餘年來の事を語つて、實に懷舊の感に堪へなかつた。

別に目ぼしいやうな物は無かつたが、多年使ひ馴れた便利な物や必要な物は東京に送り、その他の物は近所の難儀な人達に分けて遣つた。

さて愈〻今日家を引上げて、人々に送られて、多年住み馴れた家を今立つと云ふ際に迫ると、葭江母子は家に名殘が惜まれて、全く我が親にでも別れるやうな思ひがした。葭江は愈〻今を最後と敷居を跨いで出る時は、おもはず後に振返つて、

『ア、長い間御厄介さまに成りました！』

心の中で禮を言つた。夫を始め兄弟の小供の息を引取つたのも此の家、また今の兄妹を設けたのも

此の家、苦勞の中にも多年雨露を凌がせて貰つたのも此の家、今日の喜びを待得たのも此の家、六疊と二疊と二間しか無い、見るも哀れな茅屋ではあるが、葭江の爲には實に思ひ出の多い家であつた。

今夜一夜大阪に宿つて、明日の一番汽車でズッと東京に行くと云ふので、手荷物は眞個の僅ばかりにして、後は一切土産物まで先に送つて了つたので、葭江母子の旅は誠に世話無しであつた。鞄一ッを二人の手荷物にして、人々に送られて、愈〻路地の外に出て見ると、大阪行の車が二輛待つて居つた。

『何うか皆さん隨分御機嫌宜しく、長々お世話さまに成りまして有がたう存じます！』

母の言葉の後に附いて、

『皆さん御機嫌よう、左樣なら！』

菊代も共に別れを告げた。

『ぢやア愈〻お別れでございますかね、お名殘惜しい！何うかまあお母子さんとも御機嫌宜う！東京にお出でに成りましたら三郎さんに宜しく！菊代さん、また是非歸つて入らッしやいましよ。ですが最う東京にお出でゝしたら、彼方でお嫁さんに行らッしやるでしやうね、さうすればこれが最うお別れですね！』

可惜好い娘をと、近所の小母さん達は皆涙含んで菊代の顔を見た。馴染と云ふは好いもので、菊代も此の土地が去り難くて辛かつた。

『また直に歸つて參ります』

『眞倒に歸つて入らつしやいよ』

二三人の幼馴染は手々に菊代の手を堅く握つて言つた。

葭江母子は其邊から直に車で行く筈だつたが、名殘を惜んで皆後から尾いて來るので、話し〳〵一緒に歩いて、終に堺の町外まで何時の間にか遣つて來た。

時刻は最う彼此三時頃であつた。見送人の中には其の日に追はれて居る人が多數であつた。葭江はハッと氣が着いて立止り、

『これは皆さん何うも御遠方まで有がたうございました！それぢやこれでお別れ申します。皆さんお宅さまへ何うか宜しく……』

『それぢや何うか御機嫌好う！菊代さん左樣なら……』

『ぢやア御免下さいまし！』

母子は遂に車に乘つた。

『皆さん左樣なら！』

『左樣なら……』

車はズッと向ふに行つた。一同名殘を惜んで見送つて居た。母子は時々車の上から振返つて、頭を低げ〳〵向ふへ行つた。その中に最う見えなく成つた。一同は目を拭いて噂をしながら引返すと、夕日の光が雲に薄れて、何だか物悲しいやうな夕風が冷かに吹いて居た。

(四十五) 新　居

三郎は家を借りて世帶道具まで一切買入れ、母や妹を待つて居つても、此方で思ふ程は早く出て來なかつた。

『最う今月も餘日がないが何うしたのだらう？最一度手紙を出して見やうか』

三郎は案じて居ると、或る夜名古屋から明日一番汽車で行くと云ふ電報が來た。三郎は嬉しくて、その夜はおそくまで眠られなかつた。幾度も〳〵其の電報を開いて見た。

翌日會社に出て、夕方引けた後は家に歸らず直に新橋を差して迎ひに出かけて行つた。未だ汽車の

着くには三時間ばかり間があつた。待合所に入つて新聞を讀んで見たり、銀座通を歩いて見たりして三郎は時を移す工夫をしたが、今日は何だかそはく〳〵して、たゞ時間の早く經つのが待たれた。

その中に漸く時刻が來た。三郎は改札口の前に進んで、今か〳〵と汽車の着くのを待受けた。何だか胸の痛い程汽車の着くのを待受けたが、その中にも斯んな嬉しい思ひのするのは、これが初めの經驗であつた。嬉しや終に思ひが屆いて、戀しい母と妹とを乘せて來る汽車の音が先づ聞え、次には遠くに燈が見えた。三郎は喜びに興奮して堅唾を呑み汽車の着くのを待受けた。

終に來た！プラットホームに忽地騷然として人波が起つた。乘客は早ズン〳〵此方へ出て來る。見落すまいと三郎の眼は耀いた。此方へ出て來る乘客の顏や姿を一人々々注意して居ると、見えた、妹は鞄を下げ、母と手を引合つて此方へ面つて遣つて來た。母子とも切符を渡して此方へ出るのを待兼ねて進み出て、

『ア、おッ母さん、菊代來たね！』

言つて直に鞄を取つた。

『ア、三郎さん！』

『兄さん！』

『お疲れでしたらう！』

この一刹那の親子三人の喜びは、過去の苦痛の一切を償つて尙十分餘りあつた。

『サア此方へ入らッしやい！』

三人一緒に停車場の外に出た。母子は先づ見る燈火燦然たる大都府の光景に始めて接して驚いた。銀座邊まで來て、閑靜な飲食店に連れて入つた。色々誂へて取つては見たが、三人とも餘り咽喉には通らなかつた。嬉しさが腹に一杯充滿ちて居たからであつた。

此處では母も妹も寛げまいと思つたので、匆々にして切上げて早く家に連れて歸る事にした。此頃は未だ電車は無かつた。三人は外に出で萬世橋の手前まで鐵道馬車に乘つた。其處で下りて、僅か歩いて淡路町一丁目に來た。

三郎は新しい門の潜戸を開けると、家に燈火が點れて居た。

『サアお入りなさい、おッ母さん此處ですよ』

留守居の老婆さんが戸の開いた音を聞きつけて飛んで出て、內から急いで入口の格子戸を開けた。

『オヤお歸りなさいまし。ア、皆さんお來しに成りましたね！』

母子は入つて座敷に通つた。老婆さんは挨拶して、急いで用達に出かけて行つた。

家は新建で材木は總て白く、疊は青々して居つた。玄關が二疊で座敷が八疊、茶間が四疊半で外に最一ッ六疊の部屋があつた。

『おッ母さん何うか家を御覽下さい。菊代お前も見ておくれ！』

座敷の次が六疊で、此處には新しい箪笥や茶棚や長火鉢などが置いてあつた。

『此處はおッ母さんと菊代の部屋です！』

『マア勿體ない、菊代さん堺の家に比べると、まるで御殿にでも上つたやうだね！』

『マア何もかも新しくて、おッ母さん氣持が好うございますね！』

六疊から二疊の玄關を横切つて紙門を開けると、此處は四疊半で茶間に成つて居り、障子を開ければ臺所で、都の家は何から何まで勝手好く出來て居た。

『おッ母さん、この流しの戸を開けると、井も直外にあります』

『マア左樣ですか。ちやア菊代さん、これからお臺所をするにも樂だね！』

（四十六）友愛

老婆が風月堂に行つてお菓子を買つて來たので、三郎は自分でお茶を入れて二人に薦めた。久振で親子三人揃つて一緒にお茶を食べながら、三郎は自分の近況を成るべく精しく母や妹に知らせて安心させた。

葭江は太く喜んで、最う悉皆安心した。三郎は母が次の六疊に行つて帶を解いたので、

『おッ母さんお休みに成るならばお床を伸べさせませう』

『いゝえまだ休みは致しませんの』

葭江は胴卷を解いて、また帶を元のやうに締め、座敷に返つて三郎と火鉢を隔てゝ坐つた。さうして胴卷の中から拾圓札で金を四百貳拾圓出し、

『サアこれをお前にお返し致します。何うか大切に了つて置いて下さいよ』

三郎は驚いた。

『おッ母さん、これは何うしたお金です？』

『那時やお前に預づた彼のお金です』

『何故お使ひ下さらんでした？私はお使ひ下さつたものと思つて居りましたのに……』

『イエ入用の時には遠慮なく使ひましたよ。だが利息も附き、私も亦時々預けたものですから、また

元通りに成りました。最少しあつたんですがね、今度此方に來るに就けて少々使ひましたんでね……』

『左樣ですか、私は最う斯んな金などは少しも當にしては居ませんでした。ちやアまあ頂いて置きますよ』

『ハア何うか左樣しておくれ！最う斯うしてお前の所に來れば、私も菊代も自分にお金の必要はありません！』

三郎母子は共に辛苦の人であるので、金の無駄遣などは一切しなかつた。三郎も初め上京する時に百五拾圓持つて家を出たが、學資は一切坂本家の方でして貰つたので、卒業した時に未だ金が七拾圓許あつた。三郎は此の金で洋服など拵へやうと思つて居つたが、そんな物も坂本家で祝つてくれたので、今度家を持つ時に始めて使ひ、それで樂に世帶が持てた。

母子三人は此の夜十一時の音を聞いて樂しく寢た。翌朝一緒に家で始めて御飯を食べた。この日は丁度土曜日であつた。

『ちやアおッ母さん、私は今日正午まで行つて參ります。老婆に左樣言ひつけて置きましたから、程なく髮結が參るでせう。何うか菊代に髮を結はせて置いて下さいませんか、午後に一寸坂本さんに御挨拶に參りませう』

『はい承知致しました』

『菊代髮結さんが來たらね、六疊の押入を開けて御覽、彼處に道具があつたやうに思ふ』

『はい』

玄關に出て帽子掛から帽子を外し、

『ちやア行つて參ります』

『御機嫌よう！』

『兄さん御機嫌よう！』

三郎は年來の思ひを遂げて、母妹に親しく送られて、喜んで出て行つた。葭江は子息の立派に成つた姿を見て、この上も無く安心し、一時は我が身の前途を疑つた事もあつたが、今に成つては其の推測は悉く過つて居つた事を知つて、心の中で神佛に深く感謝した。

程なく髮結が來た。菊代は押入を開けて見ると、自分の爲に立派な鏡や鏡臺が買つてあつた。急いで抽斗を開けて見ると、化粧品に至るまで總ての物が調つて居た。

『マア何と云ふ優しい兄さんだらう！』

菊代は涙の出る程嬉しく思つた。葭江も覗いて、

「マア好くも斯んな事にまでねえ！」

菊代は色が白くつて美しい髪を有つた娘であつた。髪結は念を入れて、好い格好の桃割に結つて歸つた。菊代は後で鏡に向つて喜んだ。葭江も喜んで。

「マア好い格好に出來たことねえ！」

葭江は既に髪を剪つて居つたので、最う態〻商賣人の手を煩はす必要は無かつた。母子は髪が出來たので、老婆に聞いて近所のお湯に浴つて來た。菊代はお化粧をして來たので、一層美しい娘に成つた。

その中に午砲が鳴つた。御飯の仕度も既に出來たが、三郎の歸るのを待つて居つた。何處へか廻つたものか、一時少し前に門の潜戸が開いて靴の音が聞えた。

「只今！」

「ア、お歸り！」

「兄さんお歸りなさい！」

座に上つて帽子を脱り、

「ヤア菊代、大變別品さんに成つたね！」

菊代は羞かしがつて、急いで顔を袖に隠して笑ひながら六疊に入つた。兄は笑つて

「そんなに隠れなくつても好いぢや無いか」

「お蔭さまで、菊代も東京風の娘さんに成りました！」

言ひ〳〵葭江は三郎の後に附いて座敷に入つた。

「旦那さまお歸んなさいまし」

老婆は襷を外して挨拶して、三人前の新しいお膳を座敷に出した。親子三人畫も賑かにお箸を取つて御飯を食べた。誰の心も皆各自に嬉しかつた。御飯が濟むと、老婆と菊代がお膳を下げた。

「菊代一寸御處にお出で……。おッ母さん阿母も一寸」

三郎は折靴の中から新しい銀行の預金帳を出して、

「彼の金に參拾圓丈足して、四百五拾圓にして、今日歸りに銀行に定期預にして來ました。この通り菊代の名前に成つて居ります。これはお前の認、この帳面と一緒に大切に納つてお置きよ。おッ母さんまあ斯うして置けば、菊代がお嫁さんに行く時に大分助かるぢやありませんか」

母も菊代も急には禮が言へなんだ。

立派な婦人

（四十七）立派な婦人

三郎の樂みはこれから十分母に孝養を盡すに在つた。妹にも當分十分に休養させる事にした。十一月は散歩の時節に適して居たので、日曜毎に母と妹とを連れて方々に遊びに出かけ、その間に自分も身心の保養に力めた。

一月許經つと、母も妹も大分東京の生活に馴れて來た。同時に土地の勝手にも通じた。僅か三人位の家族で、雇人などを置くのは無益な事であるので、葭江は三郎に勸めて老婆を解傭させて、炊事の任には主に菊代が當る事に成つた。

これまで働いて居た者が、急に手を休めて居ると云ふ事は、葭江に取つては實に大なる苦痛であつた。葭江自身では矢張これまでのやうに賃仕事でもして、切めては幾分なりとも三郎の活計を助けたいのが山々であつた。併しこれを三郎に相談して見た所で、何事も母の心には逆らはぬ三郎も、これには喜んで贊成しさうにも思はれなかつた。

坂本家では葭江を立派な婦人として尊敬し、今後は三郎同樣に成るべく親しくして欲しいやうな樣

子が見えた。駿河臺の北甲賀町と淡路町では坂一ッしか隔たつて居ないので、葭江や菊代が三日も坂本家を訪ねぬと、奥さんが直に女中を迎ひに遣つたり、また自身で訪ねて來られる事も稀で無かつた。葭江も三郎の恩のある家ではあり、外に行くべき所と云つても無いので、時たま坂本家を訪ねるのを何よりの樂みにして居つた。

これが橋渡しに成り、毎日遊んで居るのも退屈でございますからと云ふので、葭江は坂本家の仕事をする事に成つた。勿論これには報酬を望むやうな葭江で無かつた。坂本家でも葭江母子の人格を重んじて、そんな見下げた事はせず、他の方面に於いて出來る丈母子の便宜を計つて居た。

習ひし藝には敵し難しで、葭江は多年の實驗から針は中々巧者であつた。特に羽織袴や重物などと來ては、實に手に入つたものであつた。その上仕事が親切で、葭江に物を頼んでは、他には到底頼む氣に成れなかつた。

坂本家には身分ある婦人が大勢出入した。葭江の手に成つた仕事を見て、物を頼みたがる婦人が段段出來た。十二月に入ると、その數が追々に殖えて來た。菊代と二人で坂本家の仕事を一切仕上げた後で、葭江は外のを引受けて大分仕立てた。最後のは大晦日の夜まで針を取つて居た。

三郎は母の健康を氣遣つた。

『おッ母さん、そんなにお仕事を成さつては、堺に居らした時も同じですね』

『三郎さん勿體ない左樣でないよ。堺に居た時は仕事の外に色々心配がありましたんで氣骨が折れましたが、今はお蔭さまで眞個に氣樂です』

『でも左樣毎日針の持詰ではお疲れでせう。私は阿母のお身體をお案じ申します。坂本さんのをしてあげて下さるのは有がたうございますが、他のはこれから御遠慮なくお斷り成さつて頂きたいものですね！』

『イヱ三郎さん左樣でないよ。これまで稼いで居た者が、急に身體を樂にして、寢たり起きたり自墮落にして居ると、屹度病氣が出て來ます。私を長く丈夫で置いて下さらうとお思ひなら、何うか仕事をさせて下さい。私は遊んで居るのは苦痛で働くのが愉快です』

斯う言はれては三郎も、强ひて止める譯には行かなかつた。

馘江は三郎の母程あつて、實に立派な婦人であつた。

（四十八）嫁　入

今年の元日は久振で、母子三人で雜煮を祝つた。馘江は五十二、三郎は二十四、菊代は明けて十九に成つた。

三郎は妹の未來に就いても自分同樣に考へて居つた。

菊代は小學校を卒業した儘で、文字上の敎育は受けて居なかつたが、これが又兄に似て讀書が好き、文字などは何時習つたとも無しに鮮に書き、讀む事も三郎には不思議な程達者であつた、それに家庭敎育は充分に母の躾を受けて居り、就中裁縫には自然の妙を得て居つた。一ッは全く天才だ、敎へたのでは無い生れて來たのだと、母も常に褒めて居つた。

三郎は妹の天才を、更に學問的に磨き上げさせて、後日の運命の萬一に備へさせて置きたいと思つた。年の明けた所で母にも妹にも其の意を明し、神田一ッ橋の女子職業學校に入學させる事にした。母も喜んだ。妹も喜んで入學し、日々自宅から通學する事に成つた。

向上心に富んだ三郎は、自己に於いても決して身の現在に安んじては居らなかつた。晝間は會社に職務大事と精勤し、更に一年間許英語を研究し、次には或る事が動機に成つて熱心に西班牙語の研究を始めた。

この間の足掛四年間が、三郎親子三人に取つては最も平和で、且つ最も樂しい生活であつた。

三郎は實に自分に對して誠實な者であつた。如何なる場合に於いても、決して我れ自らを欺くやうな事はしなかつた。同時に自分の職務にも誠實、人に對しても亦極めて誠實であつたので、自然と人に信用を受け、就職後既に四年經つた後は、最早確乎たる地位を得て、最初參拾五圓で出たのが、今は六拾圓の月給を受ける身分に成つて居つた。それは決して偶然に其の地位の進んだ譯では無かつた。三郎は實に職務に忠實である上に、能く事の間に合ふ男であつた。何を遣らせても最も手際好く遣つて退けるので、彼は長上にも同僚間にも、大なる前途を有つ人として、切に尊重せられて居つた。

葭江は此の間にも絶えず針を持ち續けて居つた。生活は質素、菊代が能く働いて女中一人使ふでも無いので、貯蓄も身分相當に出來て居た。

この間に三郎は既に二十七に成り、菊代も二十二に成つた。兄妹共に婚期は丁度今であつた。葭江は最う去年あたりから、早く子息に嫁を貰はせたいと思つて居た。坂本家でも氣を揉んだ。けれども三郎は未だ年齢も若いし、一方に於いては家に異分子が入つて來れば、母も幾分氣を置くに違ひない。妹も苦勞をする。何方も長く今日まで世の露霜の寒さに當つて來た身、切めては一年でも長く氣樂に送らせたいと思つて居た。母や坂本家で緣談の事を持ち出すと、切めて妹が學校を卒業するまでは と云つて、今年までは斷つて居つたが、菊代も早今年の七月で學校を立派に卒業して居つた。

三郎も愈〻妻帶せねば成らん事に成つた。併し未だウンと言はなかつた。自分は此處まだ二年三年後れた所で男子としては決して晩婚では無い。けれども妹は既に婚期が十分に熟して居る。先づそれを解決した後でと逃げた。

所が其の心配には及ばなかつた。坂本家で整然と好い相手を探してあつて、菊代が學校を卒業すると、その年の十月中旬に坂本氏の媒介で、當時坂本氏の部下に勤めて居た鎌田某と云ふ青年法學士の許に芽出たく嫁入する事に成つた。妹婿は三郎と同年で、同郷の好みを以て未だ學生時代から坂本家に時々遊びに來て居つたので、三郎も能く其の爲人を知つて居た爲に、緣談は速に成立して、萬事雜作なく進行した。

たつた一人の妹であるので、三郎は思ひ切つて嫁入の仕度を調へて遣つた。兼て妹の結婚準備金に充てゝあつた物などは其儘向ふへ持せて遣つた。菊代は兄の情に泣いた。

『おッ母さん、私眞個に何うしたら宜いでせう？ 兄さんに斯うまでして頂いて、眞個に濟まないぢやありませんか』

『世間に兄さんは澤山あるが、お前の兄さんを見たやうな兄さんは外にはありませんよ。生涯忘れないやうにしてお居で！』

勿論菊代は充分承知して居つた。

（四十九）人生觀

三人の家族が一人減つては家は急に淋しく成つた。

母に炊事はさせられぬ。下婢などは容易に使ふべきもので無いと母が言ふ。さうして早く嫁をと强請む。三郎は愈〻妻帶せねば成らぬ事に成つた。最早何うしても遁れる事が出來なく成つた。

併し嫁を探す必要は無かつた。またこれまでの義理合上他に嫁を探す譯にも行かなかつた。それにしても義理は義理、我が百年を共にする妻は妻、義理と妻とは別物である。義にも堅いが道理にも亦敏い土肥三郎君、殊に親思ひの人であるので、妻の人物が若し我が意に滿たなかつたならば、斷然斷つたに違ひ無いが、それが又何から何まで不思議に揃つた處女であつた。殊に母とも妹とも善く氣が合つて、未だ公然婚約はせぬものゝ、內心で將來を互に許し合つて居る間であつた。

それは何處の娘であつた？

坂本夫人の姉さんの娘であつた。鄕里は坂本家の主人夫婦と同じく越前福井の出身で、立派な人の

血を稟けた娘であつた。名は愛子、芳紀は二十歲、たゞ一篇の哀れな詩を懷いて居つた。

愛子は三ツの秋に母の溫い慈愛に別れた。それが死別で無くて生別であつた。兩親は琴瑟和合して居つたが、飽きも飽かれもせぬ交情を眞同志の何か意見の衝突から血の出る間を引分けて、終に別れ別れにさせたとは實に酷い仕方であつた。

愛子は其の時父方に殘つた。父は忍んで後妻を迎へた。母も餘儀なく再緣した。愛子の繼母は無慈悲であつた。異母の弟や妹が其の中に段々出來た。愛子が若し男子であつたならば、當然家を相續すべきであつたが、不幸にして女子であつた。殘忍なる繼母は愛子一人を退物にして、實に餘所の見る目も傷々しい程苦しめた。

泣いて忍んで十六の春の花までは故鄕で見たが、段々物心を覺えて來ると共に、愛子は繼母の苛責に堪へかねて來た。一方には世間に對しても恥かしく思ふやうに成つて來た。叔母に當る坂本夫人がこれを聞いた。此方は小供が少ないので、姪の苦痛を救ふが爲に、主人に賴んで養女に貰ひ受ける事にした。實父も弱つて居る所であつたので、話は直に成立つた。

この時愛子の生母は東京で暮して居た。芝の高輪に住んで居た。相當な家の妻として暮して居つた。それが內々愛子の事を妹の坂本夫人に賴んだので、彼此以て愛子は叔母に迎へられて、十六の五月上

旬、若葉の一番美しい盛りに、愛子は一人で東京に出て來て、叔母の家庭の一員に加はり、生母にも廻り合つて、互に手と手を取合つて泣いた。これは今から足掛五年前の話で、葭江母子が東京に出て來たのと同じ年で、たゞ愛子の方が五六ヶ月早い丈の相違であつた。

愛子は其頃から心情に富んだ、誠に優しい、而も怜悧な娘であつた。たゞ多年の習慣上幾分内氣過ぎる所はあつたが、女子としては輕佻よりも遙に人の同情を引いた。或る女學校に出て居つたが、時々は葭江の所に裁縫のお稽古に來て居つた。

姿色と云ひ性質と云ひ、これならばと葭江は疾くから目を着けて居つた。緣だ〳〵人間同志の計ひではない。坂本家では三郎を家の養子に欲しいとまで思つた位であつた。併しそれは到底六ケしい相談であるので、切めては愛子を三郎に配せて、長く坂本家の力にしたいと夫婦とも實は内々思つて居た。

三郎愛子の兩人が段々婚期の熟するに連れて、坂本夫人から此の事を先づ葭江に當つて見ると。此方は元より待構へて居た所、二人の話は直に出來た。併し未だ祕して居た。然るに今度菊代も嫁き、いざ愈〳〵三郎の番だと云ふ時に成つて、坂本家の方から三郎の氣を引いて見ると、

『私は萬事母本位でございます！』

期う答へた。所が其の本尊さまは最う早くから家の嫁は愛子さんだと極めて居つた。愛子は坂本家の娘分、相當な人を以て媒介人に定め、愈〳〵結納の交換も芽出たく濟んだ。相方直ちに準備にかゝつた。三郎は結納の交換の濟んだ夜、

『安治川丸で偶然出合つたのが緣に成つて、おもひも寄らぬ人に學問をさせて貰ひ、終には其の人の家から嫁を貰ふ。愛子は我が爲に生れて來て居つたのか。我れは愛子を娶るが爲に、彼の人と安治川丸で出合つたのか、おもへば妙な運命だ。この邊の消息になると、人間の智慧分別では到底解決することは出來ん！さて夫婦と成つた後、また何う云ふ運命が遣つて來るか。人は弱い、人間に何が出來る？唯々神佛の御命令に從ふばかりだ！人間の力は知れて居る。何と藻掻いて見た所で、到底神佛の御命令に背く事は出來ん！背けば破れる。多くの人爲的失敗は、皆是れ悉く神佛の御命令に背いた結果に外ならぬのだ！この世には人間以外に神が在る佛がある！確に在る！人間としては早く神を知つて神と交はり、佛を知つて佛と共に立つ事が肝要だ！早く此に氣の着く人程が幸福だ！成程然うだ。最早疑ふ餘地は無い！斷じて無い！』

三郎は不圖斯んな事を考へた。さうして我れは我が一切を神佛に依つて支配せられて居るやうな氣持がした。

(五十) 春の光

人の母として葭江が最後に爲すべき時は到着した。人の親として最も喜ぶべき今日を期して、四年以來針の先から生み出した元利合して四百餘圓の金を、今度は一文殘さず銀行から引出して、結納も此の金でした。三郎が式の着物も此の金で買つて、自分で念入に縫ひあげた。この外今度の事は一切この金の内で身分相應に立派にした。さうして葭江は神佛並びに家の祖先に向つて一心に感謝した。

『これで人の親としての任務の一端を果させて頂きまして、誠に有がたう存じます！』

この心からの感謝の辭か、神佛の御心に通はぬならば、それこそ大變無神論者が世に大手を振つて歩くやうに成るであらう。葭江が有がたさ嬉しさの餘り、この感謝の辭を腹の底から發した時には、愛子は最早長へに我が家の嫁に成つて、和氣靄々として春日の如き愛の光を放つて居た。

『おッ母さま、おッ母さま！』

『愛さん〳〵！』

三郎は斷じて妻の愛に溺れて其の孝道を改めなかつた。

『妻よ卿に他の要求なし。たゞ我が母、否、卿の母に孝たれかし！』

夫の心確然として此に在り、その妻奚ぞ化せざらん！殊に愛子は辛苦の人。辛苦の人は男女の別なく、概して神聖なものである。愛子は稚い時から苦勞して來たので、人の情が胸に徹へた。

姑も夫も共に辛苦の人。彼に情あり此に愛あり、愛子はまるで俗界から蟬脫して、神の御國に生れて神々〳〵と交はり、如來の御側に歸つて諸菩薩と、日夕慈光の下に樂々と過すやうな思ひがした。

善く夫の意を帶して姑に事ふること最も厚く、而も萬事に至誠を本として出るので、善く姑の意に添うた。

一面に於いては夫を慰藉して、日々人間の戰線に送り、歸れば家庭の女王として、夫の心の創痍を癒めた。三郎が働いて夕方家に歸つて來ると、帽子と鞄を受取つて、

『お歸り遊ばせ、嘸、お疲れで居らッしやいましたでせう！おッ母さまは今日も一日御機嫌で居らッしやいました！』

『ア、左樣か、何よりだ！』

菊代夫婦も時々見舞つた。

愛子は菊代夫婦が何時來ても、一度でも物足らぬ思ひをさせて歸らせた事は無かつた。流石世故に

長けた馥江も、

『感心だ。出來ぬ事だ、良い嫁を貰つた！』

何時も物に喜んで、愛子の優しい心持には全く感心して居つた。

何はおいても母に厚く奉じてくれるので、三郎はこれが何より嬉しかつた。我れに嬉しい感情を與へてくれる者が憎からう筈が無い。三郎も好く愛子を愛して、おもはず妻の手を握り、

『感謝する、この上ながら何うかおッ母さんを、吾に代つて大切にして上げておくれよ』

愛子は幼い時から冷い人達の中に育つて來たが、人の仕合は何處に隠れて居るか分らぬもので、今は斯う云ふ温かい家庭の人と成つたので、長く雪霜の中に飢ゑ凍えて餌を拾つて居た小鳥が、今は急に春の野に出て、暖かい日光の下に翼を心持よく開き、美しい空氣を恣に吸うて、花に霞に咽喉を張つて囀るやうな思ひがした。

『愛子の顔には毎日喜びの色が光つた。愛子の顔に喜びの色が光れば光る程、三郎母子も愉快に其の日を過して居た。

（五十一）發心

翌年の秋、菊の時節に菊代は愛らしい男の子を生んだ。喜びの中に年が明けて、正月も過ぎ二月も經つて、丁度桃の花の咲いた時に、愛子は玉のやうな女兒を擧げた。

馥江は再度の悦びに接して、殆ど身體の仕末の出來ぬ程嬉しかつた。

『人間は何んな苦勞にも堪へるものだね！私は斯んな嬉しい思ひを此の世で爲せて頂かうとは思はなかつた！ア、お慈悲〳〵、何と言つてお禮を申しあげて好いやら分らぬ。』

毎日斯う云つて感謝して居つた。此節の馥江は堺時代とはまるで境遇が一變して了つて、何方へ向いても實に芽出たい事ばかりであつた。この年の四月上旬、庭の櫻は今が丁度滿開と云ふ時節に於いて、坂本家には赤坂邊から濱子に立派なお婿さんが來た。三郎夫婦は勿論馥江も毎日坂本家に詰めて、萬事に手落なく力を添へた。

馥江が此頃の任務は、最早頓と世間と離れて、孫女の馥子を見るに在つた。三郎は我が長女に祖母の名の一字を頂いて付けたのであつた。馥江は孫女を大切に育てゝ樂しんで居つたが、その後早三年經つて、馥子が三ッに成つた秋には、嫁は又姙娠して既に月が滿ちて居つたが、今度は愛らしい男の

子が生れた。葭江は喜びに堪へかねて、却つて人の世を疑つた。

『私の時代には此の家は萬事不如意勝であつたが、悴の代に成ると何事も何事も此方の望み以上に行く。世には斯んな事もあるものだらうか』

然るに其の實際はまだ都合好く行つた。嫂と同じ月に菊代も亦お產をしたが、前と入替に今度此方は女兒であつた。葭江は嫁と娘に笑つた。

『お前達は申し合せて私を喜ばせてくれるのぢや無いか』

葭江は眼鏡の曇を能く拭いて、今度も亦喜び〳〵二人の孫の初衣を縫つた。

『ア、最うこれで思ひ殘す事は更に無い！ア、儲かつた、儲かつた！この世で斯うまで喜ばせて頂かうとは、私は夢にも思はなんだ！』

一方に於いては三郎も女婿も段々〳〵立身して、兩夫婦とも誠に幸福に暮して居つた。住居も最少し廣い所の必要を感じて餘儀なく他に移り、三郎も今は女中の一人や二人使つても、決して贅澤とは他に言はれぬ身分に成つた。三郎夫婦は母と相談して、この時始めて下婢を一人使ふ事に成つた。

葭江はこれで全く家事に手が離れると、今度は熱心にお寺參を始めた。何と感じたものか、他力本願に取縋つて、人間一切の自力を投棄て、明けても暮れても念佛を申し、總てに感謝し總てに滿足し

て、

『ア、有がたい有がたい、何とお禮の申しあげやうもござりませぬ！』

斯う言つた後では直に一心に、念佛を申して居つたが、その柔和なる相貌は、自から人に尊敬の念を起さしめるやうに成つた。

三郎は今度生れた長男には、亡父の名の一字を頂いて、記念の爲に彦一と命名した。

『この兒の面差は何となく祖父さまに酷く似て居るよ』

葭江は常に斯う言つて居た。

長女葭子は大の祖母さん好きであつた。夜に成つて眠くなると、直に祖母さんの側に來て肩に手をかけ、

『祖母ちやま、お眠ちませうよ』

『最うお眠に成りましたかな。それぢや一緒にお眠しませう。皆さんお先に御免なさいよ』

『サア何うか御ゆッくり！』

愛子は必ず。三郎も家に居る時は、夫婦で母を寢床に送り、喜んで枕に就くのを見屆けて、

『何うかおッ母さん御機嫌宜う！』

小供のやうに撫恤つて傍を去るのが常であつた。

（五十二）懷舊

明くる年は幕が變つて新年早々から世の中の哀れな影が又もや三郎の身邊に近く動いて來た。

それは坂本家の變動であつた。

主人信也氏は最早二三年以前に病の爲に官を退いて、駿河臺の家は新夫婦に讓り、去年の秋の末あたりから夫人龍子と友一とを伴れて其の居を相州茅ケ崎に移し、靜に宿痾を養つて居られた。

友一も去年の秋から肋膜炎を病つて居つたが、これが此の正月の四日の夜に亡なつた。友一は誰よりも三郎を慕つて居つたので、その病中三郎は時間の都合さへ出來れば必ず友一を茅ケ崎に訪うて慰めて居つた。現に二日の日も年始がてら茅ケ崎へ行つて見舞つて見ると、友一の病氣は大分容體が良くなかつた。三郎は大きに心配して歸り、五日には又是非容體を見に行かうと思つて居ると、四日の午後に危篤と云ふ電報が來た。一同驚いて茅ケ崎に駈着けると、友一は間も無く死んだ。實に氣の毒な生涯であつた。

この悲歎に引續いて、今度は坂本氏が段々重體に陷られた。三郎並びに其の家族は交代に茅ケ崎通をして居つたが、寒明頃に成つて、土肥三郎が終生忘れる事の出來ぬ恩人は、傷ましや遂に湘南一片の烟と滅えた。

三郎は遺族の人々の爲に一廉の力に成つて居つた。さうしてこれを以て故人に對する幾分の感謝の記念として居つた。

未亡人龍子は其後東京に歸つて、娘夫婦と暮して居つた。葭江は絶えず未亡人と往復して、談話の序には必ず世を說き人を說き又未來を說いて聞せて居た。これが緣に成つて、未亡人も葭江と一緒に連れ立つて、善くお寺詣などをするやうに成つた。

この年の夏、葭江は一夜突として兼ての望みを打明けた。

『三郎さん、長い間お世話に成つた土地ですから、私は此の夏一度泉州へ行つて、昔馴染の方々にもお目にかゝり、それからお父さまや二人の小供のお骨をあげて、此方へお供をして來たいと思ひますが如何でせうな？』

三郎もこれは兼て然う思つて居つたが、何しろ忙しい身體であるので、まだ其の望みを果し得なかつた。所が今その時節が到來したと見えて、今月ならば一週間か二週間の暇を得られぬ事も無かつた。

何はおいても母の言ふ事、三郎は快く、

『ぢやアおッ母さん、私がお供を致しませう。然うすれば安心ですから・・・』

『ナニ未だ私一人で行かれますよ。お前の其の忙しい身體で・・・』

『イエ今年は暑中休暇が取れます。ぢやア早速お供をする事に致しませう！』

『然うして貰へば結構は結構だがね！』

時節の來た時は妙なもので、話は早速纏まつた。二三日の間に悉皆土産物を調へて、三郎母子は葭子を連れて東京を立つた。

暑い時分であるので、東海道を夜汽車で通し、翌日の午前十時頃大坂に着いた。一先宿に就いて三郎は先づ角井君を天王寺の清水筋に訪うた。角井君は四五年前に前の會社を罷めて、今では他の會社に勤めて居つた。三郎は大阪まで來る機會は時々あつたので、その度毎に角井君を訪ひ、また都合の出來た時は大至急で堺へ行つて墓參もした。併し葭江が此方へ來たのは、その後今度が始めであつた。おッ母さんが見えました、それはお珍らしいと角井君は大騒ぎして、今夜は是非何うか此方で御一泊を願ひたいと云ふ事に成つた。この夜母子は角井君の家に一泊し、色々昔話をした。葭江は厚く昔の禮を述べた。角井君は恐縮して、

『いゝえ、お禮は私こそ申しあげなければ成りません。何うも近年は色々土肥さんの御厄介に預りまして・・・』

三郎は昔を忘れず角井君の爲に、この兩三年は内々大いに盡力して居たのであつた。翌朝涼しい間に堺に行き、先づ菩提寺に參つてお經を上げて貰ひ、人を雇ふてお骨を上げて壺に納めた。

『アゝおッ母さんこれで安心致しました！何時も此方へ參る度に、今度は〳〵と思ひながらつひ今日までね、實に相濟まん事でした！』

葭江は答へた。

『幾ら何と思つてもね、矢張その時節が來なければね！』

三郎も何だかそんな思ひがした。お骨は一先お寺に預けて置き、母子で一々昔馴染の家を訪ねて見た。十年と云へば一昔で、何の家にも變遷があり、皆各自に樣子が變つて中には既に死んだ人なども大分あり、或は他に轉住し、又は全く行方の知れぬやうに成つた人も二三人あつた。

馴染の土地は戀しいもので、母子は堺に二夜泊り、知合の人達と昔を語つて愉快に過した。この時以前住んで居た土地を尋ねて行つて見ると、家は既に取拂はれて、跡には石鹸工場が建つて居た。併し其の附近一圓は一木一草に至るまで皆思出の種に成つて、三郎母子は何となく此の地が戀しく、色

色昔の事を思ひ出して、實に懷舊の感に堪へなかつた。

一夜月に乘じて大濱にも納涼に出て見た。月も海も風も昔の夏の夜に其儘であつた。母は月の濱に立つて海を見渡し、いかにも懷舊の情に堪へぬものゝ如く、

『アヽ三郎さん幾年前の事でしたらうな？　お前が始めて安治川丸に乘つて行く時、何でも寒い晩方の事であつたが、私は菊代を伴れて此の濱に來て、餘所ながらお前を見送つて泣いた事を覺えて居ります！』

その頃の事を思ひ出すと、三郎も實に懷舊の感に堪へなかつた。母子は三日目に堺を去つて大阪に來た。それから葭江は三郎と一緒に三十幾年振で故郷郡山に來て見たが、まるで樣子が變つて了つて、何處が何うであつたやら、少しも見當が附かなかつた。祖先の菩提寺を尋ねて見たが、寺は燒けて建て變り、位牌一ッ殘つても居なかつた。

奈良を經て京都に廻り、二日滯在して三郎は母に京都見物をさせた。歸りに伊豆の修禪寺に寄り、此處で一週間湯治をさせて、八月の月末に母子は葭子を伴れて東京に歸つて來た。

(五十三) 母の臨終

この年の十月に土肥家先祖代々のを始め、亡父彦七郎のも又亡二兄の石碑も立派に出來たので、三郎は染井に二十坪許の墓地を買つて、この夏泉州からお供をして來たお骨を此處に改葬し、同時に先祖を始め亡父以下の年忌供養を營んだ。

『アヽ有がたい有がたい、これで最う三郎さん、私は何にも此の世に心殘はないよ』

母は非常に喜んだ。佛事供養を營んだ後は誰も何となく心持の好いもので、三郎もこれで大きに安心した。

十月は何事も無く過ぎた。月は既に十一月に入り、人は兎角風を引き易い時節に成ると、葭江も風の心地で床に就いた。三郎は此の日も出勤して居つたが、愛子は直に醫者を呼び、菊代の許にも態、知らせた。

丁度醫者の來て居る所に菊代も急いで見舞に來た。醫者は極めて輕く言つた。

『ナニお風邪でございませう』

菊代も安心して歸つた。併し葭江は今度は何うしても起きられなかつた。醫者は毎日來て見て居つ

た。菊代夫婦も日曜日に小供を連れて見舞に來た。三郎は今日は朝から家に居た。この日も病人は大して病いやうにも見受けなかつた。葭江は皆の居る傍で言つた。

『私は別に何處が何う病いとも覺えぬが、今度は何うやら最う皆さんにお暇らしい！何うも長々お世話さまに成りまして有がたうございました！厚くお禮を申しあげますよ』

皆驚いて色々力を附けて見た。併し病人は得心しなかつた。

『お蔭さまで私は既う、何から何まで私の任務を果させて頂きました！小供も兄姉とも立派に育ち皆それ〳〵善い人達に添ひ合せ、孫も早二人宛顏を見させて頂きました！最う私は居なくても、後に何にも差支はありません！ア、、實に結構な生涯を送らせて頂きました。餘りに勿體なくて、彼方にお禮の申しやうがありません！』

言つて一心に念佛を申し、

『假令私の病氣が重くならうと、三郎さん始め、皆決して案じて下さるなよ。私はこれで最う私の任務を果させて頂いて、如來さまのお膝元に歸らせて頂くのです。斯んな喜ばしい事がありませうか。何うか決して歎いて下さるなよ。人間の命數は皆各自に定つて居ります。我が任務の了つた時は、我が頂いて來た命數の了つた時です。我が頂いて來た丈の任務を未だ終らせて頂かぬ中は、家のお父さ

まの死際に仰せられたやうに、假令何んな危い目に遭はうと、また假令何んな大病をしやうとも、決して死ぬる氣遣は無いが、最う我が頂いて來た丈の任務を果させて頂いたとなると、即ち我が定命の盡きた時は、如何なる名醫の手にかゝらうとも、決して一日半時も生き延びられるものでは無い！一座の人も同じ事、何時何んな大病に罹らうとも皆決して怖れなさんなよ。今もお話をした通り、我が頂いて來た丈の任務を果させて頂かぬ中は、何んな事があつても決して死ぬるものでは無い！然の代りに皆胸を据ゑてお居でなさいよ。我が頂いて來た丈の任務を果させて頂いた時は、いかに此の世に心を殘して見ても最ういかん！我が死は既に近附いた時である。人の生身は弱いもの。無常の風は今吹いて來ぬとも限らぬ？如來さまの御本願にお縋り申して居らうならば、何時眼を閉ぢやうと安心なものだ！この心がけは片時も忘れぬやうにして、正直に其の日〳〵の任務を男は男、女は女でお盡しなさい！私は六十年來私の長い生涯に試して來ました。人間は此の外には如何に探し求めても進むべき道は無い！ア、、有がたい有がたい！私はこれで最う結構な所に歸らせて頂きます！若し此の世の事に執着いて居つて、人間には何時か一度は必ず死と云ふものゝある事を知らずに居つたならば、私は此際定めて慌てる事でありませうが、ア、、有がたい私は兼て如來さまの御本願をお聞かせに預つて居りました！何時何う成らうとも少しも恐れぬ用意を早くして置いて、皆この世を大切にお勤めな